

国道9号線バイパス建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書

— II —

昭和52年3月

教育委員会

国道9号線バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

- I -

昭和52年3月

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では昭和50年度から建設省中国地方建設局の依頼を受けて、一般国道9号線バイパス建設事業に伴う計画路線内の埋蔵文化財包含地に関する発掘調査を実施してきています。本年度はその2年次目にあたり、昨年、禾作工房跡、埴輪窯跡などが検出され、注目された松江市久田町所在平所遺跡について関連の再調査を行うとともに、かつて出雲國守跡に北定されていた八束郡東出雲町出雲郷所在の夫敷遺跡の小規模な試掘調査を実施しました。

この報告書は、その調査結果をまとめたものであります。何分にも限られた期間内に遺物整理等を終え、印刷に付きなければならないという状況にあったため、不備な点も多々あると思いますが、本報告を通して多少なりとも広く一般の埋蔵文化財に対する理解と関心が高まれば幸いに存じます。

なお、本書を刊行するにあたりご協力をいただいた建設省中国地方建設局松江国道工事務所をはじめ地元関係各位に衷心よりお礼申し上げます。

昭和52年3月

島根県教育委員会

教育長 中村芳二郎

例　　言

- 1 本書は、建設省中國地方建設局松江国道工事事務所の委託を受けて、鳥根県教育委員会が実施した一般国道9号線バイパス建設予定地内における埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点は、松江市矢田町字平所所在の平所遺跡と八束郡東出雲町山雲郷字上大敷ほか所在の大敷遺跡の2箇所で、次のような調査組織、構成で調査を行った。
 - 発掘担当者 松本岩雄（鳥根県教育委員会文化課主事）
 - 調査員 三宅博士（同文化課嘱託）
 - 調査補助員 勝部 博（広島大学卒業生）、細井伸二、浪花秀明（以上、愛知学院大学学生）、内田律雄（青山学院大学学生）、柳浦後一（国学院大学学生）、花谷浩（京都大学学生）、若槻真治（岡山大学学生）
- 3 調査及び整理にあたっては次の方々からご指導、ご助言を賜った（敬称略、順不同）。
 - 山本 清（鳥根大学名誉教授）
 - 町田 章（奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査隊）
 - 寺村光晴（和洋女子大学教授）
- 4 遺物整理には以上のもの他に次のものが参加した。
 - 前島己基（文化課主事）、片岡詩子（国学院大学学生）、近藤加代子、木間恵美子、吉野百合子（以上八雲立つ風上記の丘資料館）
- 5 描載図面は、三宅博士、勝部博、片岡詩子（国学院大学学生）、原田律夫（本庄考古学研究室）の製図にかかり、写真は三宅博士、勝部博、松本岩雄の撮影になるものである。
- 6 報告書の作成は、調査及び遺物整理に携った者の集団討議をもとにその内容を平所遺跡については前島己基、松本岩雄、三宅博士、勝部博が分担執筆し（各章ごとに執筆者を記す）、大敷遺跡については三宅博士がとりまとめ、全体の編集は前島己基、松本岩雄がこれを行った。
- 7 なお、昨年平所遺跡から発見された埴輪窓跡については出土品の馬、家、鹿、人物埴輪、埴輪円筒などを一括の重要文化財に指定申請中であり、現在なおその整理・復原作業を行っているため詳細については別に機会得て報告する予定である。

はじめに

昭和50年度から島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の依頼を受けて、一般国道9号線バイパス建設事業に伴う計画路線内の埋蔵文化財保護地に関する発掘調査を実施してきている。本年はその2年度目にあたり、まず調査の実施に先立って事務的な打合せと併行し、調査対象遺跡について協議を行った。その結果、今年度は昨年玉作工房跡、埴輪窯跡などが検出され、注目されることとなった松江市矢田町所在の平所遺跡について付近の地形等を勘案してさらに周囲の関連調査を実施し、併せて地名等からかつて出雲國庁跡に推定されていた八束郡東出雲町出雲郷所在の大敷遺跡について遺跡としての存在を確認するための小規模な試掘調査を行うことになった。そして、昭和51年度当初予算で受託事業として400万円の調査費を計上し、事務的な手続きを進めるとともに昭和51年7月29日に建設省中国地方建設局長と県教育長との間で契約書がかわされ、昭和51年7月21日から9月10日までの延べ52日を費して平所遺跡の発掘調査、つづいて昭和51年11月24日から12月4日までの11日を費して大敷遺跡の試掘調査を行った。

以下、それらの調査結果を報告することにしよう。



調査対象地 (1. 平所遺跡、2. 大敷遺跡)

1 : 100000

平所遺跡

2

—松江市矢田町字平所所在—

1 調査の経過.....	1
2 位置と歴史的環境.....	2
3 遺跡の概要.....	8
4 玉作工房跡と滑状遺構.....	15
(i) 玉作工房跡.....	15
(ii) 滑状遺構.....	17
(iii) 遺物出土状態.....	20
5 出土遺物の観察.....	26
(i) 古式土師器.....	26
(ii) 玉作関係遺物.....	36
6 結語.....	44

挿 図 目 次

第1図 造跡の位置	3
第2図 出云国玉作遺跡の分布	5
第3図 調査区配図	8
第4図 渡構配図	10
第5図 城輪島略図	12
第6図 玉作工房跡実測図	15
第7図 工作用ピット実測図	17
第8図 市伏遺構実測図	18
第9図 玉作工房跡と溝状遺構実測図	19
第10図 玉作工房跡・溝状遺構内土器出土地点図	21
第11図 溝状遺構内(南半分)土器出土状態	22
第12図 玉作工房跡・溝状遺構内玉類出土土地点図	23
第13図 工房跡・溝状遺構内工具類出土土地点図	25
第14図 溝状遺構出土土器実測図(1)	27
第15図 溝状遺構出土土器実測図(2)	29
第16図 溝状遺構出土土器実測図(3)	31
第17図 溝状遺構出土土器実測図(4)	33
第18図 玉作工房跡出土土器実測図	35
第19図 山形跡出土水晶製玉類未成品・原石実測図	36
第20図 水晶製玉類製作工程模式図	37
第21図 工房跡山上鉄製工具実測図	38
第22図 工房跡出土砥石・古石・上製品実測図	38
第23図 溝状遺構出土水晶製玉類実測図	40
第24図 球玉製玉類実測図	41
第25図 鉄製工具実測図	42
第26図 溝状遺構出土砥石・古石実測図	43
第27図 丸丸第3号土壤窯出土土器実測図	46
第28図 鞍尾土壤窯群の崩土土壤窯出土土器実測図	48
第29図 仲仙寺9号・10号窯出土土器実測図	49
第30図 錐尾A5号土壤窯出土土器実測図	50
第31図 松木1号窯出土土器実測図	51
第32図 小谷土壤窯出土土器実測図	52
第33図 大成・神原神社古窯出土土器実測図	53
第34図 大東高校々逆造跡山上土器実測図	54
第35図 道物出土分布からみた工房跡内の空間分割想定図	60

図 版 目 次

- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 図版I-1 遺跡遺景 | 図版VII-1 溝状遺構出土土器 |
| 図版I-2 這跡近景 | 図版VII-2 溝状遺構出土土器 |
| 図版II-1 扇腹部の遺構群 | 図版VIII-1 溝状遺構出土土器 |
| 図版II-2 扇腹部の遺構群 | 図版VIII-2 溝状遺構出土土器細部 |
| 図版III-1 工作工跡跡 | 図版IX-1 工作跡出土玉類未成品と鉢片 |
| 図版III-2 工作用ビット | 図版IX-2 溝状遺構出土玉類未成品と鉢片 |
| 図版III-3 玉類未成品出土状態 | 図版X-1 溝状遺構出土遺物 |
| 図版III-4 第2ビット内土層出土状態 | 図版XI-1 工作跡出土鉄製工具 |
| 図版IV-1 溝状遺構 | 図版XI-2 工作跡出土製品 |
| 図版IV-2 溝内土層出土状態 | 図版XI-3 穿孔貝先端の形状が知られる水晶製
品 |
| 図版IV-3 溝内玉類出土状態 | 図版XI-4 地面に残る鉄製工具による擦痕 |
| 図版IV-4 溝内土層堆積状況 | 図版XI-5 溝状遺構出土鉄製工具 |
| 図版V 溝状遺構出土土器 | 図版XI-6 工作跡出土砾石と白石 |
| 図版VI 溝状遺構出土土器 | 図版XI-7 溝状遺構出土砾石と白石 |
| 図版VII-1 溝状遺構出土土器 | |
| 図版VII-2 溝状遺構出土土器 | |

1 調査の経過

平所遺跡については、昨年の調査において丘陵部から古墳時代前闇の堅穴式住居跡3、玉作工房跡1、溝状遺構1、丘陵で古墳時代後期の埴輪窓跡1が検出されたほか、丘陵斜面では埋葬に関係するとみられる大形の古式土師器2、祭祀にかかわると考えられる遺構1も発見された。そのため本年度は周囲の地形から丘陵部遺構群の上方にみられる平坦部にさらに遺構の存在することを想定し、併せて丘陵の埴輪窓跡周辺に窓を構築するのに好条件の場所がみられることなどから、周囲の発掘調査を行うこととなったものである。

今年度の調査は松本岩雄・三宅博士が担当し、勝部衛・花谷浩（京都大学学生）、柳浦俊一・片岡詩子（国学院大学学生）、若槻真治（岡山大学学生）、堀井伸二・浪花秀明（愛知学院大学学生）、内田律雄（青山学院大学学生）の協力を得てこれを行った。調査期間は昭和51年7月21日から9月10日までの延べ52日間を要した。

調査はまず本年度対象地区の立木伐採から始め、これと併行して縮尺200分の1の地形測量を行った。測区の設定にあたっては昨年度調査に準じ、これを遂次延長して行うこととした。すなわち、調査対象地区全域に南北線を磁北にとり、これと直交する東西線を座標軸に $2 \times 2\text{m}$ の方眼を組んでグリッドの1単位とした。なお、グリッドの設定にあたっては南北線・東西線の交点を基準に南から北に向ってN1・N2・N3……、同様に東西線は西からE1・E2・E3……とし、グリッド名はそれぞれ北東コーナーの交点をもって呼ぶことにした。

調査は埴輪窓跡の存在が予想された丘陵から開始したが、ここでは後世の削平等が苦しく、遺構を検出することができなかった。また原形を留めていた丘陵についても遺構は発見されなかった。続いて丘陵部遺構群の上方にみられる平坦部の調査に入った。この平坦部は当初集落を営む上で適地と思われたが、このあたりはかつて泥炭を探査した矢田炭坑跡の一端で、探査の際に削平された場所であることが判明した。すなわち、丘陵斜面を $20 \times 15\text{m}$ の範囲で削平し、そこに探査のためのコンクリート施設が構築されていた。一方、昨年度検出した玉作工房跡に接して南側にわずかばかりの平坦部がみられることから、この地点の調査を実施し、その結果、弧状に走る溝状遺構を検出するに至った。溝状遺構は玉作工房跡の南壁をとり巻くように弓状にめぐり、かつ深さがかなり深いことから、さらに東壁、北壁側にも及んでいることが予想され、昨年度調査した2・3号住居跡の周辺を再調査することにした。昨年度は冬期調査という悪条件のため確認しえなかつたが、再発

掘の結果、3号住居跡床面から昨年度検出した溝状遺構を横切ってその西側にかけて溝底を検出し、これが全体として玉作工房跡を弧状にとり巻くことを確認するに至った。溝内からは多量の水晶製玉類未成品・剥片・屑片・攻玉工具をはじめ古式土器が出土し、玉作工房跡との位置関係、出土遺物の様相などから両者は密接な関連をもつ施設と考えられるものであった。

結局、今年度検出した遺構は溝状遺構1のみであったが、溝内から多量の遺物が出土したうえ、計画路線内のはば全域にわたって試掘坑を穿ったため予想以上の日数を要し、9月10日に現場での作業を終了した。

出土遺物は取り上げとともに逐次、八美立つ風土記の丘資料館にもち帰り、整理を行った。整理は主として三宅・鶴部・松本があたり、近藤加代子・吉野百合子両氏の協力を得た。

(松本岩進)

2 位 置 と 歴 史 的 環 境

平所遺跡は、松江市の南部に広がる意宇川下流平野の北部丘陵地帯の一角にあり、その所在する地籍は松江市矢田町字平所532-2番地ほかである。すなわち、『出雲國風土記』に神名権野とある茶臼山（標高171m）の東北麓、南から北に派生する支丘の西側斜面に位置し、その標高は20m～30mを測る。このあたりは、ちょうど国道9号線沿いの矢田からのびる細長い谷頭水田が茶臼山の東北麓につきあたった所で、遺跡の西側は現在大半が宅地化されているが、かつては狭隘な水田が営まれていた。

さて、この周辺は茶臼山とその南方に展開する意宇川下流平野を中心として各種多数の遺跡が存在し、県下でも屈指の遺跡密集地帯となっている。この各種遺跡の展開基盤となつた意宇平野は、南の八束郡八雲村の天狗山と八雲山の山塊に源を発し、北流しながら中海へ注ぐ意宇川が形成した東西4km、南北1kmの沖積平野で規模はさほど大きくないが、その反面安定した美田地帯で、出雲部においては西の出雲平野、東の安来平野に次ぐ穀倉地帯となっている。

この平野に人間の営みが開始されたのは古く縄文時代にさかのぼり、以来、弥生時代、占領時代を経て奈良時代になると、平野の南側に出雲国守が、また、北側の台地には攝分僧寺・尼寺が設置されるなど古代出雲の政治・文化の中心地として盛行をきわめたところである。

まず、縄文時代の遺跡として知られているのは、松江市竹矢町の法華寺前遺跡、才塚遺跡、竹矢小学校々庭遺跡、八幡町では的場遺跡、さっぺい遺跡などがあり、このうち竹矢



第1図 遺跡の位置 1:50000

- 1 平野遺跡 2 井ノ堀古墳群 3 手間古墳 4 魚見聚古墳 5 竹矢岩舟古墳 6 才ノ峰古墳群 7 山田園分寺 8 中竹矢古墳 9 出雲國分尼寺 10 法華寺前遺跡 11 宮内遺跡 12 竹矢小学校跡遺跡 13 の場塚古墳 14 さっぺい遺跡 15 河太加波社境内遺跡 16 大敷遺跡 17 布田遺跡 18 三軒屋遺跡 19 才冢遺跡 20 宮ノ後遺跡 21 丁ノ明神遺跡 22 出雲國守 23 安部谷横穴群 24 大草岩船古墳 25 吉天神古墳 26 東吾擣山古墳群 27 西百塚山古墳群 28 御崎山古墳 29 岩屋後古墳 30 圓田山古墳群 31 四王寺跡 32 山代円墳 33 山代方墳 34 山代二子塚 35 燕塚 36 向山西古墳 37 来美魔寺 38 来美古墳 39 狐谷横穴群 40 王免横穴群

小学校々庭遺跡では前期、中期的遺跡では中期の縦文式土器が出土している。

弥生時代に入ると、遺跡は山麓線沿いからさらに平野の中央部へと分布の広がりをみせ、その数も前時代より増加の傾向をたどる。平底八幡宮の参道前方にある宮内遺跡をはじめ、平野の中央に近い水田中の布田遺跡、三軒屋遺跡などがそれである。また、大草町宮ノ後、丁ノ明神付近、さらには出雲國分寺付近にかけての水田中からも、かなりの弥生式遺物が採集されている。これらのうち布田遺跡出土の土器は、前期後半の特徴をそなえるもので、これによってこの平野でも他地域とそう離れることなく農耕技術が伝えられ、これまでの狩猟と漁撈を中心とした採集経済とは、質的に異なる集団的で計画的な農耕社会へと移行していったことがうかがえる。そして、そうした中で船載の細形銅劍を保有する有力な集落が平野の一角に営まれる。伝竹矢町國分寺付近出土と伝えられるその銅劍は、日本海岸線沿いに北九州からもたらされたと思われるものである。

やがて古墳時代を迎えると、4世紀前半に松江市八幡町的場土墳墓にみられるような墳墓が現われる。これは小規模ながら視覚的表現にうったえた形で方形墓域を形成し、斜面に石列をめぐらすもので、区画内に土壙1を穿っている。土壙上面に供獻されていた古式

土師器は、特殊壺・器台、鼓形器台とこれに組み合う壺、注口土器のほか高环、低脚付环形土器、甕形土器など各器種のものを含み、それらは同時性の確実な括遺物として的場式土器と呼称され、雞尾I式七器とともに山陰中央部出土の古式土師器のなかでは最古式の様式とされるものである。

これにつぐものとして米美古墳があげられる。平所遺跡にほど近い松江市尖田町米美的丘陵上に営まれた、いわゆる四隅突出型の特殊方墳がそれである。一辺約13mの方形台状の墳墓の隅角部が放射状に突出する特異な形状をもち、墳裾に列石、斜面に貼付列石を伴い、7個の土礫が検出されている。同型の古墳はいまのところ出雲部を中心に限らず8例知られているほか、最近、北隣の富山市杉谷古墳群でも1例注意されている。

これら発生期の墳墓につぐものはいまのところ注意されていないが、古墳時代中期以降になると、茶臼山の西側山麓、山代町の台地と茶臼山の東北側にあたる大橋川沿いの丘陵に次々と大形の古墳が築かれる。すなわち、前方後方墳で全長90mを割り、県下最大の規模を誇る山代二子塚、その西南水田中に古くから方墳として著名的な大庭鶴塚、また大橋川沿いの丘陵上に築かれた前方後円墳の手間古墳、井ノ奥4号墳、魚見塚古墳などがそれである。さらに規模はおとるが、中竹矢の丘陵には昨年度報告した才ノ峰古墳群のほか竹矢岩舟古墳が築かれている。

やがて、平野の南側、東西に横たわる大草丘陵に西百塚、東百塚古墳群が形成されはじめる。個々の規模はさほど大きくなりないが、その数約80基を数える大古墳群である。ついで6世紀代も後半になると内部構造に横穴式石室をそなえ、家形石棺を内蔵する岡田山古墳、御崎山古墳などが築かれる一方、この地方に特徴的な石室式石室が盛行し、山代円墳、同方墳、岩屋後古墳、古天神古墳などにそれが内蔵され、横穴もその影響を受けてや入四注式のものが流行する。横穴のなかには安部谷、十王免、狐谷横穴群のように家形石棺を内蔵するもの、複式構造をもつもの、壁画を行するものなど各種のものが知られているが、やがてこれら横穴の衰退をもって意宇平野に展開した古墳文化は終焉をつげる。

ところで、古墳文化の展開に連関して、ここに注目すべき事実がある。すなわち、宍宇川下流平野における古墳は全時期を通じて方墳、前方後方墳など、いわゆる方系墳が主体をなすが、そうした中で前記したように5世紀後半から6世紀前半にかけて一時的に手間、井ノ奥4号墳、魚見塚といった50~70m級の前方後円墳が築かれていることである。前方後円墳が大和朝廷と密接な関係のもとに出現するものとすれば、5世紀後半から6世紀前半にかけて方系墳の伝統を遵守するこの宍宇川下流平野に大和朝廷を中心とする大きな政治的、社会的うねりが波及したことを物語るものと解すべきであろう。

とまれ、この地はやがて平野の南側中央の大草町六所神社付近に出雲国守、またこれと

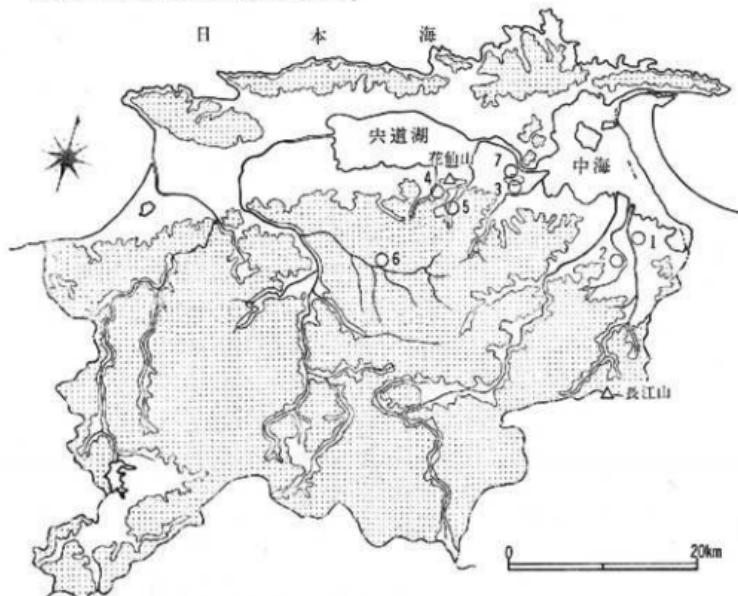
相対するように平野北東の台地に出雲国分僧・尼寺の両官寺が設けられ、名実ともに出雲國の中心となるが、その基盤はすでにそうした地域色の強い古墳文化の発展期に形成されたものとみることができる。

平所遺跡をとりまく歴史的環境は大略以上のとおりである。

ところで、平所遺跡では昨年、玉作工房跡が発見され、また今度の調査で玉作工房跡と密接な関係をもつ溝状構造が検出された。周知の通り出雲地方には多くの玉作関係遺跡があり、特に『古語拾遺』や『延喜式』等にみえる、いわゆる出雲國玉作は古文献に記載された全国でも唯一に近い玉作として古くから大きな関心がもたれ、それが考古学的事実とも一致するという点、きわめて興味ある問題を提供するものである。

平所遺跡発見の玉作関係遺構、遺物との関連からここで、これまで出雲国内で知られている玉作遺跡を概観しておくことにしよう。

1. 佐久保遺跡 安来市佐久保町の字玉造から字大原にかけて所在する。このあたりは安来平野の東端にあたり、遺跡は伯太川下流の右岸丘陵上に位置している。発掘調査はなされていないが、これまで碧玉製管玉未成品、碧玉原石とともに6世紀代のものとみられる須恵器片、土師器片が採集されている。^(註1)



第2図 出雲國玉作遺跡の分布

- | | | | |
|-----------------|------------|------------|-----------|
| 1 佐久保遺跡 | 2 折坂遺跡 | 3 出雲國内玉作遺跡 | 4 史跡出雲玉作跡 |
| 5 足部(後原・中島)玉作遺跡 | 6 大東高校々庭遺跡 | 7 平所遺跡 | |

2. 折坂遺跡 安来市折坂町鍵尾に所在し、砂岩製の筋砥石が1個採集されている。この筋砥石は長さ11.5cm、幅15.5cm、厚さ10cmあまりの大きさで、断面U字形の筋が5本みられる玉磨き道具のものである。また、以前この付近で水晶、瑪瑙等が採集されていることからも玉作関係遺跡としての可能性が強い。

3. 出雲國内玉作遺跡 松江市大草町の六所神社周辺に所在し、意宇川下流平野の南辺部中央の微高地土に位置する。^(註3)このあたりは昭和43年から45年にかけて行われた発掘調査により出雲國内玉作遺跡の存在が明らかになったところであるが、玉作関係の遺構については確認されていない。ただ、これまで国府敷地内の字日岸田・堂田・丁ノ明神・大社分田・宮ノ後・作兵衛田・後領田等の諸地点で玉作関係遺物が採集されており、その範囲はおよそ200m四方にわたっている。玉作関係遺物としては碧玉製こま1、碧玉製勾玉未成品1、碧玉製平玉未成品3、瑪瑙製勾玉3、水晶製平玉1、水晶製切子玉3、筋砥石25のほか多数の原石、石屑が知られている。ただし、十分な調査が行われていない関係もあって発見地の全てを玉作関係の遺跡として認めるにはなお若干の疑問が残り、かつ年代、性格等についても不明な点が多い。

4. 史跡出雲玉作跡 八束郡玉湯町大字玉造字宮垣を中心とする地内にあり、碧玉・水晶・瑪瑙等の玉材産出地である花仙山の南西麓に位置する。^(註4)このあたりは史跡出雲玉作跡を中心にしてこれまで宇玉ノ宮・別所谷・向新宮・平床等の各地で玉作関係遺物が多数採集されており、ここが出雲玉作の中では最も盛行をきわめた玉作であることが知られる。史跡出雲玉作跡は昭和44年から46年にかけて3次にわたる発掘調査が行われ、その結果古墳時代前期から奈良・平安時代に及ぶ多数の玉作工房跡が検出された。このうち71C II号址は一辺約5.7mの隅丸方形窓穴で竪穴内中央に長方形の工作用ピットを伴い、床面が東へ9度傾斜する特異な構造をもつものであった。しかも、多数の碧玉製管玉未成品・剥片・砥石等の各種玉作関係遺物とともに小谷式の占式七師器が出土しており、これがこれまでの調査結果に関する限り木遺跡において玉作の上限を示すものであった。また、これとはほぼ同時期でかつ同様な半傾斜床を有する71C I号址は、明確な玉作工房跡としては確認されていないが、窓穴の周囲を弧状に走る溝状遺構の検出されていることが興味をひく。

古墳時代後期の玉作工房跡としては69A I号址、69B III号址、71A I号址、71B I号址等があり、これらはいずれも梯形プランで工作用ピットが壁際に位置し、各種多数の玉作関係遺物の出土をみている。なかでも71B I号址からは多量の玉作関係遺物が出土し、完成品、未完成品、原石、大形剥片は1,500点以上にも達している。玉類の種類としては滑石製臼玉、碧玉製管玉、碧玉製勾玉のほか水晶製丸玉などがあり、特に滑石製臼玉未完成品の

多いことが注目される。これらとともに出土した須恵器は山陰の須恵器を4期に分けた場合^(註5)の第Ⅱ期の特徴をそなえるものであった。

このほか奈良・平安時代の工房跡等も発見されており、史跡出雲玉作跡は質的にも量的にも他に比類をみない優れた攻玉遺跡で、生産遺跡の研究上きわめて重要な遺跡といえる。

5. 忌部（後原・中島）玉作遺跡 松江市忌部町にあり、史跡出雲玉作跡とともに玉材^(註6)産出地の花仙山をとりまく玉作遺跡の一つである。

後原地区では碧玉製龜甲状石をはじめ多数の玉類未成品、砥石等が出土し、ほかに須恵器を伴う工房址1が検出されているが未発掘である。

中島地区では一部破壊されていたが、良好な工房跡1が発掘されている。南壁長4.7m、北壁長3.8m、東西壁長3.95mの梯形プランで、南壁中央に接して工作用ピットが穿たれている。興味あるのは工房跡内の遺物出土状態で、工房内の生産機能をよく示したものとして注目される。遺物は玉材として碧玉、瑪瑙、水晶、石英、滑石などがあり、勾玉、管玉、臼玉、有孔円板およびそれらの未成品、剥片、屑片多数のほか各種砥石などが出土している。出土器は大東式の特徴をそなえたもので、出雲国における有孔円板の上限などを知る上で注目に値する。また、水晶製玉類の成玉に関する限りさきの史跡出雲玉作跡71B I号、69A I号、69B III号址よりも古く、これまで出雲國では最古の事例に属するものであった。

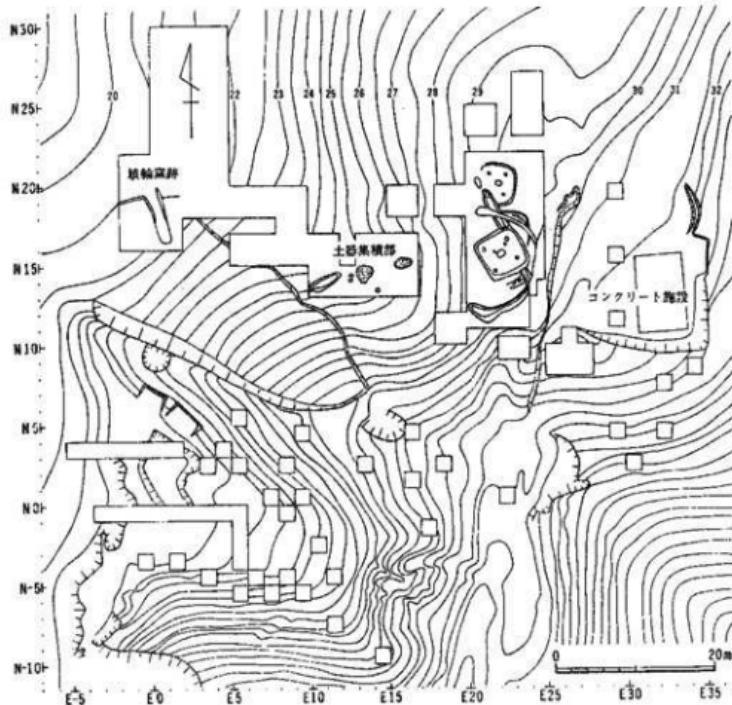
6. 大東高校々庭遺跡 大原郡大東町大字大東に所在し、斐伊川の支流、赤川の右岸^(註7)に位置する。昭和27年、島根県立大東高校のグランド造成の際に古式土師器に伴って若干の玉作関係遺物が採集されたことによって玉作遺跡として注意されるようになった。従来、出雲の玉作遺跡は『出雲國風土記』にいう往時の意宇郡忌部神戸を中心とする地域に集中して認められていたが、本遺跡の発見により出雲國玉作集団は広く大原郡にも及ぶ一つの地理的な広がりをもって存在していたことが明らかになった。その後、昭和49年にグランド整備に際して発掘調査が行われ、多数の玉作関係遺物の出土から一層玉作遺跡としての存在が明確になったが、後世の削平等により工房跡といった遺構については確認されていない。遺物としては碧玉製勾玉未成品、同管玉未成品、同剥片をはじめ各種攻玉工具とともに古式土師器（大東式）および若干の須恵器片などが出土している。

このほか、詳細は明らかでないが、松江市乃白町、乃木福富町、安来市沢町などでも玉作遺跡の存在を裏付ける攻玉工具、玉類未成熟などが発見されている。今回、平所遺跡で検出された玉作と以上に列記した出雲國所在の諸玉作遺跡との間には特に出雲國玉作の生成とその在り方に関連していくつかの興味ある問題が指摘されるが、それらの点についてはのち、章を改めて述べることにしたい。（松木岩雄・三宅博士）

3 遺跡の概要

既述したように今回の調査は、昨年度の調査をひきつぐものである。今年度の調査成果を述べるまえにここでいま一度昨年検出された遺構、遺物について触れ、その成果の大要をふりかえってみる必要がある。

まず、昭和50年度調査の対象となった区域は、計画路線内に含まれる丘腹部傾斜変換点付近から斜面ないし丘麓にかけての一帯である。調査の結果、丘腹部において古墳時代前期の竪穴式住居跡3、玉作工房跡1、溝状遺構1、丘麓で古墳時代後期の埴輪窯跡1が検出されている。このほか、丘陵斜面において埋葬に関係するとみられる大形の古式土師器2、祭祀にかかわると考えられる遺構1も発見している。このうち、丘腹部に位置する竪穴式住居跡、玉作工房跡、溝状遺構は近接して複雑な切合関係を示していた。しかもこれ



第3図 調査区配図

らは時期的に短期間のうちに営まれており、各遺構の前後関係を把握するには困難をきわめたが、上層の変化と切り合いなどから少なくとも2・3号住居跡、玉作工房跡(古)→溝状遺構(新)という関係を明らかにし得た。

すなわち、これらの遺構についてその概要をやや詳しく記せば以下のとおりである。

1号竪穴式住居跡 丘腹における遺構群のうち最も北側に位置している。丘陵部平坦部から斜面にかかる傾斜変換点に営まれているため丘陵の谷側にあたる西壁はすでに消滅していたが、残存部から推定すると本跡は円形に近い隅丸方形プランを示し、その規模は南北5.3m、東西5.4mあまりとなる。床面の東側堅沿いには幅15cm、深さ4cm、斯面U字形の浅い溝がみられるが、これは壁際の全てをめぐらない。床面はほぼ水平で全面に厚さ5cmあまりの黄白色粘土が貼られていた。柱穴はそれぞれ対称的位置に存在し、床面の中央には80×64cm、深さ37cmの2段掘り込みの大形方形ピットが穿たれていた。この中央ピットの周囲には多くの土器片が散在し、内部には灰白色の粘土塊が認められた。規模・形状およびピット内における土層の堆積状態などからすると、これは柱穴とは認め難いもので機能は明らかではないが、日常生活を営む上で必要とされた重要な意味をもつ施設とみられる。遺物のうち特に注意されたものは、住居跡内に多数の炭化木資材の集積が散見されたことである。これは一見火災を受けた堅穴のように観察されたが、調査の過程ではそれを十分確認するには至らなかった。ただし、それぞれまとまりのある上部の出土状態などから、本跡は不慮の事故により焼棄されたものと考えられた。出土した遺物には古式上師器、鉄製品、木製品、砥石のほか、梅の種子とみられる自然遺物などがある。遺物の主体を占むる土師器は壺、甕、鉢、高环、器台、瓶など各器種にわたるものがあり、これらは罐尾II式の特徴を備えるものである。

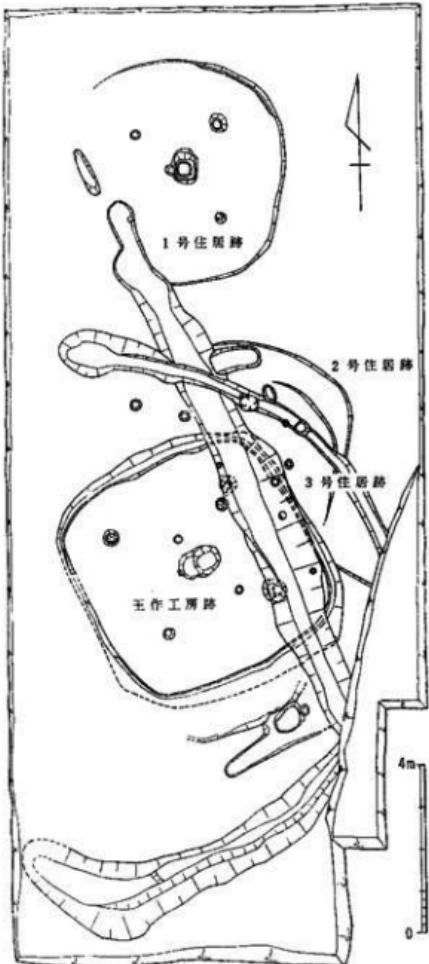
2・3号竪穴式住居跡 1号住居跡の南約1.5mから重複して検出された。両者の位置関係は2号住居跡内に接して3号住居跡が営まれ、ともに北東隅の一部を残すのみで大半は溝状遺構および後世の削平により消失していた。これらは玉作工房跡、溝状遺構と複雑な切合関係を示していたが、堆積上層の変化からすると、少なくとも2・3号住居跡(古)→溝状遺構(新)という関係は明瞭であった。しかし、両竪穴式住居跡はきわめて近接して営まれていたため、その前後関係については明確にこれを把握し得なかった。2・3号住居跡内には墨褐色土が堆積し、2号住居跡の床面は現地表面下55cmで、3号住居跡の床面はそれより10cm深く掘り込まれていた。確認し得た壁高はいずれも10cmあまりで、周辺はともにみられなかった。2号住居跡内では北堅沿いに不整形円形ピット1、3号住居跡で不整形のピット2個が検出されたが、これらは位置、形状、規模その他のからいずれも柱

穴とは考え難いものであった。遺物は2号住居跡で若干の古式土師器片、水晶片、鉄製工具、また3号住居跡では古式土師器片が出土しているにすぎない。このうち2号住居跡の出土遺物は南隣して玉作工房跡が営まれていることから、すべてが本跡に伴うものかどうか疑わしく、次に記す玉作工房跡の関係遺物の可能性が強い。

玉作工房跡 丘腹における遺

構群のうち最も南側に位置し、2・3号住居跡および溝状遺構と切合関係を示していた。西壁を欠くが、辺約5.7mの隅丸方形プランを呈す。床面はほぼ水平で、墻沿いには幅15cm、深さ5cmの断面U字形の溝があぐる。主柱穴は4個でそれぞれ対称的な位置に存在し、床面の中央部には110×65cm、深さ57.5cmの不整梢円形の工作用ピットが穿たれていた。遺物としても多量の水晶製玉類未成品、剝片、屑片および各種の攻玉工具が発見されるなど玉作工房跡としての在り方を如実に示していた。しかも、本工房跡は出土土師器の様相からすると山蜜で確認されている玉作工房跡のなかでは最古のものでかつ水晶を主な玉材とするなど注目すべき点が多い。

溝状遺構 北西から南東方向に直線状に走り、1・2・3号住居跡、玉作工房跡と重複している。土壙の堆積状態からする



第4図 遺構配置図

とこの溝は2・3号住居跡、玉作工房跡を掘り込み、これらとの前後関係は明瞭であったが、1号住居跡との関係は不明であった。確認し得た溝の規模は残存長14m、上縁幅1～1.5m、基底部幅40～60cm、深さ30cmあまりを測り、その西北端は1号住居跡の西壁付近で確かめたが、南東端については後世の搅乱その他でこれを把握することができなかった。溝内には拳大ないし人頭大の野石が溝底から20cmあまり浮いた状態で散在していたほか、鍵尾Ⅱ式の特徴をもつ若干の土師器片も出土している。

丘陵斜面の遺構 丘陵斜面で検出された古式土師器の集積ヶ所はN15・16-E16・17区、N15・E14区、N15・E13区の3地点である。このうちN15・16-E16・17区、N15・E14区のものはきわめてよく似た状態を示し、いずれも大形の盃が押しつぶされたもののように観察された。しかも、それらは両者とも底部が穿孔されており、これは埋葬遺跡に關係して出土するこの種蓋形土器と共に通するものがある。これらに対してN15・E13区では相接して穿たれたビットが2個あり、これに伴って盃1、鼓形器台1が出土している。その在り方はさきの2地区とは異なる様相を示しており、詳細は明らかでないが、例えば祭祀に関連するものともみられる。これら3地区から出土した土師器は個々に若干の相異があるが、器形、文様、製作技法その他から概ね鍵尾Ⅰ式土器の範疇に属するものとみられる。

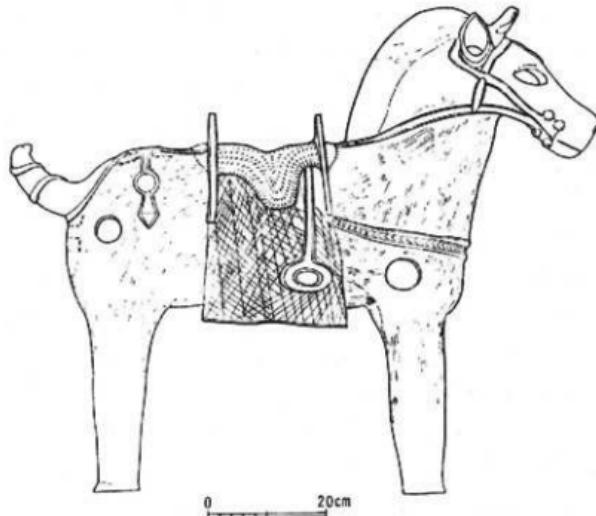
埴輪窯跡 丘陵の緩斜面下方の傾斜変換点付近に築かれている。天井部、煙道といったものは後世の削平によりすでに消滅していたが、幸い10～50cmの高さで窯壁が残存し、これによって窯跡の大体の規模、形状、構造を把握することができた。すなわち、窯体は軸の狭い谷間をはさむ低丘陵のゆるやかな傾斜面を利用して窓の傾斜変換点から斜面上方に向けて掘り込まれ、その構造は一種の無段登窯で、残存長約5.8m、幅1.2～1.55mを測る。天井部が尖なわれているため半地下式かトンネル式か不明であるが、焼成部の傾斜がゆるいことなどからすると半地下式であった可能性が強い。中軸線はN-18°-Wを示し、窯体の平面形は窯尻部が窯底の傾斜の上界に沿って細くすぼまり、焼成部はやや幅広く、燃焼部から焚口部にかけては若干幅狭く作られている。各部の明瞭な仕切りはないが、焼上や木炭の折り、床面の傾斜などからすると、焼成部は長さ約3.3m、窯底の傾斜10～15度、燃焼部～焚口部は長さ2.5mで、床面はほぼ水平を保ち、赤変した床面には木炭を多量に含む厚さ2～5cmの炭化物の堆積がみられた。

窯内に残されていた遺物は全て破片の状態で出土し、特に焼成部では埴輪馬、家などの大小の破片が隙間もないほど床面いっぱいに堆積していた。また、燃焼部から焚口にかけても中央部に破片の集積がみられた。これらには形態の明らかなものとして埴輪馬、家、鹿、人物、埴輪円筒などがあるが、いずれもかなりの欠失部があり、ほぼ完形に近く復原

できる馬3、家2、円筒1にしても同一個体の破片が無秩序に散乱し、窓内に置かれた状況を想定するにはあまりにもまとまりのない状態であった。なお、前庭に近い焚口付近から土師器壺2と縄1が出土したが、これらも甌が床面からかなり浮いたところにあり、甌の1個は底部を欠いていた。

出土した遺物は現在整理・復原中で詳細については別に機会を得て報告する予定であるが、これまでに判明しているものには埴輪馬3、埴輪家2、埴輪鹿1、埴輪人物3、埴輪円筒1、土師器壺2、土師器縄1などがある。以下、その主なものについて種類別に若干の説明を加えておく。

埴輪馬は顔面、たてがみの破片からすると4体以上あるが、ほぼ完形に復し得るものはうち3体である。諸例とも比較検討した上ほぼ完形に復原した1例は全長約1m、高さ約83cm、胴の幅約30cmである。他の2体も復原すれば概ねこれと同形、同大の飾馬となろう。3体にはほぼ共通した特徴をあげると、口はヘラで細長く削りぬき、その両側に籠で長方形を描き、これで鏡板を表現するものと円環状装具をつけ、これに4個の鉤を付して鏡板とするものの2種がある。頭部には革帶状の面繫がつけられ、目、鼻は口と同様ヘラで削りぬかれているが、目は特に上瞼がもりあがり、生々とした表現がなされている。たてがみ



第5図 墓輪馬略測図

は大きく弯曲した半円形の粘土板で表現し、その先端に粘土紐をよりあげた結び飾りがある。鞍はほぼ直立に立ちあがる前輪、後輪を付し、居木の上には鞍擣がU字形に垂下されている。鞍擣の表面には箒描割突文がみられ、革製か厚地の織物風の素材を表現したものと思われる。鞍から障泥にかけては、まず左右の腹部に下邊が長い台形の障泥を重ね、前輪寄りには輪鉗が下げられている。障泥の表面はヘラ先で縦に細かく仕切られ、斜格子、綾杉文状の文様が描かれている。尻點は後輪から2本の革帶がのび、雲珠を経て尾へとのびている。雲珠としては円環状装具がつけられ、左右に杏葉が着装されている。尾は太く短かく、表面には螺旋形に巻き上げられた革紐があって先端で結びつけてある。脚は脚部と明確に接合できる資料が見当らないが、先端は筒部がやや広くつくられ、これでひずめがあらわされている。

埴輪家は2棟あり、うち1棟は入母屋造、他は四柱造のものである。まず入母屋のものは鏡葺のやや大形品で切妻部に大きな破風を伴うものである。合掌部には断面が円形に近い棟木が張り出し、流れはきつく、外表面にはヘラで縦に区画された内部にカギ形、「く」の字形の幾何学文様がみられる。注意すべきは大棟に火焔状に立ち上る棟飾りがみられ、内部を弧の組み合せからなる鱗状のヘラ描文でうめていることである。こうした表現は管見に触れる限り他に例をみないものである。壁部は欠失部が多く詳細は明らかでないが、平に長方形、妻に半円形の透し孔がみられるほか、斜線を組み合せた練刻もある。

四柱造の埴輪家は、外反りの流れのきつい屋根をもつもので、推定高約30cmある。棟には幅1.5cmの棟木が粘土板であらわされ、その上に断面円形の粘土棒による4個の堅魚木がのせてある。

埴輪鹿は顔面から頭頂部にかけて残存している。三叉する角を別に作り、これを頭頂の両側に穿った小孔に差し込んで牡鹿をあらわしている。頬にややふくらみがあり、上瞼もややもり上るなど、鹿の特徴を的確に把えた写実的な作成がなされている。鼻と目の周囲および顔面の中央から頭頂にかけて赤色顔料がぬられている。

埴輪人物は3体あり、いずれも頭部だけが復原でき、他の部位は手などの破片がみられるものの接合は困難である。細部の表現は若干異なるが、3体ともほぼ同形、同大的もので顔面の長さ13~15cm、幅約10cmを測る。口、目はヘラで細長く切りぬかれ、鼻は鼻筋に沿って次第に高く作られているが、鼻孔の表現はない。注目すべきは頭の型で、いずれも頭頂部に縦方向の浅いU字形の溝がみられることである。また、1例に鼻上を中心にして左右の頬へとのびるヘラ描きの翼状文様がみられ、内部に赤色顔料が塗られていることも注意される。これは和歌山市井辺八幡山古墳で同様な例が報告されており、「鼻上翼形入墨」

と仮称され、顔に施された入墨と考えられているものである。

埴輪円筒は1個体分あり、ほぼ全形を窺えるものである。総高40.5cm、口径29cm、底径14cmを測り、口径に対して底径が極端に小さくなるのが特徴的である。腹部は3条のタガによって区画され、第1段目と第2段目には相対する位置に円形の透し孔が2個づつ合4個あけられている。タガは断面台形をなし、突出度が少ない。調整は口縁部の内外面ともヨコナデ、胴部外面は第1次調整のみで縱方向の刷毛目を施し、底部は指削りを行う。なお、口縁部外側にはヘラ彫きによる△印が陰刻されている。

土師器はほぼ完全形に復し得る壺2と瓶1がある。壺形土器は口径16~19cm、器高19~24cmを測り、いずれも腹脇の強い球形の胴部に「く」の字状の単純な口縁を付す形態をもつ。楕円土器は口径12cm、高さ6.5cmで外面粗い刷毛目、内面は指ナデによって調整されている。これらの土師器の様相から平所埴輪塗跡が6世紀前半に築かれたことが知られる。

これまで出雲国内の古墳から出土した埴輪形象は量的にきわめて少なく、その沿継関係等の問題については今後に期するところが大きいが、平所埴輪塗跡出土の各種埴輪形象は人物に頭頂溝、鼻上翼形入墨がみられるほか、馬の尾を草紙で巻き上げた表現がなされるなど、和歌山市井辺八幡山古墳出土品と多くの共通点をもっていることが注意される。

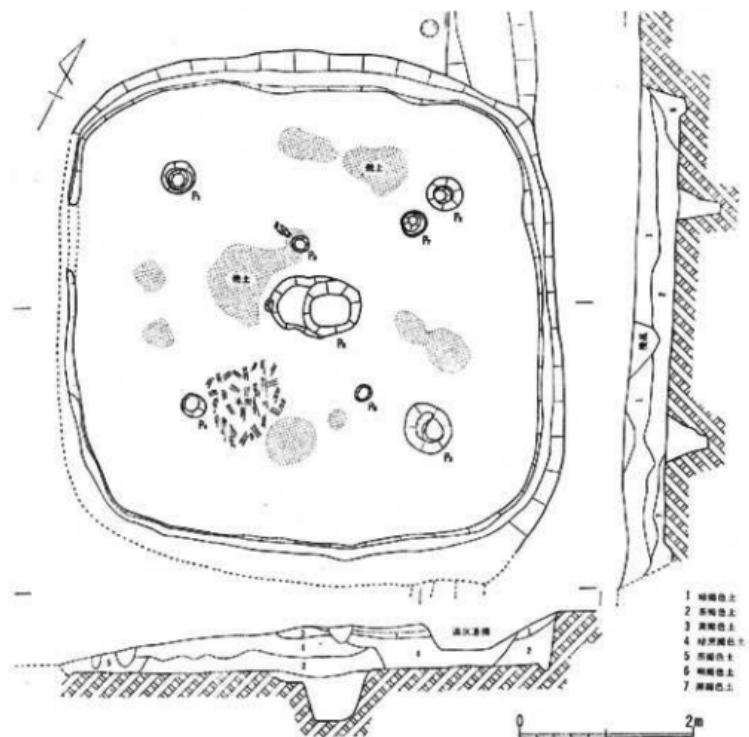
以上が昭和50年度調査の概要である。こうした多くの注目すべき遺構の存在とともに周囲の地形などを考えるとさらに遺跡の広がりが予想されたため、今年度再び調査を行うことになったことははじめにも記した通りである。さて今年度調査ではまず遺跡の規模を把握するために計測路線内のほぼ全域にわたって試掘坑を入れたが、結局丘腹部において溝状遺構1を新たに検出したに留まった。しかし、この溝状遺構は昨年度検出した玉作工房跡に近接して南北に弧状をなしてめぐらされ、かつ溝内から水晶製玉類未成品・剝片・附片、碧玉製管玉未成品・剝片、各種攻玉工具をはじめ多量の古式土師器等の良好な一括資料が出土するなど玉作工房跡の存在と関連してきわめて興味深いものであった。すなわち今年度検出した溝状遺構は玉作工房跡をとり巻くように存在すること、水晶製玉類未成晶および各種攻玉工具が出土していること、玉作工房跡と同様な特徴を備えた古式土師器が出土していることなど玉作工房跡と密接不可分の関係にある重要な施設と考えられるものであった。

以下、前記した昨年度の調査成果を踏まえながら今年度発見された遺構、遺物等についてその概要を記すことにする。なお、昨年度検出した玉作工房跡と今年度の溝状遺構は相互に密接な関係をもつものと推定されるので、すでに報告済みであるが、玉作工房跡についてその調査結果を一部加筆して再掲することとした。(松木岩雄)

4 玉作工房跡と溝状遺構

1. 玉作工房跡

丘腹における遺構群のうち最も南側に位置し、2・3号住居跡および溝状遺構と切合関係を示していた。当初1・2・3号と同様な堅穴式住居跡と考え、4号堅穴式住居跡と仮称したが、調査の過程で玉作工房跡であることが判明した。工房跡は付近検出遺構のうち最も深く掘り込まれており、その遺存状態は北壁と東壁については良好であったが、斜面にあたる西壁はすでに消滅し、南壁はきわめて不明瞭であった。しかし、壁に沿ってめぐらされた周溝が概ね完存していたことから、工房跡全体の規模・平面形を知ることができた。



第6図 玉作工房跡 実測図

すなわち、平面形は典型的な獨丸方形プランを呈し、東壁長5.45m、西壁長5.50m、南壁長5.65m、北壁長5.50mを測る。工房跡における上層の堆積状況は最近の造成で盛られた最上層の暗黄色28cmを除くと黒色腐植土10cm、黒褐色土28cm、暗褐色土20cm、茶褐色土30cmとなっており、現地表面より深さ1.4mで暗黄色の地山の床面に達する。本跡と切合関係にある溝状遺構はこのうち暗褐色土層まで掘り込まれていた。これに対して工房跡は表七層にあたる黒色腐植土から3層目の暗黄色地山まで検出され、傾斜は70°～80°の傾斜で掘り込まれていた。壁高は最も遺存状態の良好な東壁で68～54cm、北壁で47～10cmである。床面には壁沿いに幅15cm、深さ5cmの断面U字形の溝がめぐる。なお、最近報告例が増えている廻溝内における小ピットは検出されなかった。床面はほぼ水平で全般によく踏み固められ、炭化物の集積2ヶ所の他、各所に火を受けた部分がみられた。火の使用のもつ意味は明確にできなかったが、例えば攻玉の際に原石の剥離を容易にするため加熱した時の痕跡などの場合が考慮されようか。床面上には工作用ピットを含め大小8個のピットが穿たれていた。個々については表1に示す通りであるが、うちP₁～P₄はほぼ対称的な位置にあり、かつその形状・規模等から主柱穴と考えられるもので、柱間はP₁～P₂3m、P₂～P₃2.7m、P₃～P₄2.8m、P₄～P₅2.6mで概ね等間隔を示している。

ピット番号	上層部	底	格	大きさ	備	考
1	40	38	16	15	48.5	15cmの深さに幅7cmのテラスがめぐる。
2	42	40	14	12	48.5	粘土に土削器口縁部を埋立。
3	60	55	25	22	46	柱頭が上層に認められた。
4	25.5	26.5	19	18	47	ほぼ垂直に掘り込まれている。
6	21	19	14	13	5	ほぼ垂直に掘り込まれておりきわめて浅い。
7	30	29.5	10	10	47.5	深さ30cmに幅8cmのテラスがめぐる。
8	21	18	15	12.5	5	ほぼ垂直に掘り込まれておりきわめて浅い。

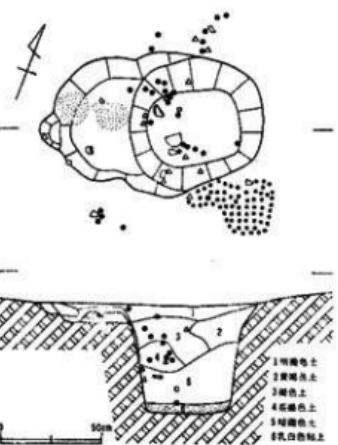
表1 工房跡内ピット計測表

(単位 cm)

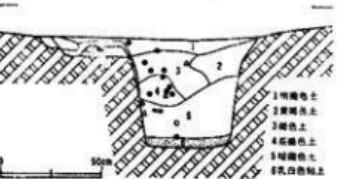
床面中央で検出された二段掘りのPsは長径110×短径65cm、深さ床面から57.5cmの不整円形のプランを呈するもので、西側に深さ10cmの浅いテラスを伴う。注意すべきは基底部に厚さ5cmの乳白色粘土が貼られ、上部のテラス面には厚さ3cm余りの暗褐色砂が認められたことである。基底部の粘土は日干し用のものと考えられるもので、こうした施設は、いわゆる玉作工房跡特有の工作用ピットに該当し、攻玉の過程で必要な研磨・穿孔などの際の水の使用と密接不可分な施設とされているものである。ピット内には攻玉の過程で生じた水晶削片・屑片や錐状の鉄製工具などがみられ、ほかに若干の土師器片も認められた。これらの多くは床面およびテラス面から落ち込んだ状態にあった。また、ピットの上縁には一部に水晶削片・屑片が集積していた。こうした出土状態は本ピットの工作における機能の一端を示すものであろう。

2. 溝状遺構

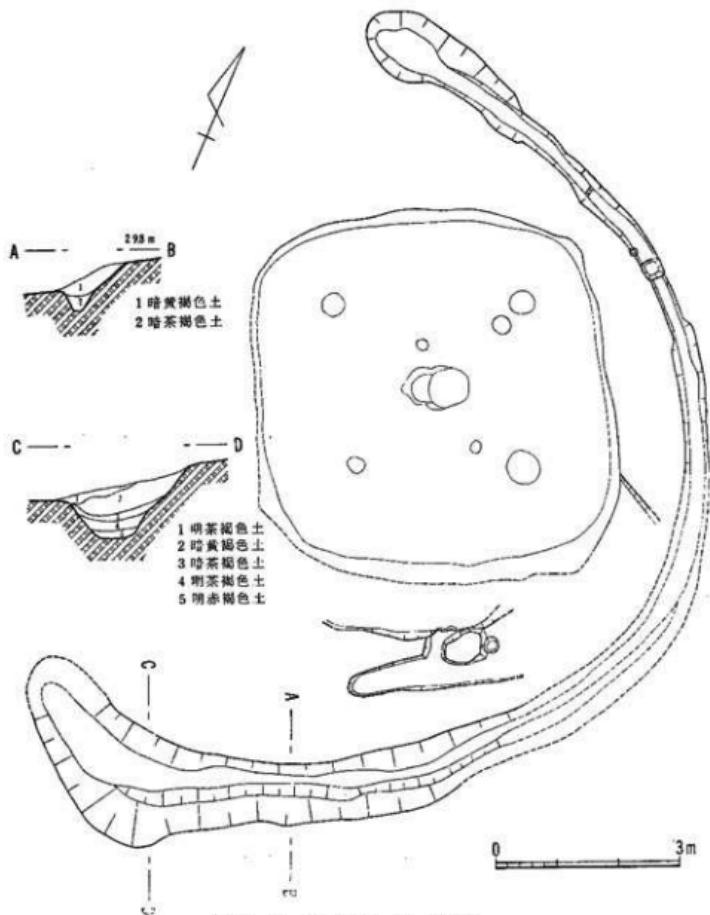
今年度新たに検出した溝状遺構は、玉作工房跡に近接して北壁から東壁にかけて弧状にめぐる溝と、南壁側にめぐる溝の2つである。ただし、この2つの溝はその位置関係、形状、規模、出土遺物の様相等から元は弧状に走る一つの溝状遺構であったと考えられ、溝状遺構東側の一部はかつての泥炭採掘の際に破壊されて、北側と南側に分断されたものと思われる。遺存状態は南側については良好であったが、北から北東側にかけては昨年度調査した2・3号竪穴式住居跡、溝状遺構に切り込まれているため不明瞭であった。しかし、幸いにもこの溝状遺構は比較的深く掘り込まれていたため溝底が残存し、これによって溝状遺構の大半の規模・形状を把握することができた。すなわち、溝状遺構は玉作工房跡の北壁、東壁、南壁に近接して幅0.6~3mの間隔をおいて弧状に掘り込まれ、全長23.8m、弦にあたる部分の長さ約12mを測る。最も遺存度の良好な南側での断面形は漏斗状を呈し、遺構横山面からの深さ約90cmある。上縁幅1.1~1.0m、基底部幅13~30cmを測り、溝の両端は幅広く留根状につくられている。留根状の広い溝状遺構両端は、北西端で上縁幅1.1m、



第7図 工作用ピット実測図



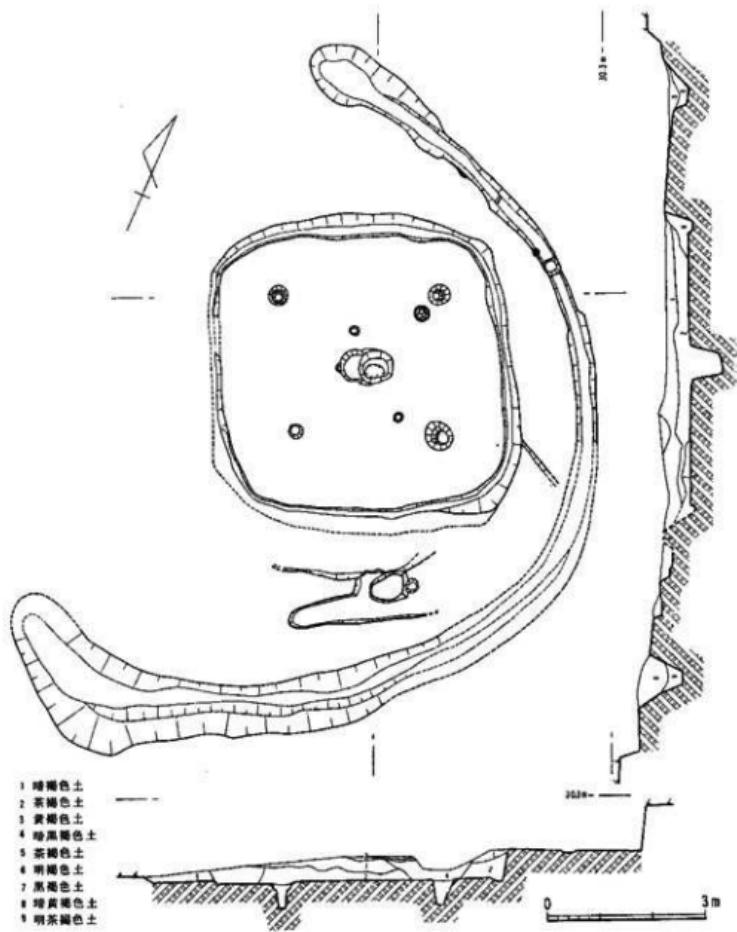
下縁幅0.6m、深さ32cm、南西端で上縁幅1.8m、下縁幅0.7m、深さ1mを測る。なお、工房跡の北壁から東壁にかけてめぐる部分で溝内に方形と円形のピットが検出されたが、遺存状態が悪く、溝状遺構に関連するものかどうか判断できなかった。このあたりはちょうど2・3号堅穴式住居跡が営まれていたことからすれば、あるいは住居跡に伴うピットの可能性もある。溝底は溝の両端に近い部分で5~13cmの落差で急に落ち込んでいるほか



第8図 溝状遺構 幾何圖

はゆるやかに傾斜している。溝底のレベルは山側にあたる東側が最も高く、両端に向って丘陵斜面とともに次第に低くなっている。すなわち、残存部の最も高いところで標高29.03m、溝端部の最も低いところで標高28.25mを測り、高低差は78cmある。因みに工房跡床面の標高は28.60m前後ではほぼ水平を保っている。

土層の堆積状況は最近の造成で盛られた最上層の暗黄色土10~30cmを除くと黑色腐植上



第9図 工作工房跡と溝状構造実測図

5cm、暗茶褐色土層約20cm、暗黃色地山面となっており、溝状遺構は地山の上面で検出された。溝内における土層は場所によって多少の変化はあるものの基本的には上から暗黃褐色土層約45cm、暗茶褐色土層約25cmがみとめられた。溝内上層の暗黃褐色土層は炭化物をやや多く含み、土器、水晶等多量の遺物の出土をみている。下層の暗茶褐色土層は炭化物をわずかに含む粘質土で、遺物はほとんど含まないが上面から少量の上器片が出土している。南西端の留根状に広くなった部分では土層がやや複雑で、上層からⅠ明茶色七層、Ⅱ暗黃褐色土層、Ⅲ暗茶褐色土層、Ⅳ明茶褐色土層、Ⅴ明赤褐色土層となっている。このうち第Ⅱ層は炭化物をやや多く含み、土器、水晶等を最も多く含む層である。第Ⅲ・Ⅳ層は炭化物を多く含むが、遺物としては土器片をわずかに含んでいるのみである。第Ⅴ層は炭化物をわずかに含む粘質度の高い層で遺物はみられない。

このほか玉作工房跡の南東隅に接して溝と工房跡の中間に深さ15cmあまりの長楕円形の落ち込みおよびピット2個が検出された。その機能等については確認し得なかったが、落ち込み内から水晶、土器片等が出土したほか、堆積土の状況からみて、玉作工房跡・溝状遺構と関連をもつ遺構としての可能性もあることを注意しておきたい。

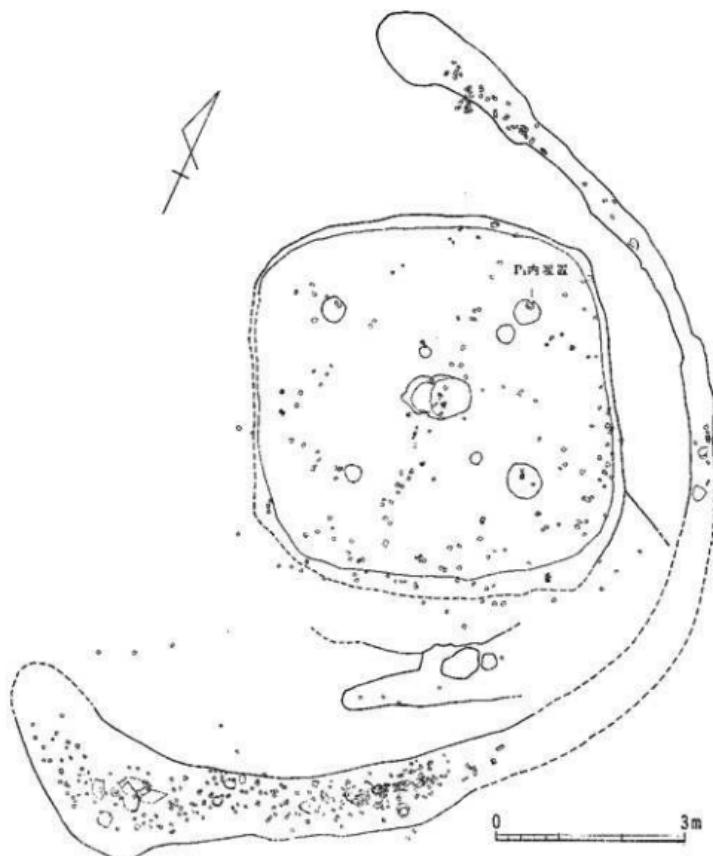
3. 遺物出土状態

玉作工房跡および溝状遺構内からはいずれも各種多数の玉作関係遺物、古式土器の出土をみている。玉作工房跡と溝状遺構はその位置関係、出土遺物の様相等から両者は密接な関連をもつ遺構と考えられるものであるから、ここでは両者の遺物を合わせてその遺存状態、出土状況等を説明することにする。

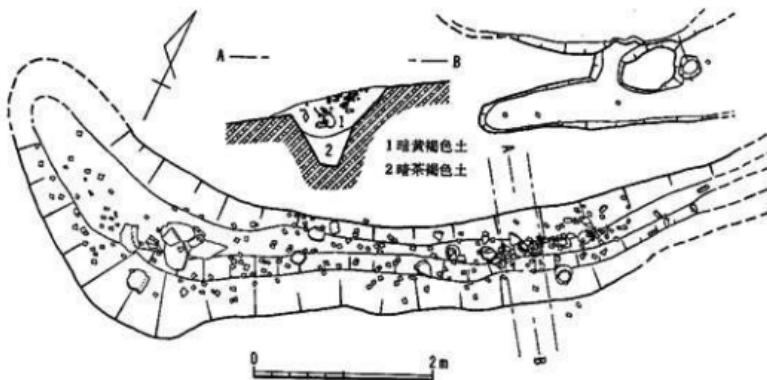
土器類出土状態 工房跡内から出土した古式土器は口縁部、脚部等の破片から推定すると覆土のものを含めて30個体前後あるものとみられる。器種別の数量としては長頸壺1、壺23、器台3、低脚付壺4、高壺1となっており、壺形土器が圧倒的に多いことが注目される。これらはすべて破片の状態で、しかも個々の破片は集中的、連続的に分布しているのではなく、全く個々ばらばらで個体としてのまとまりを欠いた状態を呈しているのが特徴的である。また土器の大半は覆土である暗茶褐色土層、茶褐色土層中に含まれているが、上下の層から出土したものはほぼ同様の特徴を備えたもので、意識的に棄てられたものかどうか明らかにし得なかったが、きわめて短期間のうちに埋没したものとみられる。床面から出土したものはきわめて少なく、図示し得るものは壺7、低脚付壺1(第18図)にすぎない。これら床面出土の土器も覆土のものと同様まとまりを欠いた状態であったが、P₂内から出土した壺形土器は意識的に埋没させたことを思われるものであった。すなわち、主柱穴と考えられるP₂内の壺上中に胴部以下を打ち欠いた壺形土器が口縁部上縁を床面

と同一レベルに置かれた状態で出土している(図版III-4)。

これに対して溝状遺構内からは50個体以上という多量の上師器が出土している。これらのなかには完形のままで発見されたものが数個体あるほか、破片でも口縁部から腹部まで残存しているものが多いことなど全体として遺存状態が良好である。器種別の数量は壺5、甌39、器台2、鉢1、高环2で工房跡内と同様甌形土器が最も多いが、壺形土器には小形直口壺、長頸壺、無頸壺など各種のものを含んでいることが注意される。溝内における上師器の



第10図 売作工房跡・溝状遺構内土器出土地点図
(斜線を入れたものは床面出土のものを示す。)



第111図 溝状遺構内（南半分）土器出土状態
(断面図は土器、玉類未成品、工具類の垂直分布を示す。)

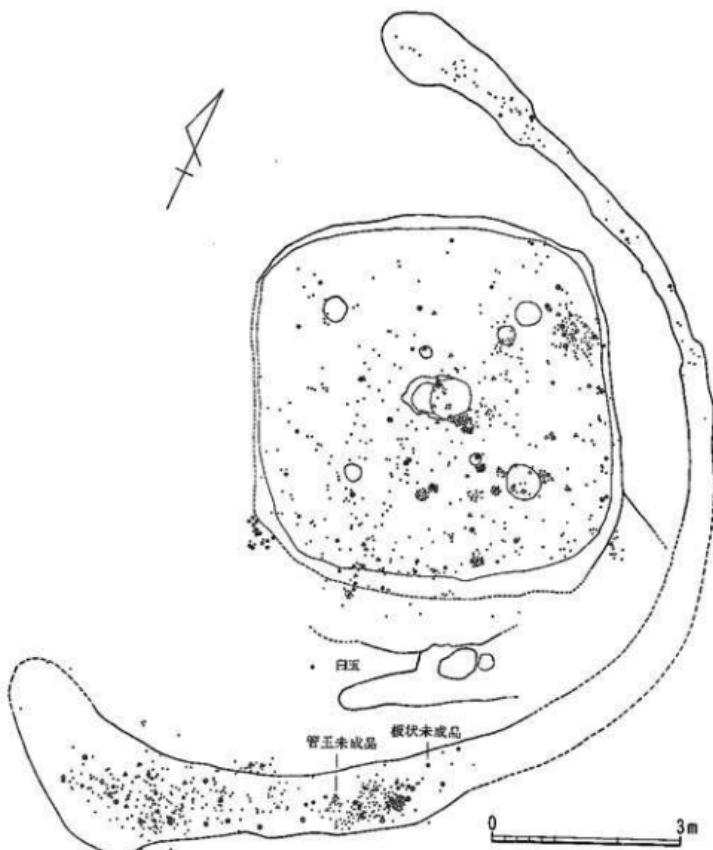
出土状況は、北側については2・3号住居跡によって溝壁がかなり破壊されていることもあって量的にきわめて少なく散在的であるが、遺存状態が良好であった南側では多量の出土をみている。これらの土師器は溝底に密着したもののはみられず、いずれも溝底から約20cm以上浮いた暗黄褐色土層中に含まれ、遺存状態のよかつた南側では完形に近い多数の土器が集積して発見された。これらは各器種のものが混在して出土しており、器種別にそれまとめまとりといったものはみられなかった。溝内出土の土器が原位置にあったものかどうか速断できないが、完形に近いものが多いこと、密集して発見されたことなどから、他所から溝内に流入したとしても、元はきわめて近いところに置かれていたものと思われ、原位置に近い状態を示しているものと考えられる。

玉類出土状態 玉類として工房跡内から水晶質材816、碧玉質材106、赤瑪瑙質材2、計924点の未成品、剥片、屑片が出土している。

		工房跡	溝状遺構
水	原石	2	7
	瓦 制	19	12
	調 整	45	9
	研 磨	7	2
晶	穿 孔	5	1
	屑 片	738	498
	小 計	816	529
碧	未 成 品	0	2
	剥・屑 片	106	29
	小 計	106	31
玉	未 成 品	0	0
	剥・屑 片	2	0
	小 計	2	0
合 計	924	560	

表2 玉類一覧表

これらの玉類は工房跡床面あるいはその直上の茶褐色土層中から出土したものが多い。工房跡内における分布をみるとおおまかに北東隅から南西隅にかけての対角線より東側に多く分布していることが知られ、このうち碧玉質材は南西隅から南壁沿いに集中してみられることが注意される。出土量の最も多い水晶質材では算盤玉状のものと丸玉状のものを作出しており、昨年度の観察によって原石採取後、荒削り調整一研磨一穿孔一仕上げの過程を経て完成していることが知られている。工房跡内からはこれら各工程の未成品が計76



第12図 水作工跡・溝状造構内玉類出土地点図

(△水晶原石、◎水晶荒削り未成品、△水晶調整未成品、●水晶研磨・穿孔未成品、●水晶磨片、○碧玉未成品及び磨片の出土地点を示す。)

点出土しており、うち調整未成品と考えられるものが45点で最も多い。各工程別にそれぞれ明瞭な分布の違いは観察されないが、調整・研磨・穿孔未成品はともに東壁から南壁沿いにかけて多く分布し、特にP₂の東側では各種未成品が集中してみられた。また、工作用ピット上様にも調整・研磨未成品をはじめ多数の屑片が集積しており、このピットの機能の一端を示すものとして注目される。なお、工房跡内出土の碧玉質材、赤瑪瑙質材は剝片、屑片のみで未成品は含まれていない。

溝状遺構内出土の玉類は水晶質材29、碧玉質材29の計560点で、土器類と同様いずれもほとんどが溝底より浮いた暗黄褐色土層中から発見されたが、玉類はこの層中の上半部、土器類は下半部に多い傾向にあった。これらの玉類は工房跡内と同じく水晶質材の量が圧倒的に多いが、未成品の数は少なく、工房跡内出土数の3分の1にも満たない。工程別の数量をみると荒削未成品が12点で最も多く、工房跡内では調整未成品の出土量が最も多かったことと関連して興味深い数値を示している。また、原石については溝状遺構の方が出土量が多く、研磨・穿孔工程のものは工房跡内出土のものが多いことなど、各工程による作業空間の違いを示唆するものとして注目される。このほか屑片では結晶面のみられるものが溝内に多く出土していることが注意を引いた。玉類の分布状況をみると工房跡の北壁に近接している部分では溝状遺構自体の遺存状態が悪いこともあって出土量が少なく分散的であるが、南壁に近接した部分は遺構の遺存状態が良好でかつ玉類の出土量も多い。保存状態の良好な南壁跡についての分布をみると、各工程別にはそれぞれのまとまりはみられないが、土器の集積が最も著しかった東側と、溝端に近い西側の2つのまとまりを示している。

碧玉質材の未成品としては長方形板状未成品1、管玉側面打製未成品1が出土しているが、他はいずれも剝片・屑片等で製作工程については不明である。これら碧玉質材は上器類、水晶質材と同じ土層から混在して出土し、分布状況は散在的でまとまりはみられない。

工具類出土状態 工具類としては多數の鉄製品のほか砥石、台石などがある。このうち工房跡内からは109点という多數の鉄製品が出土し、これらはほとんど床面ないしその直上から発見された。鉄製品は形態の上で鑿

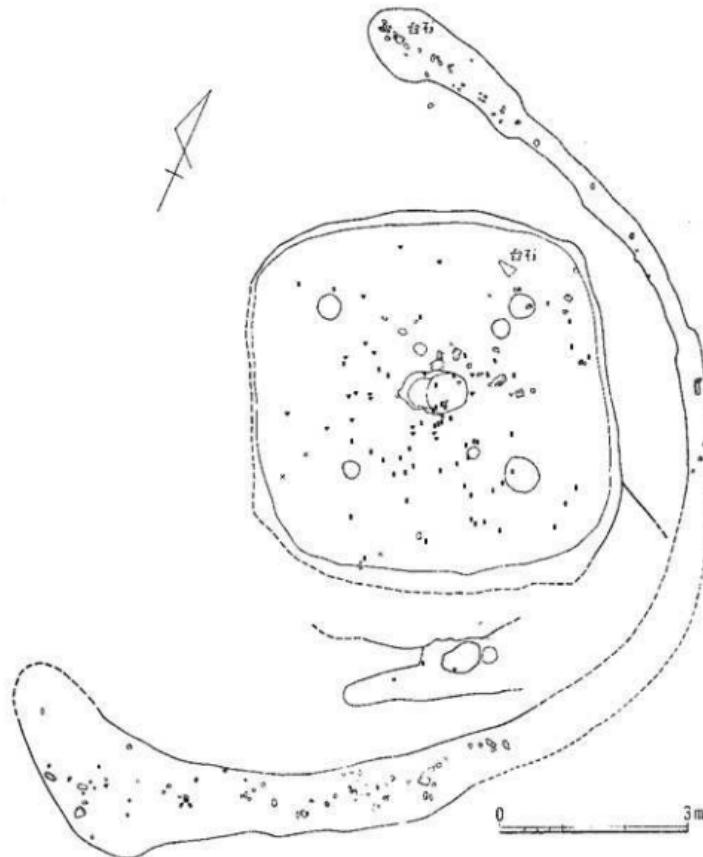
	工房跡	溝状遺構
鐵	23	1
ケンガネ	5	3
鍛	62	1
その他の	19	13
小計	109	18
砥	2	1
平砥石	1	5
小計	3	6
台	2	1
石		
合計	114	25

表3 工具類一覧表

状、ケンガネ状、錐状の3種のものがみられ、錐状工具が62点で最も多い。

鉄製品の分布をみると工作用ピット縁辺を中心にして P_3 と P_4 および P_4 と P_1 の間にかけて多くみられ、實際にはあまりみられないことが窺える。さらに各形態別の分布をみると明瞭なまとまりはみられないものの、工作用ピット縁辺には錐状・ケンガネ状工具、その周辺には錐状工具が多く分布している傾向にある。

砥石は筋砥石2と平砥石1が出土しており、筋砥石は工作用ピットの北東と東側、平砥石は P_2 に接した床面から発見された。台石と考えられるものは P_2 と北壁の中間から発



第13図 工房跡・溝状遺構内工具類出土地点図

(▼錐状工具、△ケンガネ状工具、■錐状工具、×不明鑿器、○工具砥石、□白砥石、○自然石の)出土地点を示す。

見されている。なお、工作用ピット北東側で拳大ないし人頭大の自然石が散見された。これらも攻玉に際して何らかの形で必要とされたものとして注意される。

溝状遺構からも鉄製品、砥石、台石といった工具類が出土しており、いずれも土器類、玉類と同様な層から現在した状態で発見された。このうち鉄製品はわずか18点が散在して発見されたのみで鉄製品が大量に発見された工房跡内と引き合わせて対照的な数値を示している。

砥石は筋砥石1、平底石5の都合6点が出上しており、これらは散在して発見された。このほか、溝内北東端で台石1が出上している。また、工房跡内同様、攻玉に際して必要とされたと思われる拳大ないし人頭大の自然石が溝内暗黄褐色土層中からほんまんべんなく発見された。(松本岩雄)

5 出 土 遺 物 の 観 察

工作工房跡の北側に近接して弧状に掘り込まれた溝状遺構内には既述したように完形品を含む60個体にも及ぶ多数の古式土器が遺存していたほか水晶質材を主体とする玉類未成品、攻玉工具類が包含されていた。以下、必要に応じて昨年の工作工房跡内の出土品についても触れながら、これら溝状遺構の出土遺物について古式土器、工作関係遺物の順に項を分けて説明することにする。

1. 古式土器

(1) 溝状遺構出土の古式土器

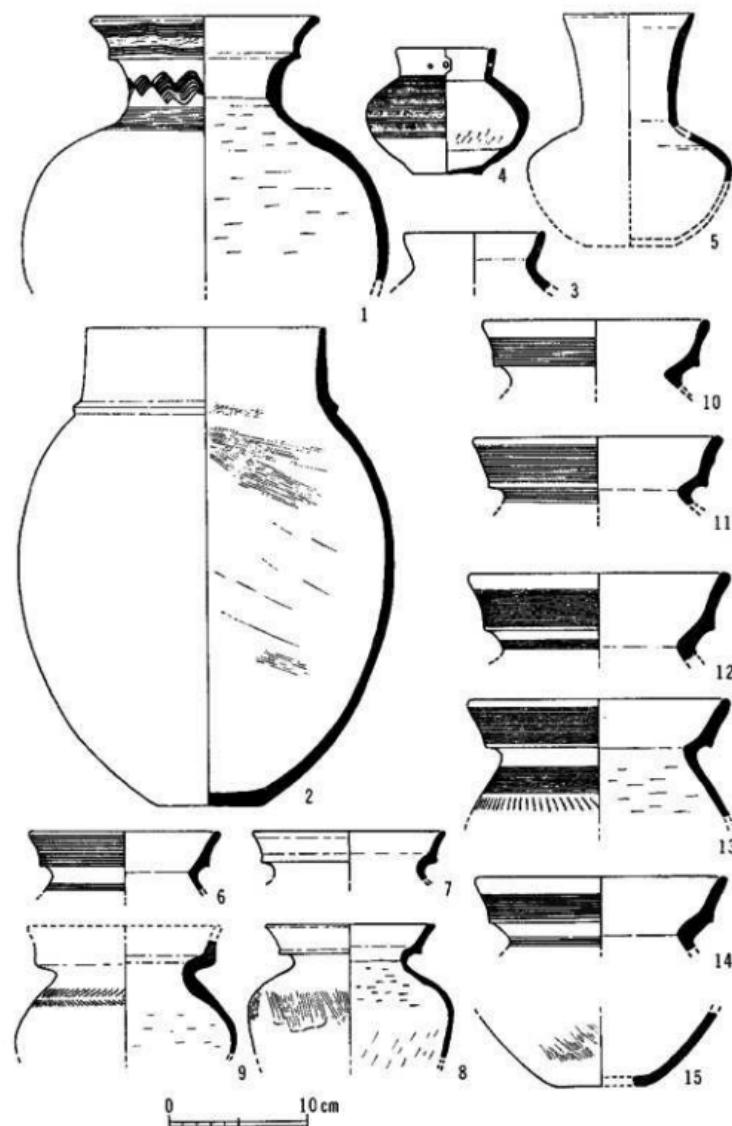
溝状遺構から発見された遺物のうち量的に最も多のが古式土器で、図示可能なものは延べ62点にのぼる。ただし、完形に復し得るものは数個体に限られ、他は器形の一部をなす破片である。器種としては壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高環形土器、器台形上器の5器種にわたるが、量的にはそれぞれ5個体、40個体、1個体、2個体、2個体で、甕形上器が圧倒的多数を占めている。

個々の詳細な観察結果については別に上巻一覧表にかかげたので省略することとし、ここではそれぞれ器種ごとに形態の上からいくつかのグループに分けてそれらの特徴をとりまとめ記述することにする。

壺形土器

形態の上からA～Eの5種に分類できる。甕形土器と異なり、器表に炭化物の付着が認められず、全般的にていねいに仕上げがなされている。

図A(第14図1) 複合口縁を有する甕形土器で頸部は甕形土器に比べて長く、ゆるや



第141図 溝状窓横山土器実測図 (I)

かに屈曲する。口縁部は内側に明瞭な段をもち、強く外反して立ち上がる。端部は平たく仕上げる。胸部はよく膨らみ、ほぼ球形に近い形態をとる。口縁と肩部に2枚貝の貝殻腹様によると考えられる平行沈線、頸部にはやや乱れた波状文が施される。口頸部内面はヨコ方向のヘラ磨き、胸部外面は削毛目、内側はヨコ方向のヘラ削り痕を残す。底部は欠失する。

壺B (同図2) 卵形の胸部に、ほぼ垂直に立ち上がる口頸部をもつ。底部は胸部の器壁よりやや厚いしっかりした平底。頸部に断面三角形の貼り付け凸帯を施す。器面は内外とも風化が進み調整法は不詳であるが、胸部内面に削毛目の痕跡が残る。形態的には無頸壺の系譜をひくものである。

壺C (同図3) 小形品である。口縁は単純口縁で、わずかに内彎しながら外傾する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。口縁部は内外ともヘラ磨きが施されている。

壺D (同図4) 備半球形の胸部にやや外傾して立ち上がる短い口縁をもつ。底部はしっかりした半底で、胸部に比して器壁が薄い。口縁には大小2個の焼成前の穿孔が行われている。胸部には肩から下部にかけて細かなヘラ磨き沈線による文様が見られる。4条を1単位とした沈線群によって5段の文様帯が区画され、「ノ」の字状の斜線を密に迷ねたものである。斜線は同一傾斜ではなく部分的に逆方向に施文されている。しかし、同一区画あるいは上下の区画間で関連性・規則性は見られず無秩序に行われる。口頸部内外面はヘラ磨き、胸部内面は下半にのみヘラ削りが見られ、上半は器壁が厚い。胎土は砂粒の含有が少なく精良で、胸部器表の一端には赤色顔料が残存する。

壺E (同図5) いわゆる長頸壺。本年度出七七器は肩部のみである。昨年度工房跡内出土の口頸部と同一個体で図上で推定復元した。肩の張った胸部に、わずかに外反しながら立ち上がる口頸部をもつ。口縁端はとがり内側には稜を残す。器表と口頸部内面はていねいなヘラ磨きがなされ、胸部内面には指ナデ痕が残る。胎土は砂粒が少なく特に精選されており、焼成良好である。赤味の強い色調を示す。

壺形土器

口縁の径によりA～Dまで4分類され、さらにそれぞれを口縁の形態、文様、製作技法により細分できる。口縁はすべて複合口縁を行す。頸部は形態に若干の変異の幅をもって折れ曲がり、口縁はやや外傾して立ち上がる。端部付近でわずかに肥厚して丸くおわるのが通例である。

文様は平行沈線文、波状文、刺突文などがあり、口縁部および肩部に施文される。施文具は1例を除きすべて一枚貝の貝殻腹縁を利用されている。無文のものもわずかだが存在する。胸部外面はヘラ磨きあるいは削毛目調整を施し、内面は頸部以下ヘラ削りが行わ

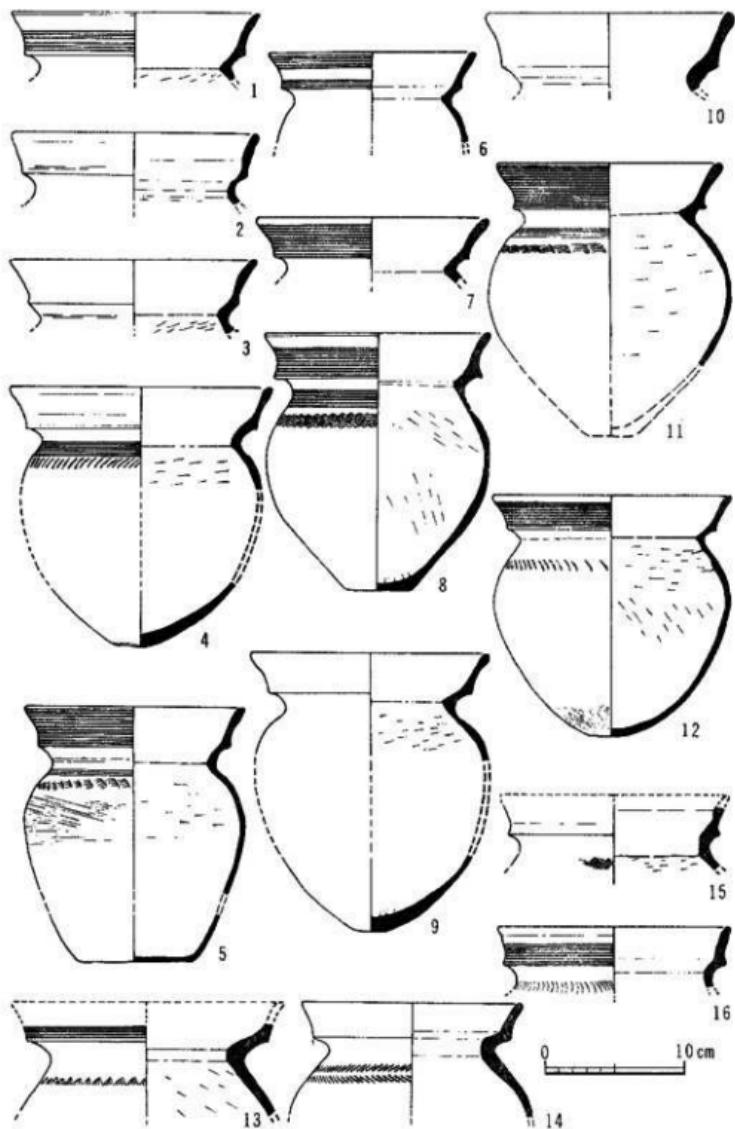


图15属 满状遗物出土器物图(2)

れ、器壁は薄く仕上げられる。洞部上半は反時計回りの横方向、下半は下から上にタテ方向に削られるのが一般的である。また多くの土器の外表に炭化物の付着が認められ、底部の1例では内面にも見られる。

表A (第14図6~9) 口縁端が11.8~13.8cmの小型品。口頸部の形態から3種にわけられる。

表A₁ (6) 口縁部内面が段をなさず、ほぼ直線的に外傾する。頸部は明瞭な稜をなしして屈折する。口縁部外面と肩部に平行沈線が施される。口縁部内面は幅2~3mmの細かいヘラ磨きがなされ、肩部内面はヘラ削りのあとナデされる。

表A₂ (7, 8) 口縁部内面に段を残す。頸部はゆるやかに反転し、稜をなさない。肩部の残る(8)の例では肩が張り、最大径は中位よりやや上にあると考えられる。口頸部内外ともヨコナデにより仕上げられ、肩部外面には荒い刷毛目調整が行われている。

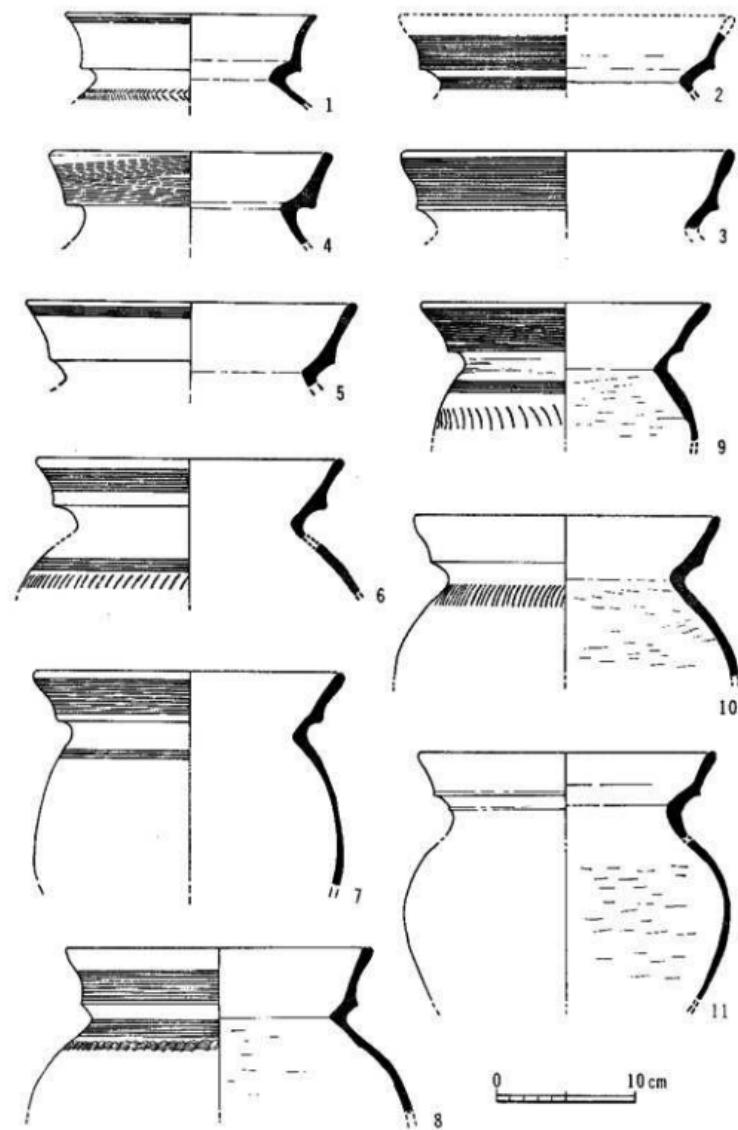
表A₃ (9) 頸部内面に直線部分を残して屈折し、口縁部内面は明瞭な段状部を残して立ち上がる。器壁は比較的厚い。肩部には羽状に刺突文が施される。口頸部は内外ともヨコナデ、肩部表面は風化のため調査法不詳である。

表B (第14図10~15、第15図1~16、第16図1~11) 口縁端が15.0~19.6cmに含まれるもので、21個体あり、壺形土器の中でも最多を占める。肩部の張りが弱くナデ肩で、口縁と肩部の径がほぼ同じ点に特色がある。口頸部の形態により5種に分けられる。

表B₁ (第14図10~15) 口縁端がわずかに垂れ下がるもの。頸部は内面に後をなして屈折し、口縁は角度を変えて立ち上がる。口頸部は比較的器壁が厚い。肩部はナデ肩で、(15)では外面刷毛目調整、内面はタテ方向のヘラ削りが行なわれる。底部は平底をなす。口縁、肩部に平行沈線、刺突文が施される場合が多い。

表B₂ (第15図1~12) 頸部は「く」の字状に屈折し、内面には稜をもつ。口縁部内面はわずかに段をなすが、ほぼ直線的に外傾する。(1)は口縁端は鋭くとがり例外的である。肩部はなで肩で最大径は中位よりやや上にある。底部は広くしっかりした平底と丸底に近い平底を有するものの2者が存在する。文様は、口縁と肩部の両者に施文するものと肩部にのみ施されるものがある。口縁には平行沈線、肩部には平行沈線と刺突文、あるいはその一方を施す。口縁外側に平行沈線をもつ場合は内面がヘラ磨き、ヨコナデの場合内面もヨコナデにより仕上げられる。これは壺形土器に通有である。磨きは軸の狭い2~3mmの工具により行なわれ、概して荒い。肩部外面はヘラ磨きが多いが、刷毛目痕を残すものもある。

表B₃ (第15図13、14) 表Aの3種に形態が類似する。頸部は内面に直線部分を残し



第16図 病状造構街土上器実測図 (3)

て屈曲し、口縁は浅い段をなして立ち上がる。(14)は口縁内外ともヨコナデ、肩部には羽状文を施す。(13)は口縁に平行沈線、肩部には貝殻による刷状文が施される。この文様は本遺跡ではほかに例を見ない。

甕B₄ (同図15、16) 口縁下端が鋭く外方に突出する。頸部内面は稜をもたず、ゆるやかに反転する。(16)は口縁に平行沈線を施したのち、内外ともヨコナデにより仕上げられ、沈線の上半部は消えている。肩部に刺突文を施すが風化のため施文具は不詳。(15)は口頭部をヨコナデし、肩部には乱れた波状文を施す。

甕B₅ (第16図1) 頸部は鋭角的に屈折し、口縁内部は明瞭な段をなす。立ち上がりは強い反りをもって外反する。器壁は薄手で底部は平坦面をなす。口縁部は平行沈線を施したのち、内外ともヨコナデする。端部付近には平行沈線文が残っている。肩部には羽状文が施される。

甕C (第16図2～11) 口径20.4～24cmのもので、11個体が含まれる。口頭部の形態によりさらに4分類される。

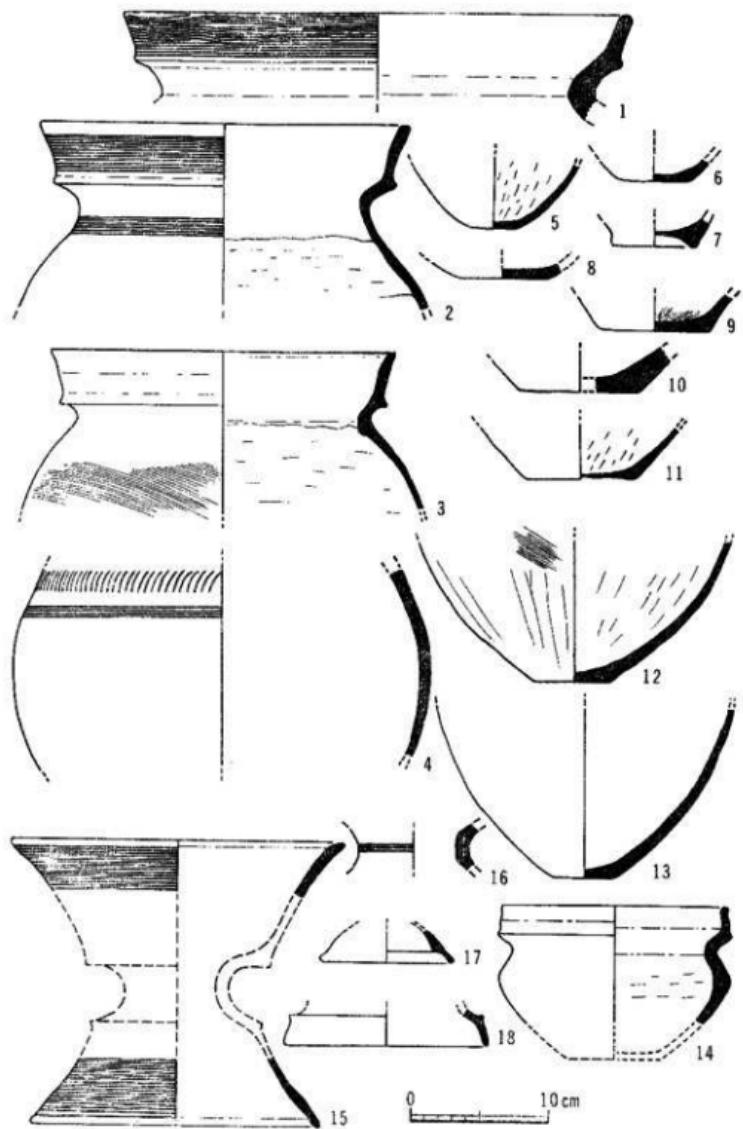
甕C₁ (2、3) 口縁下端が下方に垂れる。頭部が「く」の字状に屈折し、口縁は浅い段を残して外傾する。口頭部に平行沈線を施し、内面はヘラ磨きで仕上げる。形態的には甕Bの1類に類似する。

甕C₂ (4) 口縁下端部が特に厚くつくられ、端部は平面を残し、断面方形を呈す。肩部はナデ肩で、制部の形態は甕Bに類似する。口縁外面は平行沈線を施すが、貝殻痕によらず、8本前後の先の細かい櫛状工具を用いている。口頭部内面はヘラ磨きをなす。胎土は砂粒が比較的少なく精良である。なお、同一個体の土器が昨年度工房跡床面より出土している。

甕C₃ (5～10) 頸部は明瞭な稜をなし、「く」の字状に屈折する。口縁部は内面に浅い段をなして立ち上がる。肩部は甕Bの形態と同様の個体もあるが、張りが強く、口縁の僅を上回るもののが見られる。最大径は中位よりやや上にあると推定される。文様は口縁部に平行沈線、肩部に平行沈線、「ノ」字状の刺突を施すのが通例である。(5)は平行沈線を施したのち、ヨコナデによって消されている。

甕C₄ (11) 頸部はゆるやかに屈曲し、口縁はやや強く外傾するが、その幅は狭い。口縁外面は平行沈線を施したあとヨコナデ、内面はヘラ磨きされており、例外的である。肩部外面もヘラ磨きがなされている。肩部内面はヨコ方向のヘラ削りがなされる。

甕D (第17図1～3) 口径25cm以上のもので、頸部はゆるやかに屈曲する。肩は張らずナデ肩、(2、3)は口縁端を丸くねさめ、口縁と肩部に平行沈線をもつ。肩部外面は



第17図 滝状遺構出土土器実測図 (4)

へラ磨きがなされている。(1)は最大の口徑を有する個体で、非常に厚手であり、大きさのわりには口縁の立ち上がりの幅が狭い。(3)は器壁が比較的薄く、口縁外面下端が強く外方に突き出る。端部はとがり氣味におわる。口頸部外面はヨコナデされる。

網、底部 小形品(第17図5~7)と大形品(第17図4、8~13)に大きく分けられる。前者は大型品に比して一般に薄手に作られる。(7)は高台状を呈し、底面はきわめて薄い。調整法の明らかな(5)では、内面はタテ方向のへラ削り、外面には刷毛目痕が認められる。

(6)は器体の内側にも炭化物の付着が認められる唯一の例である。小形品は甌AまたはBに属すと考えられる。大形品は広く、しっかりした平底をなす。(11、12)はややくぼみ気味の平底である。脇部外面の調整は刷毛目あるいはへラ磨きがなされている。内面は例外なくタテ方向のへラ削り痕が残る。底部内面は指頭圧痕、あるいは刷毛目痕の認められる器体があり、丸く仕上げられている。甌Aあるいは甌CまたはDに属すと考えられる。脇部のみの(4)は大形品で甌CまたはDのものと思われる。文様は肩部に上・下2段にわたり、上段には「ノ」の字状の刺突文、下段には平行沈線文が施される。風化が進んでいるが、施文は貝殻複線によると思われる。上下の文様柄は通例とは異なる。器表は調整法不詳だが、内面にはヨコ方向のへラ削りがなされる。

鉢形土器(同図14)

複合口縁で、立ち上がりはやや内傾する。端部の処理は角ばる。ゆるやかに反転する頸部をもち、脇部は中位で最大径となり、比較的強く屈曲して底部に向かう。底部は欠失する。口頸部は内外ともヨコナデ、脇部は風化のため不詳だが、脇部下半にはへラ磨きの痕跡が認められる。口縁、脇部外帯に炭化物が付着する。

蓋台形土器(同図15、16)

いわゆる菱形器台で受け部、筒部、脚台部それぞれの破片があるが、筒部のみは胎七、焼成、大きさから見て、受け部、脚台部とは別個体と考えられる。受け部はわずかに外反しながら、斜め上方に立ち上がる。器表面には貝殻による平行沈線を施す。内面はへラ磨きがなされている。端部は内面にわずかな被をもち、丸く仕上げられる。脚部は受け部とほぼ同様の形態・文様を示す。風化が著しく内面の調整法不詳。端部内面には幅広い凹線様の沈線がめぐる。受け部、脚台部とも砂粒を多く含み、焼成軟弱でもろい。筒部はへラ状工具による3条の沈線が施され、ヨコ方向にていねいなへラ磨きがなされる。胎土は緻密で、焼成は良好である。他に高环の脚部かと思われる破片(同図17、18)がある。胎土は緻密で精選されている。器面は風化を受けて調整法は不詳だが、端部付近にはヨコナデの痕跡が残る。(18)は甌の口縁の可能性もある。

以上が溝状遺構から発見された古式土師器であるが、昨年の玉作工房跡との関連からここで一部重複するが工房跡内床面上出土上器をとりあげ参考に供することにする。

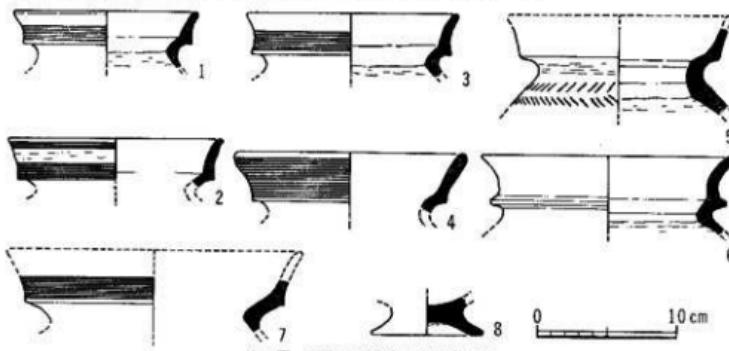
(2) 工房跡出土の古式土師器 (第18図)

工房跡内出土の土器には昨年度報告したように覆土中のものを含めると30個体前後あり、その内訳は長頸壺1、甕23、器台3、低脚付壺4、高壺1となっている。ここではこのうち明確な工房跡伴出土器として床面直上のものを再度とりあげ、説明を加えることとする。床面出土の古式土師器のうち火焔可能な個体数は8個体あり、器種には壺形土器(7個体)と低脚付壺形土器(1個体)の2種がある。

甕はすべて複合口縁を有する。口縁部内側に段を残して外傾し、口縁外面あるいは肩部に貝殻腹縁による平行沈線、刺突文を施す例が多い。口縁部の調整は外面に文様のあるものはヘラ磨き、ないものはヨコナデがなされる。口頭部から脇部上半の部分しか残っていないが、このような形態、文様、調整手法は溝状遺構出土の上器と共通点をもつものである。

(1) は口径13.0cmの小型品で、甕Aに属す。口縁下端がわずかに下方に垂れる。(2~6) はいずれも甕Bに属す。(6) は口縁内外ともヨコナデにより仕上げられ、口縁下端が強く外方に突き出す点に特徴があり、B₄と同じ傾向をもつ。(5) は形態、文様、胎土の点で、B₃と強い類似性を示す。その他(2~4) はB₂に属すと考えられる。(7) は口縁端を欠失するが、推定口径は20.0cmに達する。頭部は「く」の字状に屈折し、口縁は浅い段を残して立ち上がる。口縁外面には貝殻施文による平行沈線、内面はヘラ磨きで仕上げる。Cの2類に比定できる。

(8) の低脚付壺形土器は溝状遺構では出土していない。壺部は欠失して不明だが、脚部の器面は赤色顔料を塗布し磨かれている。内面もヘラ磨きが施される。胎土は砂粒が少なく精選されている。概してていねいに製作される。(崩部 断面)



第18図 玉作工房跡出土土器実測図

2. 玉作関係遺物

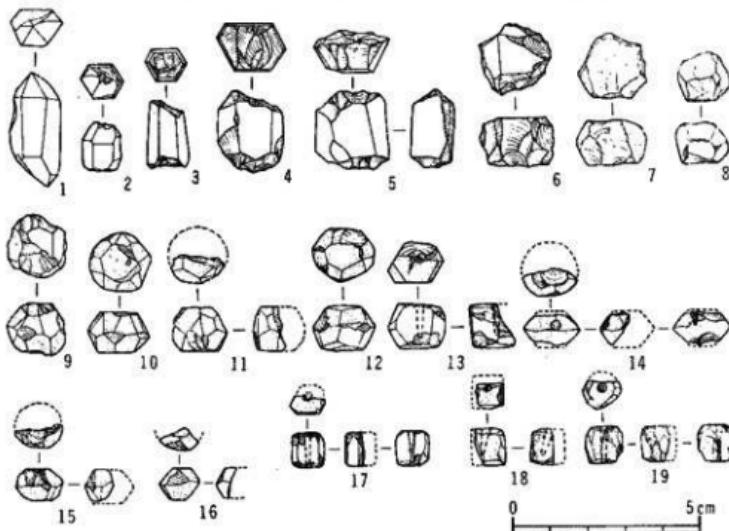
玉作関係遺物としては昨年、玉作工房跡から各種のものを得え、また今年度の調査でも玉作工房跡を外半周する溝状遺構から玉類未成品、工具等を得た。溝状遺構からも玉作関係遺物が検出され、かつ両者の出土土器が共通する特徴をそなえていることは、溝状遺構と工房跡がきわめて密接な関連性をもつものであることを示している。

既に報告済みの工房跡出土の玉作関係遺物についても再度その概要を述べながら、溝状遺構出土玉作関係遺物について説明することとしよう。

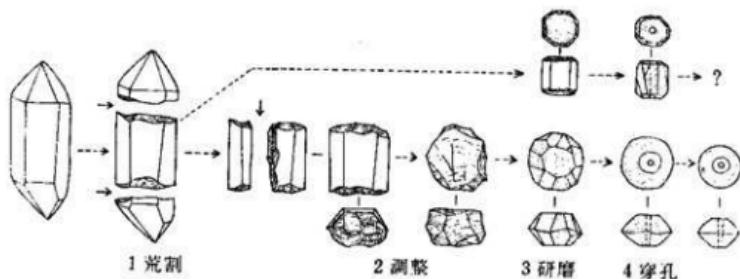
(i) 工房跡出土の玉作関係遺物

玉類 工房跡からは攻玉にかかる玉材として水晶質材816点、碧玉質材106点、赤瑪瑙質材2、計924点の未成品、断片、屑片が出土している。

玉材については、水晶質材が主体をなしており、完成品は出土していないが、成晶に近い穿孔工程段階のものを見ると、算盤玉状のものと丸玉状のものとの2種があることが確認される。このうち量的に多いのは算盤玉状のもので、各工程をうかがえるものがある。すなわち、原石採取後、荒削→調整→研磨→穿孔→仕上げの工程を順次行い成晶としたことが推測される。以上、水晶製玉類の製作工程を模式的に示すと第20図の通りであるが、ここでは各工程の顕著なものを図示し、説明をくわえることとする(第19図)。



第19図 工房跡出土水晶製玉類未成品・原石火照図



第20図 水晶製工類製作工程模式図

荒削工程（2、3、4）は採取原石を分割する作業で、水晶結晶体の上下尖端部を打ち欠き、これによって六角柱を作出する工程である。

調整工程においては六角柱状に作出された荒削未成品に打撃あるいは押圧剥離を行い上下面に調整が加えられ、さらに縱方向に側面が剥離されて、側面調整がなされている。この場合、小形の結晶体については、上下面調整のうら直ちに側面調整が行われている（5、6、7）。

研磨工程は調整作業によって作出された扁平な未成品に研磨を加える工程である（8～12）。

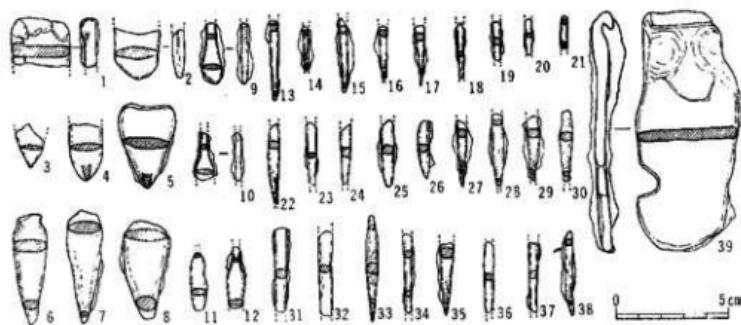
穿孔工程は荒磨きを終えたうら実施されているもの（13、14）、この工程の未成品は僅少であるが得られているものについては全て一方向穿孔で、大きさは径1.5cm、厚さ1.1cmあまりである。また穿孔工程途中の破損品の観察からすると、孔底が尖らずに平坦になっていることから、先端の平らな錐が用いられたものと推定される。

これに対して丸玉状の未成品（17～19）は次のような工程を経ている。すなわち、荒削工程のうち直ちに上下面の研磨、穿孔工程に入るものが多く、さきの算盤玉状品にみられたような側面調整を経ないものがある。これは穿孔工程段階の未成品が径0.89cm、厚さ0.83cmあまりで、算盤玉状品と比較すれば、やや小さいこと、さらには結晶体と完成品との大きさが近似し、側面の調整を行う必要のなかったことが考慮されよう。

算盤玉状品、丸玉状品は、いずれも完成品の出土をみていないが、これらは穿孔工程終了後、再度入念な研磨が施され成品となったと思われる。

このほか、僅少ながら碧玉質材、赤瑪瑙質材もみられたが、いずれも剝片、屑片のみであった。

鉄製工具（第21図） 工具としての鉄製品は、工作用ピット周辺を中心で多数出土した。



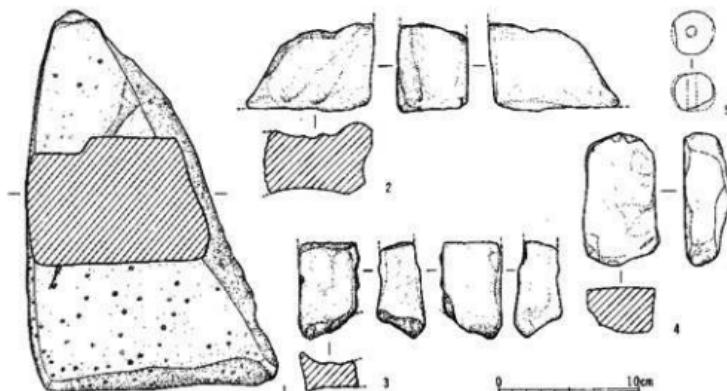
第21図 工房跡出土鉄製工具実測図

これはいずれも錆化が著しいが、盤状、ケンガネ状、椎状のものに類別できる。

盤状工具（1～5）とみられるものは23点を数える。これらは板状で刃部が剣先状を呈し最大幅2.5cm、長さ5cm、厚さ0.5cmあまりを測るものと、楔形をなし頭部の断面は長方形ないし梢円形を呈す長さ4～5cm、最大幅1.5～2cmのものがある（6～8）。

この他にケンガネ状を呈し、尖端の鉄鍔に近い形状を有するもの（9～12）がある。これは木柄を着装し調整に使用されたものと推測される。

椎状工具（13～18）は鉄製工具の中で最も多く62点を数える。基の断面は方形を呈するものが多く、先端は先細りで断面は円形をなす。残存長は最も長いもので3.8cmを測る。錆化が著しく、本来の形状をうかがうことは出来ないが、穿孔工程段階の未成品をみると



第22図 工房跡出土石器・古石・土製品実測図

先端は平坦になっていたものと推測される。

この他に用途不明の鉄器1点(39)を得ている。

石製工具(第22図1~4) 砥石(2~4)が4点出土している。このうち玉磨砥石は2点あり、いずれも欠損品で底面が浅くU字形に窪む3条の溝を有する砂岩質の砥石である。他は鉄製工具用の道具砥石で長さ9.4cm、幅5.2cm、厚さ3.1cmを測る。

この他に台石(1)と推定される27×17×8.7cmの自然石が床面から出土している。これは自然石ではあるが本跡の性格を考慮すれば、攻玉に關係したものと判断された。

土製品(第22図5) 径2.8cmの球形の土製品で中央に0.6cmの小孔を有している。これは穿孔工程における鍾の勢車と考えられるものである。

(3) 溝状遺構出土の玉作関係遺物

溝状遺構からは玉作関係の遺物として水晶質材529点、碧玉質材29点、鉄製工具18点、石製工具7点が出土している。なお、工房跡と溝状遺構の中間にあたる平坦部で碧玉質小玉1点を得ている。

玉類 ここでも水晶質材が主体をなしていることは玉作工房跡と同様である。ただし、これらは製作工程として一応玉作工房跡において指摘できるような荒削→調整→研磨→穿孔という各工程のものを含むとはいえ、量的には原石と荒削工程および屑片が多い。これは攻玉過程において溝状遺構の果す機能と密接な関連があるものとして注意される。

以下、溝状遺構およびその周辺から得られた水晶質材未成品を工程順に説明を加えていくことにしたい(第23図)。

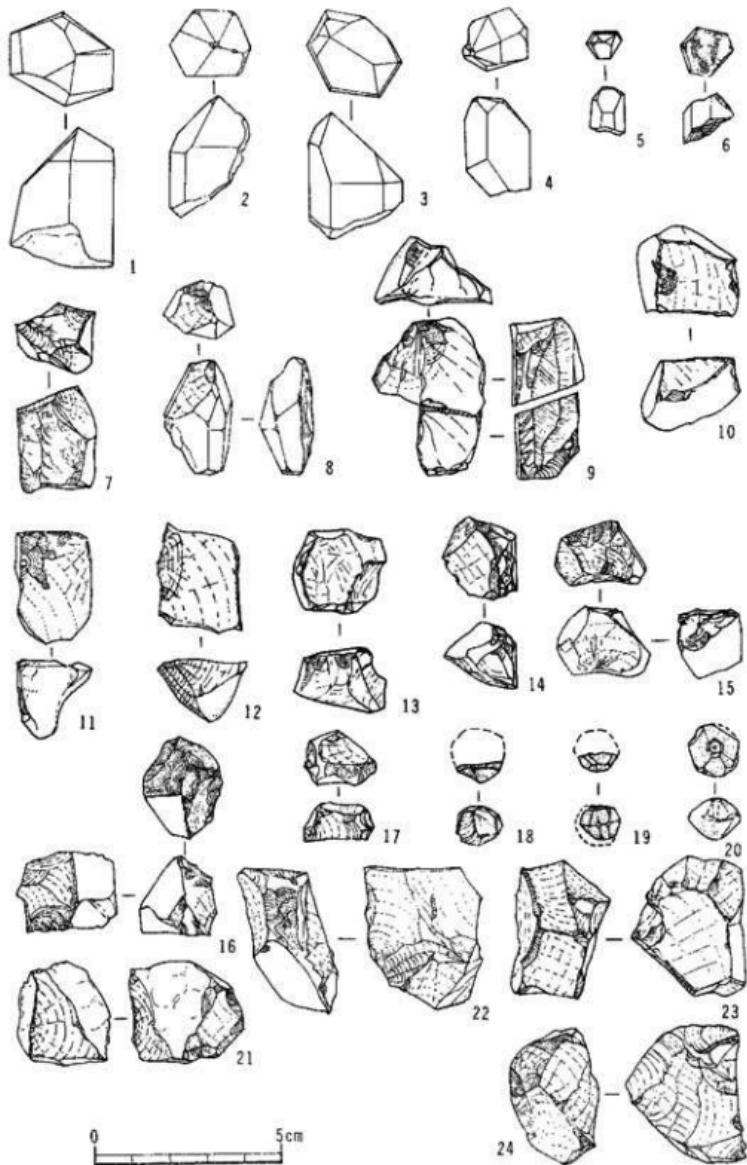
原石結晶体(1~5)は7点あって根元に採取時の破面を有するもので他には人工的な加工は認められない。小は長さ1.5cm、直径0.8cm大のものから、大は長さ3.8cm、直径2.8cm×2.6cmのものがある。

荒削工階段のものは12点抽出される。このうち結晶体の上下を打ち欠き、六角柱を作出したものが1点ある(6)。その後、タテ方向の打撃によってこの六角柱体を半裁する作業が行われている(7~8)。

半裁された未成品は、ここで内側破面の中央にヨコ方向からの打撃が加えられ、2~4個体に分割されている(9~12)。

分割されたこの段階のものには一見、結晶面を底面とした三角錐体を思わせるものがある(10~12)。

ついで調整工程に入る。すなわち以上のようにして得られた三角錐体は、鋭い角ごとに打撃あるいは押圧削離調整により、おおまかな丸身が施される(13~17)。



第23圖 海狀遺構出土水晶製工類火器圖

そして丸身をおびた未成品は、これよりさらに入念な調整がなされ、ほぼ玉の形が成形されたと思われる。

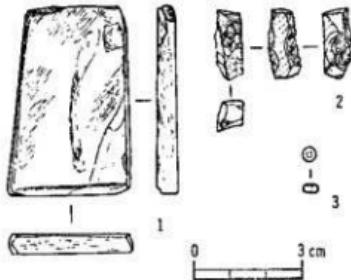
研磨工程は荒磨きが上下面から側面へと施されている。側面にはなお数条の棱線が残る(18、19)。

穿孔工程は荒磨きの後に入ったと思われる。なお、穿孔は一方向からなされている(20)。この段階のものは径1.4cm、厚さ1.1cmを測る。成品は検出されていないが、側面に残る破線が取り除かることなど、入念な研磨が加えられたことを考慮すれば、成品はこれよりわずかに小さいものであったと推定される。

なお、これらの水晶質材の中で調査工程の段階と考えられる大粒の未成品(21~24)は玉作工房跡内においては見られなかった大形のもので、(24)は $3 \times 3.5 \times 2.2$ cmを測る。

碧玉質材は玉作工房および溝状遺構を合せて135点を数えるが、水晶質材1,345点に対し1割にも満たない。ただし昨年度の調査では碧玉質材の未成品が認められなかったが、本年度は溝状遺構から碧玉未成品1、板状未成品1を得た(第24図)。このほか工房跡と溝状遺構の中間の平坦面から次石製とみられる白玉1が出土している。

碧玉質材で碧玉未成品としたものは濃緑色を示し、長さ2cm、厚さ 0.7×0.9 cmの四方柱体を呈するものである(2)。側面各所に打撃押圧剝離調整がなされている。恐らくこの後研磨、穿孔、仕上工程を経て成品となるもので、成品の大きさは径約4mm、長さ16mmほどのものと推測される。同じく碧玉質材で板状未成品としたもの(1)は淡青緑色を示し、質はきわめて軟質で、こすれば粉末を生じ、剥片は指で簡単に折れるほど脆い。また板状に剝離する性質を有している。これらのことから軟質の緑色凝灰岩の可能性も考慮されるものであるが、ここでは一応碧玉質材に含めて扱うこととする。大きさは長さ5.3cm、最大幅3.4cm、最小幅2.8cm、厚さ0.6~0.5cmを測り、原石面の残る一面を除き他は全て研磨が施されている。平坦面を持つ二面は片面にわずかな凹凸が認められることを除けば両面とも入念な研磨が施されている。ここで特に注意すべきは側面3ヶ所に鋸状工具によったと考えられる断面U字状に近い痕跡が認められることである。これは原石から板状に切断加工する工程において生じたものと思われる。このことは、この種の加工技法の一端を示す



第24図 碧玉製玉類実測図

す数少い好資料といえよう。

白玉（3）は成品で色は灰青色を示し径4mm、厚さ2.5mmを測り、径1.5mmの孔を持つ通有のものである。質は次石質のもので、きわめて軟質である。

鉄製工具 今回の調査では鉄製工具18点を得ている。これらは、いずれも攻玉に関する工具で、類別すれば鑿状、ケンガネ状、錐状に分けられる（第25図）。

鑿状工具は、板状で刃部が剣先状にとがり、頭部は丸く曲線をえがくもので断面はレンズ状を呈す。長さ5cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmを測る。荒削工程等に使用されたものと考えられる（1）。

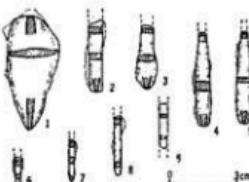
ケンガネ状工具としたものは4点ある（2～5）。これは柳葉の先端を切った形状を呈するもので、刃先の部分は平坦に作られ、断面は方形を示す。比較的残存良好な（4）で長さ4.2cm、幅0.6cm～0.4cm、厚さ0.4～0.3cm、身厚0.2cmを測る。茎部の先端は損われているが、細く尖るものと思われる。木製の柄を着装し押正剝離調整等に使用されたものであらうか。

錐状工具としたものは3点ある（6～9）。いずれも細く、断面方形あるいは半円形を呈すものである。（8）で残存長2.7cm、径0.3cmを測る。本来の形状は不明な点が多いが、長さはいま少し長く、先端も細く断面は円形を呈し、昨年の調査結果から推せば先端はとがらず、平坦であったと思われる。

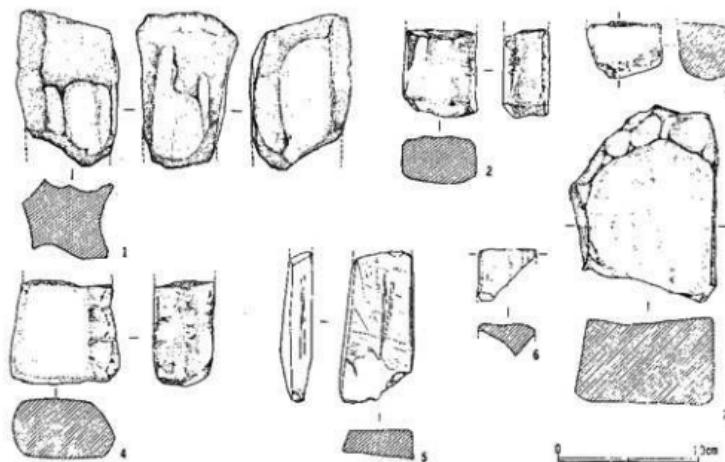
石製工具 石製工具は低石6点、台石1点を得ている（第26図）。（1）は工磨用の筋砥行で欠損品ではあるが、本來は、ほぼ四方柱体を呈していたと思われる。三方の面にクチ方向に走る断面U字形の溝を持っている。溝の長さ、幅、深さおよび条数は各面ごとに異なり、その数は3条、3条、1条となっている。

質は砂岩質で脆く、また全体に白茶色を示す。工作工房跡内から得ているものと形態、質、色調など類似した特徴を持っている。

（2）～（4）は工具底石と判断したもので、多角柱体を呈す。破面を除く各所に、使用痕が認められる。質は凝灰岩質で硬く、粒子は荒い。乳白色を示す。（3）と（4）は質、色調、使用面の方向等から同一個体の可能性があり、そうとすれば、本来細長い形状を呈すものであったと推測される。なお注意すべきは、側面稜線に直行して縦状の切り込みが認められることで、これらの具体的な用途を想定するうえで、きわめて興味あることといえる。すなわち、側面に残る縦状の使用痕は工房跡内から多數出土した錐状工具等の鐵器研



第25図 鉄製工具実測図



第26図 溝状遺構出土砾石・台石実測図

磨に際して生じたものと推測することが考慮されるのである。

なお、粒子の荒いことからこれらは刃物砥石でいうところの荒砥石に属するものと思われる。

(5) は長さ10.5cm、幅5~4.5cm、厚さ2.2~1.6cmを測る扁平な砥石である。頁岩質のきわめて粒子の細かいもので板状節理を有しており、黄白色を示す。使用されているのは上面平坦面と両側面で、特に上面には鋸い針状のものによったとみられる、ひっかき痕が認められる。このことから用途については即断の限りではないが、工具砥石として使用されたとも解される。しかし、碧玉製管玉の成形がなされていたことを思いおこせば、その研磨に使用された可能性も考慮されよう。ただ、いずれにしても粒子の緻密度からして仕上げに近い工程において使用されたものと考えられる。

(6) は大半を失っており、本来の形状はうかがいえないが(5)より、さらに粒子の細いもので黄灰色を示している。工具砥石と解するよりも玉類の局部研磨に使用された可能性の強いものと見えられる。

(7) は台石とみられるもので11.5cm×8.5cm×5.7cmを測る。玄武岩質の比較的軟質のもので淡黄緑色を示す。上面および下面はほぼ平坦であるが、中央に浅い凹みを持っている。これは玉材の荒削工程等に際し、上方からの打撃によって生じた痕跡であろうか。

ところで昨年、玉作工房跡の調査によって得られた結果によれば、ここで製作された玉類は水晶製算盤玉状品、同丸玉状品の二種で、ほかに、碧玉質玉材の刺片、屑片の出土もみているが、これで成玉をなしたか否かは不明であった。しかし、今年度の調査では碧玉質製管玉未成品および次石質臼玉未成品が得られたことで碧玉、次石による成玉も明らかになつた。また、多数の水晶質未成品を得たが、なかでも特に注目すべきは第23図に示した23、24の大形未成品で、既に調整がなされており、これ以上、分割作業の余地のないものと考えられる。よって、これは成品に近似した形状と大きさを示しているものと想定される。この形状から推すと、これは勾玉の未成品の可能性も考慮されるべきものである。ただ、この時期の水晶質製勾玉の出土例は県下はもとより管見に触れる限りにおいても寡聞にして聞かない。また碧玉質製板状未成品は人念な研磨加工が施されている。この後、どのような加工が加えられるのか、さらにそれを経て最終的にはどのような成品となりうるのか、にわかに断じ難いものがある。さきに示した水晶質の未成品とともに今後の類例を俟って検討すべきものといえよう。

(三宅博士)

6 結 語

以上、昨年度の成果をも併記しながら平所遺跡における今年度調査の結果を記してきた。地形的にみて当初、さらにいくつかの住居跡あるいは玉作工房跡および埴輪蒸跡などに関連する遺構の存在を想定していたが、調査の結果は炭坑の掘盛などによる地形の改変その他もあって結局、昨年検知した玉作工房跡の東側を弧状にめぐる溝状遺構1を検出したにすぎなかった。しかし、この溝状遺構は既述したようにその位置および溝内における出土遺物の組成などから玉作工房跡と密接不可分な関係をもつもので、かつ出土遺物も豊富で各種玉作関係遺物と古式土師器が多量に出土し、遺構、遺物ともにそれらが発起する問題は、各方面にわたる内容を含むものであった。終りにあたり、ここでそれらの点について触れながら今年度得られた成果を中心に若干の所見を述べて報告の結びにかえたい。

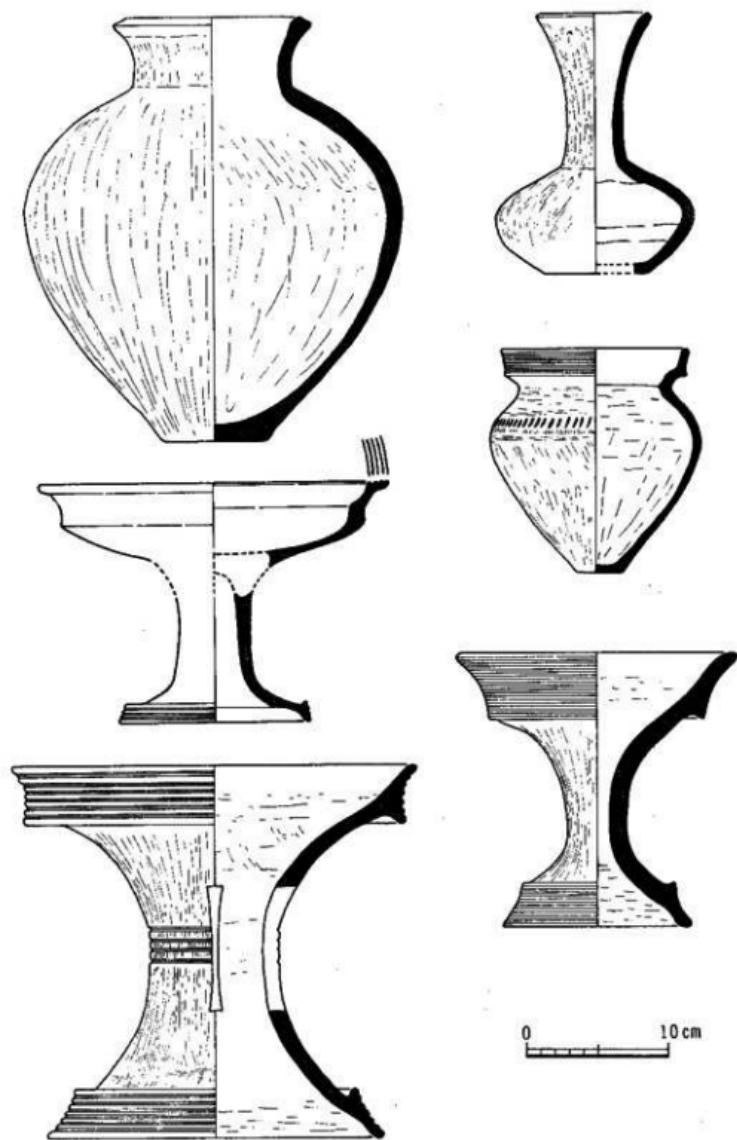
まず、溝状遺構と玉作工房跡との関係等について述べる前に両遺構が時期的にどのような関係にあり、またそれがどのような位置を占めるのか、という点を明らかにしておく必要があろう。幸い、両者とも時期を決定する上で基準となる各種多数の古式土師器の出土をみている。これらのうち両遺構に共通してみられる壺形土器を中心して検討すると、基本的にこの2つの遺構出土の土器は次のような諸点から同一時期に属するものであることが知られる。すなわち、両者の壺形土器はすべて頸部が「く」の字状に屈折し、口縁がやや

外傾して立ち上る複合口縁を有し、胸部は倒卵形で底部に向けてやや直線的に下降し、底は内面に丸味がみられるものの外側は比較的しっかりした平底か、不安定な平底に終っている。内面の調整はいずれも頸部以下にヘラ削りが施され、それは壺形土器以外の器種についても同様である。さらに両遺構とも壺形土器の口縁部に2種の調整手法がみられることも共通している。内面をヘラ磨きで調整するものと内外面ともヨコナデによって仕上げるものがそれで、前者には外側にほとんど例外なく平行沈線が施されている。数的には両遺構とも前者が圧倒的に多い。文様としては甕・壺などの口縁部外側に平行沈線、頸肩部に平行沈線、波状文、刺突文、扇状文がみられるが、このうち溝状遺構出土の甕1と甕1の2例を除くと他はすべて二枚貝の腹縁を用いて施されたもので、少數ながら貝殻は磨きやナデにも使用された形跡があり、施文あるいは調整具として両遺構出土の土器とも盛んに貝殻を用いていることが注意されるのである。

以上のような点から玉作工房跡と溝状遺構出土の土器は同時期のものとされるが、次にこれらについて器種別の個体数をみると、両者とも壺形土器が圧倒的に多く、かつ盃、鉢、器台、低脚付壺形土器は1形態につき1ないし2個体しかみられないのに対し、壺形土器は大きさに数種あるばかりでなく、それぞれの個体数も他の器種に比べ相当多い。この傾向は特に甕B、C類としたものに著しい。壺形土器はすでに観察したようにほとんどすべての器表に炭化物が付着しており、その使用が煮沸を伴うものであったことが知られるとともに器としての規格にかなりのバラエティーがみられることは、使用に際しての使い分けのあったことを想定させる。他の器種に比べ甕の個体数が多いのは、そうした日常的な煮沸と使い分けによる使用頻度の高さから塗れる比率が高く、次々新しく製作し補充しなければならなかった結果と考えられる。壺形土器に個体差が多く、調整手法にも小異がみられるのも、ひとつにはそうした土器の使用期間の短かさに起因する要素があるのではなかろうか。もしさうとすれば、大まかに同時期のものといってもさきにみた壺形土器の11様部の内外面における調整手法の差は、そこに一つの傾向として細かい時期差を認めなければなるまい。

ともあれ、詳細については若干の差異がみられるものの、それは玉作工房跡と溝状遺構出土の土器に共通して指摘されることであり、両遺構出土の土器が型式的に同一時期に属するものであることにはかわりがない。

それでは、これら玉作工房跡と溝状遺構出土の土器群は、山陰の古式土師器の変遷過程のなかでどのような編年的位置を占めるのであろうか。これに関する筆者らは山陰の終末期弥生式土器から当面する古式土師器の変遷について、土器の組成や形態、文様、調整技術その他の変化から次のような試案を提示したことがある。^(註8)



第27图 九重第3号上层墓出土上器实物图

すなわち、まず安来市九重町所作の九重第3号土墳墓出土の上器を終末期赤生式土器の標式として位置付けその特徴を次のように整理した。^(註9)

〔I〕器種としては、壺、甕、鉢、高坏、器台など各種のものがあり、特に壺の多様化と器台の盛行、器形の上で壺と甕の区別が次第に不明瞭となることなどが注意される。

壺形土器は数種あり、その1つはやや内傾して立ち上る口縁部が次第に複合口縁化して幅広くつくられ、胴部が張って均整のとれた器形をもつ。底は比較的小さな平底をなす。その2はこれまでみられなかった形状のもので、短く直立する単純な口縁をもち、胴のよく張った壺である。このほか類例は少ないが、口縁部が細長く直立し、胴部が算盤玉ないし玉蓋状に張って脚台のつくるもの、把手付の注口土器、肩平な胴をもつ長頸壺などがある。

甕形土器は口縁部の作りなどにバラエティーがみられるが、基本的な形態としては「く」の字状に短く屈折する頸部にやや内傾して立ち上る複合口縁を付したもので、胴上半部が張って底は小さな平底となる。鉢形土器は甕形土器を押しつぶしたような形狀を示し、白の付くものもある。

高坏は坏部が浅く2段の作りをなし、内面に腹をもつものが特徴的で、ほかに口縁が発達せず後より上方に外反するものもある。脚部は比較的大く脚端は器台と同じ作りとなっている。

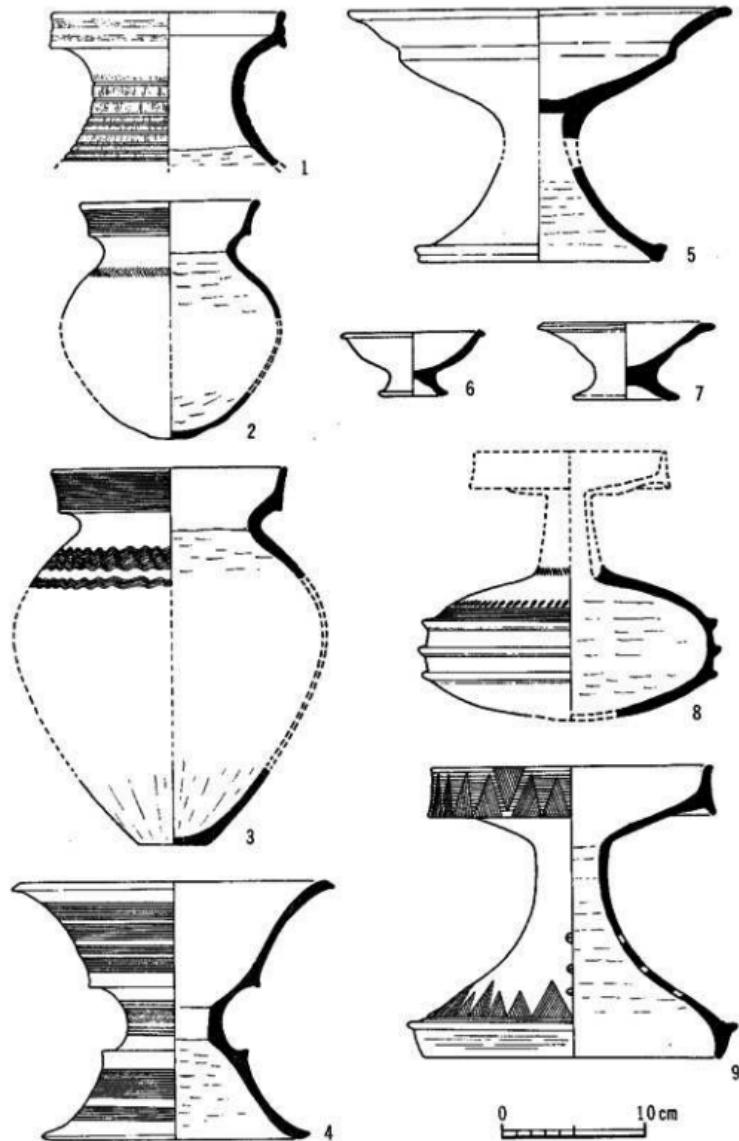
器台形土器は当該時期になって最もよくその特徴をあらわすようになる器種で、いわゆる蝶形器台の祖形となるものである。器受部と脚台部は複合口縁状に作られ、脚部は細長く縮約する。

壺、甕の口縁部外面および器台の器受部、脚台部の外面には刷またはヘラ状工具による太く、深い多条化した平行沈線文があり、甕の肩部には同様な沈線のほか樹状工具などによる刺突文などがあげられる。

器面の調整は口縁部内面へラ磨き、胴上半部はヘラ磨きないし細かい刷毛目調整を併用し、頸部以下の内面はヘラ削りで仕上げている。

つぎに九重式土器のあとを受けて安来市沢町鍵尾土墳墓群山十の一群の土器と松江市的大場土墳墓出土の土器を標式とする鍵尾I式(的場式)土器が続く。それらの特徴は次の如くである。^(註10)
^(註11)

〔II〕器種としては壺、甕、鉢形器台、高坏などがあり、これに從来みられなかった低脚付环形土器が加わる。また、理葬儀礼に伴う供獻用土器として吉備地方では既に弥生後期後半からみられる特殊壺形土器、特殊器台形土器もあらわれる。

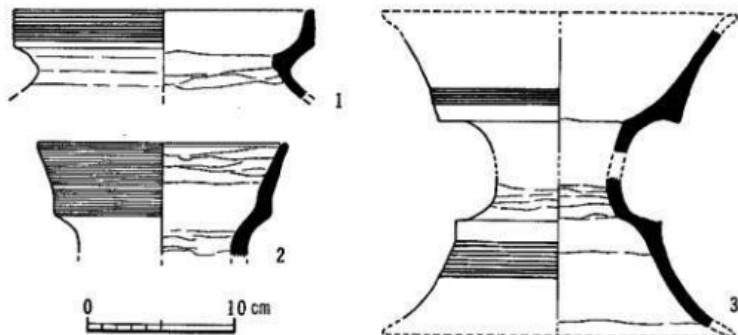


第28圖 鹿尾十圈環蓋鼎（1, 7）、的墳土壙蓋（2~6, 8, 9）出土土胎剖面圖

壺形土器はゆるく屈折する頸部にはほぼ垂直に立ち上る複合口縁を付し、胴部は肩がよく張って、以下底に向ってほぼ直線的に下降する。底部は一種の平底におわるが、小型品についてはほとんど丸底に近いものとなる。壺形土器も頸部が短く「く」の字状に屈折するほかは壺形土器とほぼ同様な形状を示す。器台はいわゆる壺形の器台で、複合口縁に類似した梯形台を上下に接合した形状をなし、筒部は中央で細く縮約するが、九重式のそれに比べると筒部は短く全体に器高が低くなる傾向を示す。器受部、脚台部とも端部は肥厚して一種の平坦面をなすものが多い。高环形土器にはひきつづき複合口縁状の段と彼を作り出すものと坏部が単純に内彎するものとがあるが、端部の肥厚するものは少ない。この時期に新しくあらわれる低脚付环形土器は、小さく張り出した低い脚部に浅い酒环形の坏部を付したもので、口唇部および脚端部は肥厚して短く外方へ折れ曲る。検出例は少ないが、特殊壺形土器は扁平で極端に張った玉巻状の胴部に断面放物線状のタガ状突縁を貼りつけている。これと組み合う特殊器台は複合口縁状の上下に太く長い円筒形の胴部をもつ大形品と筒部が脚端に向って大きく掘開きする高环形の2種がある。

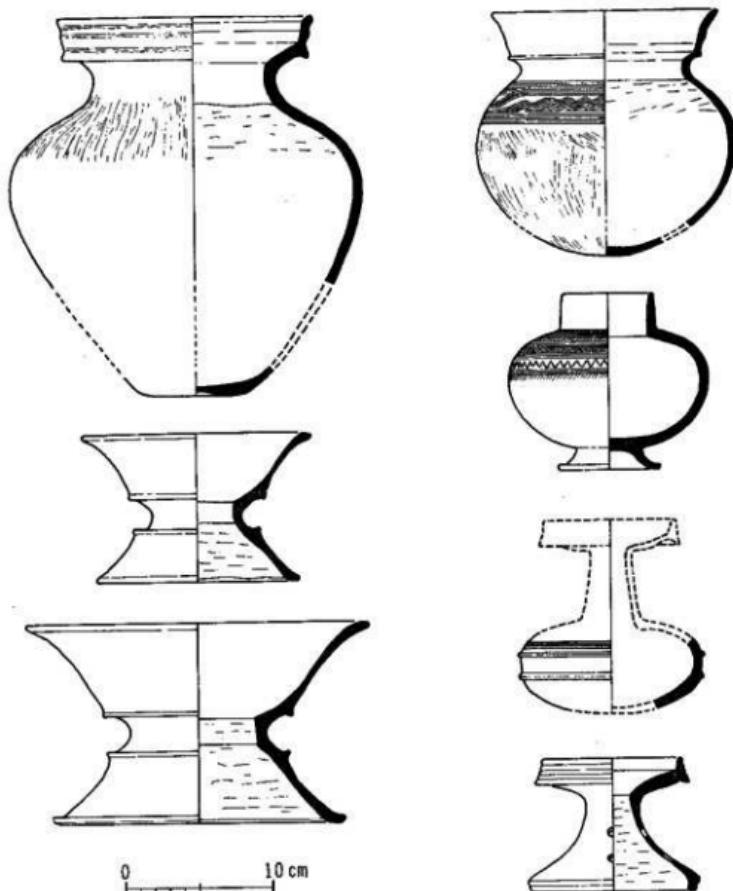
文様は壺・壺形土器とも口縁部外面および肩部の両者または肩部に櫛あるいは貝殻等による多条化した平行沈線や波状文、斜行刺突文列などをめぐらすほか、特殊壺形・器台形土器には鋸歯文等もみられる。波形器台はほとんど例外なく器受部および脚台部の外面に櫛描平行沈線文が横走し、筒部にも沈線、羽状文等を施すものがある。なお、平行沈線文は大形品の場合、太く深いものが多い。

器面の調整は胴部外面に刷毛目を施したのちヘラ磨きを行ってこれを消すものが大半を占め、口縁部内面もヘラ磨きで仕上げられている。頸部以下の内面は各器種を通じて削りで調整されるが、器内はなお全体に厚い。焼成は比較的明るい画一的な焼きである。

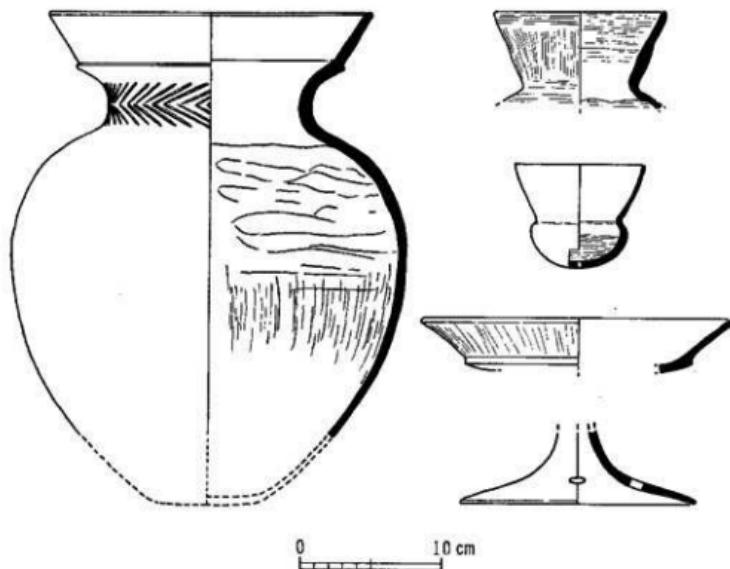


第29図 併仙寺9号(3)、10号(1,2)墳山上土器実測図

筆者らは以上のような特徴をもつ鍵尾Ⅰ式土器について、特に盃や甌などの小形品にみられる底部の丸底化現象とこれに伴う鼓形器台の盛行、口縁部にみる定式化した複合口縁の形状さらには明るい西-的な焼成を齊一化された土師器的要素と評価して、このグループからを古式土師器ととらえている。いまのところこの鍵尾Ⅰ式土器を伴う大形の前期高塚古墳は知られていないが、安来市仲仙寺9、10号墳など発生期の四隅突出型方墳のなかには明らかに鍵尾Ⅰ式土器を伴うものがある。^(註12)



第30図 鍵尾A 5号土塚墓山十土器実測図



第31図 松本1号墳出土土器実測図

鍵尾Ⅰ式の次に編年されるのが鍵尾Ⅱ式土器で、鍵尾土塚墓群A区第5号墓などに一括供獻されていた土器をメルクマールとするものである。

〔III〕この鍵尾Ⅱ式には壺、壺、鼓形器台、高环、低脚付环形土器、特殊壺形土器、特殊器台形土器などのほか新たに小型丸底壺が加わる。

壺形土器は単純な直口壺を除くと、壺形土器と形態上の区別がつかなくなり、口縁部はいよいよ定式化して、ゆるく彎曲する頭部から直立ないしやや外傾する複合口縁となる。肩が張り、胴部は最大径が上位にあって倒卵形をなし、底部については大形品はなおアクセントの不明瞭な一種の平底をとどめるが、小形品は大半完全な丸底である。高环形土器は环部の段が退化して後ののみを残すものと単純に内凹するものなど各種のものがみられる。鼓形器台は器受部と脚台部をつなぐ筒部が太く、短く、口径に対して器高が低くなり、口唇、脚端は丸味をおびる。低脚付环形土器は环部が浅く内凹してやや大きく、これも口唇部、脚端部を丸く単純におさめる。小型丸底壺は口縁が内凹しながら大きく開き、口縁部径に比べて体部が小さい。

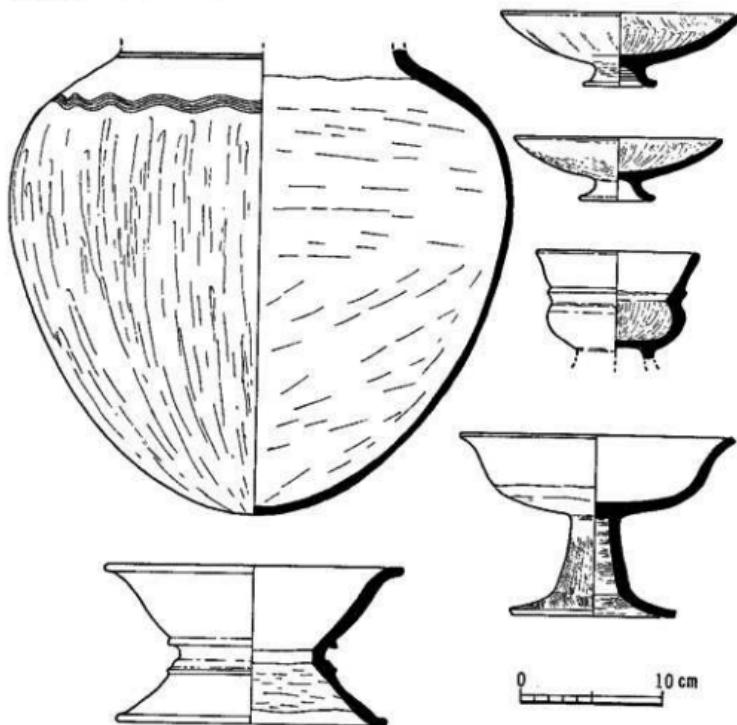
文様は壺、壺類の口縁部外面および頭部から肩にかけて横または貝殻による織細模

な平行線、波状文、羽状文、綾杉文、斜行刺突文列や竹管文などが施されるが、鼓形器台は装飾的要素がほとんどみられず、無文のものが大半を占める。

器面調整は口縁部の内外面に多くヨコナデがなされ、外面頸部以下はタテあるいは不整方向の崩毛目、内面はヘラ削りが顕著となる。胎土はよく精選されている。

この鍵尾II式の時期にはひきつづき松江市山代町来美、安来市西赤江町安養寺など四隅^(註13)突出型方墳が築かれているが、その一方で飯石郡三刀屋町松木1号墳^(註14)といった大形の前期^(註15)古墳もみられる。断片的ではあるが、安来市荒島町の造山3号墳出土の土器もこの鍵尾II式の範疇に含まれる可能性が強い。^(註16)

鍵尾II式土器のあとには小谷式土器が設定される。安来市切川町小谷土塙^(註17)や大原郡加茂町神原神社古墳^(註18)、安来市荒島町大成古墳^(註19)出土の土器などを目安にするもので、その特徴は大略次のとおりである。

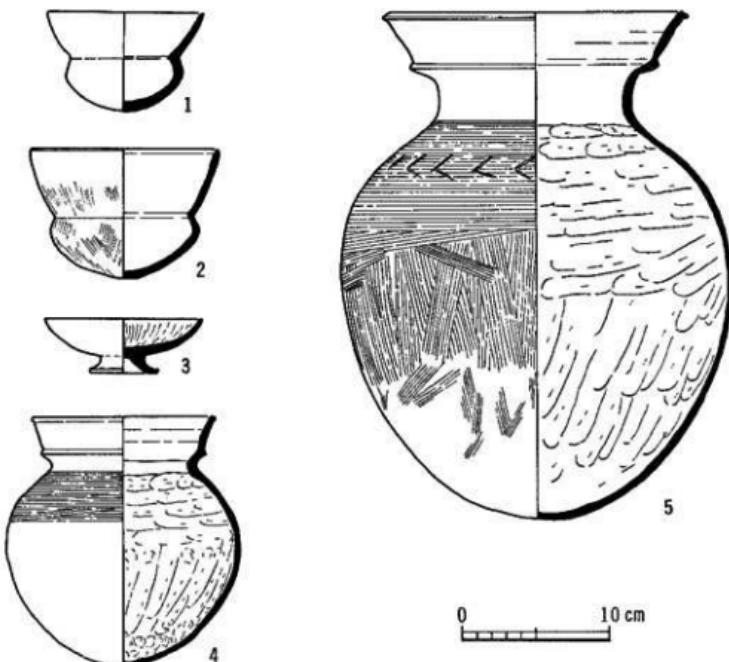


第32図 小谷土塙墓出土土器実測図

[IV] 器種としては壺、甕、高环、鼓形器台、低脚付环形上器、小型丸底壺等があり、特殊器台形上器は円筒形埴輪に変化して特殊甕あるいは通例の複合口縁甕形上器と組み合う。

器形の区別が不明瞭となった壺・甕類は倒卵形ないし球形に近い腹部にやや外傾して立ち上る複合口縁をもち、直口の壺は口縁が大きくラッパ状に開く。口唇部はやや肥厚して平坦面をもつものが多くなり、底は大形品についてもほとんど丸底となる。鼓形器台は上下の間隔がさらに狭まり、なかには筒部が縮って器受部と脚台部の接線が不明瞭なものもあってバラエティーに富む。高环形土器には环部に破を残すもの、単純に内彎あるいは内彎したのちゆるく外反する环部をもつものなど各種のものがある。低脚付环形土器は环部が浅く側曲して大形化する。小型丸底壺は口縁部がやや内彎しながら大きく開き、頸部は「く」の字状に屈折して扁平な丸底の体部をもつ。

壺・甕類の肩部に一部単純な平行線、波状文、羽状文をめぐらすものもあるが、大半は



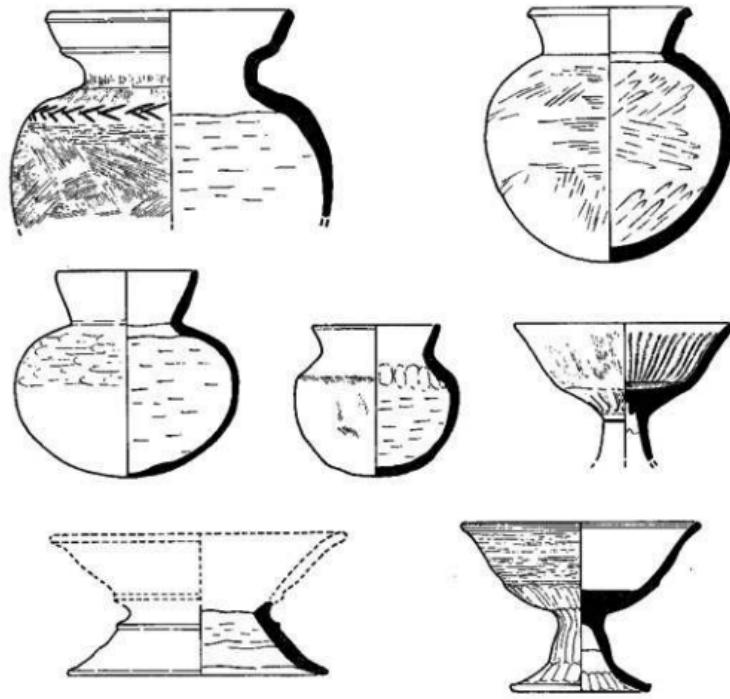
第33図 大成（1～3）、神原神社（4.5）古墳出土土器実測図

文様を欠く無文のもので占められている。

器面の調査は口縁部内外面ともヨコナデ、外面肩部はヨコ方向の刷毛目、それ以下はタテ方向の刷毛目をなすものが多く、内面はヘラ削りが顕著で器肉は薄く軽量である。

次に良好な一括資料に恵まれないが、山陰の各地に初期の須恵器があらわれるころのものとして大原郡大東町大東高校々庭遺跡出土品などを日安とする大東式土器が編年される。〔V〕この期のものには壺・壺類・高杯、鼓形器台等の器種があるが、鼓形器台は次第に減少し、初期の須恵器が普及する段階にはほとんど姿を消す。また低脚付杯形土器もあまりみられなくなる。

壺・壺類は球形に近い胴部に波線の退化した複合口縁を付すものほか、球形の胴部にゆるく「く」の字状に外反する単純な口縁をもつものがみられるようになり、次第に



第34図 大東高校々庭遺跡出土土器実測図

この種の壺が多くなっていく。小型丸底壺は体部が大きく球形をなし、口縁部は小さく外反して立ち上り、体部の高さに比べ著しく短小化する。高环は环部側面の稜から上が直線的に開くものが多く、脚部は裾が強く屈折して大きく広がるもののが目立つ。鼓形器台は上下をつなぐ接合部が縮まり、器受部と脚台部の破綻も丸味を帯び不明瞭となる。

文様は各器種を通じてほとんどみられず、器面は口縁部の内外面ヨコナデ、胴部外面はもっぱら刷毛目、内面は顯著なヘラ削りで調整される。

出錐部を中心とする終末期弥生式土器から初期の須恵器が出現あるいは普及するころまでの古式土師器について以上のような観点から、これらが〔I〕九重式→〔II〕鍵尾I式(的場式)→〔III〕鍵尾II式→〔IV〕小谷式→〔V〕大東式土器という一連の漸進的な型式変遷をたどることに誤りがないとして、ここで改めて平所遺跡における玉作工房跡と構状遺構出土の土器を再検討することにすると、まず、これらには器種の組み合せとして溝状遺構に壺、甌、器台および高环の脚部とみられるもの、玉作工房跡には変形土器、低脚付环形土器などの破片があり、量的には両者とも變形土器が最も多い。これらのうち甌、甌、鉢形土器は

①長頸ないし直口の單純口縁をもつ変形土器を除くと他はすべてやや外傾して立ち上る複合口縁を有するもので、鉢形土器もこれに類似する。脚は比較的よく張って倒卵形をなし、底は内面に丸味をもつが、いずれも小形の平底ないし不安定な丸底に近い平底を呈す。

②口縁部の外面には平行沈線をめぐらすものが多く、頸肩部にも貝殻腹縁、櫛状工具などによる平行沈線、刺突文、波状文等が入る。

③器面は口縁部の内面をヘラ磨きで仕上げるものが主体をなし、胴部外面はヘラ磨きないし刷毛目で調整されている。頸部以下の内面はヘラ削りがなされるが、器肉はなお全体に厚い。

器台形土器は

①いわゆる鼓形の器台で、筒部は比較的太く短く全体に器高が低い。

②器受部および脚台部の外面に多角化した平行沈線が走る。破片ではあるが、筒部にヘラ状工具による沈線を入れるものもみられる。

③器面の調整は器受部の内面をヘラ磨きで仕上げる。

その他の器種については高环、低脚付环形土器とも細片であるため詳細は不明であるが、以上のような諸特徴はさきに型式分類し、その変遷をあとづけた〔I〕→〔II〕→〔III〕→〔IV〕→〔V〕のうち、概ね〔II〕の鍵尾I式土器にみる特徴であり、ここに玉作工房

跡と溝状遺構出土の上器が鍵尾Ⅰ式の範疇に含まれるものであることが知られるのである。ただし、量的には少いが壺形土器にいはく縁部内面をヨコナデで仕上げたものやほとんど丸底に近いものなどがある。一部に〔III〕の鍵尾Ⅱ式に近い要素も指摘される。溝状遺構出土の複合口縁壺形土器も形状としては鍵尾Ⅱ式に近いものといえる。これは、埋葬遺跡などのように供獻あるいは副葬品として一括同時に作られた可能性の強い土器とは異り、生活跡出土の上器は一定の期間継続して使用されるもので、そこに新旧両様の要素が混在し、同時にその変化は使用頻度の高い器種、当該時期においては既に触れたように壺形土器に最も鋭敏に反映されることを示すとともに器種によっては埋葬遺跡のものと生活跡出土のものに変化の差があったことなどを現わしているのでなかろうか。

西山陰の島根県では集落跡など生活遺跡の調査研究が大きなたちおくれをみせ、土器の編年も從来主に埋葬遺跡の出土品を基準に行われてきた。今後はこれに加えて生活跡出土器との比較検討によりさらに細かい編年を行うとともに、埋葬遺跡と生活遺跡における土器の様相の差、器種の組み合せあるいは型式変化のテンポの差異などを明らかにしていく必要があろう。平所遺跡で検出された玉作工房跡と溝状遺構は必ずしも一般的な生活跡=住居跡とはいえないが、そのような意味において今回得られた一群の土器は、昨年報告した平所1号住居跡出土の鍵尾Ⅱ式土器などとともに山陰の古式土師器を再検討していく上で好資料を提供したものといえよう。

ところで、平所遺跡で検出された玉作工房跡は一辺約5.5mの隅丸方形プランを呈す窓穴で、床面中央には工作用特殊施設としての工作用ピットを有し、石製工具類、鉄製工具類などの工作具をはじめ、玉類未成品および玉類製作に際して生ずる刺片や屑片を多数出土し、玉工作に伴う工房跡としての在り方を如実に示すものであった。しかも、水晶を主な玉材とする一方、100点以上にものぼる多数の鉄製工具が発見されたほか、工房跡と密接な関連をもつと思われる溝状遺構が存在するなど、注目すべき多くの新知見を提供するものであった。ここではさきにみた出土土器による時期決定にもとづいて当遺跡における玉類生産の在り方や出雲国内所在の諸玉作遺跡との関連などといった二、三の問題について触れてみたい。

まず、工房跡、溝状遺構の構造上の特徴から検討すると、窓穴のプランはそれぞれの壁長にわずかなちがいはみられるものの一辺約5.5mの隅丸方形を示し、米子市青木遺跡^(註21)、安来市叶谷遺跡等で知られている当該時期の一般的な住居跡と平面形において特に区別し得る形態ではないことに気付く。これまで知られている玉作工房跡はそのほとんど全てが梯形プランを示し、それが玉作工房跡の一つの特色として把握されているが、本工房跡はそれ

らと異り、通常の堅穴住居跡とはほぼ同様のプランであることが注意されるのである。堅穴内床面上には工作用ピットを含めて大小8個のピットが掘り込まれている。このうちP₁～P₄はほぼ対称的な位置にあり、かつその規模、形状等から主柱穴と考えられるもので、P₇はP₂に近接して穿たれた上縁径30cm、深さ47.5cmのピットで上屋構造を支える補助的な支柱穴と考えられ、これらは堅穴住居跡に普遍的にみられるものである。これに対して工作用ピットの北西と南東に位置するP₆とP₈はいずれも上縁径約20cm、深さ5cmの小規模な浅いピットで、上屋構造に直接関係したものとは考え難いものである。工作用ピットを中心にして設けられたものとして、例えば攻玉用の作業台などといった施設の存在などが考慮されようか。工作用ピットとしたものは床面中央に位置し、長径110×短径65cm、床面からの深さ57.5cmの不整楕円形プランを呈するもので、西側に深さ10cmの深いテラスを伴う。基底部には乳白色粘土が貼られ、ピット内部およびその上縁には多数の水晶剝片、屑片が集積して発見され、これが攻玉の過程で重要な意味をもつ施設であることは容易に推察できる。この工作用ピットと呼ばれるものは、形態の相異はあるにせよこれまで調査された玉作工房跡ではほとんど全てに設けられた玉作工房跡特有の施設とされているものである。例えば史跡出雲玉作跡で検出されている工作用ピットは、小谷式土器を伴う71CⅡ号址では平所遺跡のそれと同様床面中央に楕円形のピットが穿たれ、Ⅱ期の須恵器を出土した71AⅠ号址、71BⅠ号址では實際に位置するとともに小溝を伴うなど時期が下るにつれ、より完備されたものが検出されている。つまり、時期の違いによって床面中央から實際へとその位置が移動することが知られている。

ところで、この玉作工房跡特有の施設とされている工作用ピットは、これに酷似したものが山陰地方では通常の堅穴住居跡にもみられる。すなわち、これまで山陰地方で発見されている堅穴式住居跡をみると米子市船橋遺跡、青木遺跡などでは弥生中期後半から須恵器が普及する頃まで床面中央あるいは側壁下に段をつけたり、縁を伴う方形あるいは円形の大形ピットが普遍的に認められている。また、鍵尾Ⅰ式、Ⅱ式土器を出土している安来市谷叶遺跡の第1、2号堅穴住居跡や鍵尾Ⅲ式を伴う平所1号堅穴住居跡でも同様のものが確認されている。これらのピットは内部における土層の観察などから柱穴とは考えられず、また焼土とか灰の遺存といった炉跡としての形跡も認められない。あるいは貯蔵穴かとも考えられるが、その位置や規模、形状などからすると、むしろこれは日常的に堅穴内において行われた各種工作作業と密接な関連をもつ室内作業用の施設としての可能性が強い。玉作工房跡にみられる工作用ピットは、このような通常の堅穴式住居跡で検出される大形ピットと規模、形状、時期のちがいによる堅穴内における位置の変遷などの諸点

において類似点が多く、従ってこの種ピットは単に玉作工作用の施設としてのみ発生、発展したものではなく通常の堅穴式住居跡のそれとの関連を考慮する必要があると考えられる。

なお、平所の玉作工房跡では炉といったものは検出されなかったが、工作用ピット周辺には帯状にかなり広い範囲にわたって焼土が認められたほかP₄の東側でも木炭の集積がみられ、これらの中からも玉材が発見された。これは単に堅穴内での照明や腰をとるばかりでなく、同時に水晶のもつ透明度という性質から、より透明度を増したり、打裂や剝離を容易にするために熱を加えるという役割をも果したものではなかろうか。

次に工房跡に近接して掘り込まれた弧状にめぐる溝状造構の存在が注目される。從来知られている確実な玉作工房跡にはこのような溝状造構を伴うものは確認されていない。ただし、最近一般の堅穴住居跡では大阪府紅葉山遺跡、富山県小杉上野遺跡、福岡県柳ヶ谷遺跡^(注25)、岡山県押入西遺跡^(注26)などで同様な溝状造構の存在が報告されており、その位置、形状、溝底の高さなどからいずれも排水のための施設であることが指摘されている。平所の溝状造構も工房跡に近接して山側から斜面にかけて弧状にめぐらされ、溝底は山側が高く、谷側に低く掘り込まれ、十分に排水の機能を果すものと思われる。ただし、本工房跡の場合、溝内における遺物の出土状態や堆積上層の状況などからすると、これが単なる排水溝としてのみ存在したとは理解しがたいものがある。すなわち、溝内の七層をみると大きく暗茶褐色七層（下層）と暗赤褐色土層（上層）に区分することができるが、このうちほとんど上層からのみ玉類、工具類、土器など多数の遺物が出土していることは、これが当初は排水溝としてめぐらされたものの、溝内に暗茶褐色土層が堆積したのちあるいは意識的に埋め込んだのちに攻玉と密接な関連をもつ施設として転用されたことを思わせるのである。溝が攻玉に際して具体的にどのような機能を果していたかは明らかにし得なかったが、溝内から夥しい量の玉類、工具類の出土をみてることは、屋外の溝状造構を中心とした一角でも玉作工作に伴う作業が行われていたことを示唆するものといえる。史跡出土玉作跡でも確実な攻玉の実施は不明とされているが、小谷式上器を出土した71C I号址に近接して弧状にめぐる溝状造構が検出されている。工房跡と溝の有機的な関連については明確に把握されていないが、位置関係、形状、規模等をみると平所玉作工房跡のそれに類似したものと考えられる。なお、工房跡と溝状造構の中間に検出された長楕円形の落ち込みやピットの性格も明確に把握できなかったが、内側および周辺に微量ながら鉄製工具などが発見されたことから、これらもやはり屋外での攻玉作業に関連した施設の可能性があるものとして注目される。要するに攻玉は屋内ばかりでなく屋外でも行われたと考えらるのである。

次に工房跡、溝状遺構の遺物出土状態をもとにそれらの遺物が原位置からそう大きく移動していないことを前提にしながら、そうした作業空間の分割の状況を復原してみたい。ただし、一工房内における作業空間の分割といつても屋外の作業などは季節や天候によって左右されるし、屋内作業についても同一の場所で各種工程の作業を行ったり、適宜作業の位置を移動して行うことも十分あり得ることであるのでここではもっぱら遺物の分布、出土量の多寡、遺存度の比較などから大まかな作業空間の分割状況を想定してみようとするものである。

玉類は玉材として水晶、碧玉、赤瑪瑙があり、そのうち赤瑪瑙は工房跡内から2点出土しているのみで、碧玉質材は工房跡内106点、溝状遺構内29点が出土し、工房跡内ではそれが南西隅から南壁沿いにやや集中してみられるものの、構内では水晶質材と混在しているなど玉材によって作業空間の分離といったものは理解し難い。したがっていまここでは出土量の最も多い水晶質材の分布、出土量の相違などを中心にみていくことにする。まず作業空間を遺構によって明確に区別し得る工房跡内すなわち屋内と、溝状遺構を中心とした屋外とに大きく分けて考えてみよう。水晶質材は工房跡、溝状遺構内とともに多量の出土をみているが、これらを各工程別に観察すると溝状遺構内では原石、荒削工程未完成品が多いのに対して工房跡内では調整、研磨、穿孔未成品の多いことが指摘される。また、多数の剥片、屑片を仔細にみると溝状遺構出土のものは粒が大きかつて結晶面を残すものが多いが、工房跡内出土のものは小片が多く結晶面のみられるもの少いことが注意される。こうした事実は主として屋外においては原石を荒削りする工程、屋内では調整、研磨、穿孔するという細かい作業が行われていたことを示唆するものではなかろうか。これは工房跡内に穿たれた研磨、穿孔工程に必要な施設とみられる工作用ピットの存在とも関連して十分考慮されるところである。また、調整、穿孔工程の際に用いられたと思われるケンガネ状・錐状工具などの多数の鉄製品が工房跡内から出土するとともに玉磨砥石が工作用ピットの北東と東側で発見されたことなども工房跡内では宅として調整、研磨、穿孔の作業が行われていたことを裏付けるものといえよう。

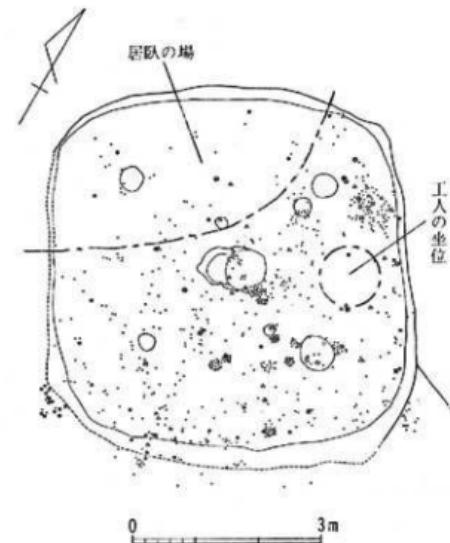
ここで屋内における空間の分割についてさらに詳細に観察すると、床面上には間仕切りなどといった構造上の区画は認められなかったが、玉類、鉄製工具類の出土分布はおおまかに北東隅から南西隅にかけての対角線から南東側にかけて多く出土し、北西側はきわめて少いことが注目され、工房跡内において宅として攻玉作業を行う場とそうでない場のあったことが想定される。平所遺跡の場合、正作工房跡は1棟しか発見されておらず、かつ同時期の堅穴式住居跡といったものも検出していないことからすれば、他の玉作遺跡

でもほとんどそうであるように工房と住居を共にしていたものと思われ、この遺物分布の希薄な一帯は居住の場として利用された空間と考えられるのではないか。工房跡内出土の玉類未成品は各工程別にそれぞれ明瞭なまとまりはみられず、工房内での分業といったものは現在のところ推察し難いが、遺物の多い南東側のなかにも工作用ピット上縁、P₂

の東側、南壁沿いなど未成品や剝片、屑片が集中して出土しているところと P₂ と P₃ の中间のようにほどんど遺物のみられない場所が観察され、ある程度工人の作業した位置を設定することが可能と思われる。すなわち、P₂ と P₃ の間にみられる径 1 m あまりの無遺物地帯は工人の坐した位置を示すものと考えられる。

ところで工房跡、溝状遺構とともに多量の出土をみて古式土器についてみると次のような注目すべき事実がある。すなわち工房

第35図 遺物出土分布からみた工房跡内の空間分割想定図



跡内出土の土器は P₂ 内に埋置されたとみられる壺形土器 1 を除くとすべて破片の状態でまとまりを欠いているのに対し、溝状遺構では多数の土器が完形あるいはそれに近い状態でかつ個体数も工房跡内出土数の約 2 倍が出土している。工房跡と溝状遺構は、位置関係や出土遺物の様相などから密接な関連をもつ遺構と考えられるだけに、両者のそうした遺物出土状態の相違はきわめて奇異な感を与える。この事実をどのように理解すべきか、十分な証左はないが、例えばここが生産の場、生活の場として廃棄されるにおよんで、それまで工房内を中心として使用していた土器類を溝状遺構あるいはその近辺に据え置き、これにある種の飲食物を供え、廃絶の際の儀式などといったものをとり行ったというようなことが考えられないだろうか。

一方、工房跡内 P₂ 出土の壺は意識的に主柱穴の埋土内に埋置されたとみられるよう

山上状態にあった。これは工房の構築に際し、竣工の無事を地神に祈願するといった、いわゆる魂鏡めの祭りとでもいうべきものが行われたことを示唆するものではなかろうか。神饌を供え、鎮物つまり平所の場合、喪形土器の頭部を打ち欠いたものを柱穴の埋土中に埋納することによってその儀式をとり行つたのであるまい。

いずれにしても住居等の構築や廃棄に際して何らかの形で神まつりの行われたことは十分予想されるところである。今後、類例の増加を俟つてさらに詳しく検討すべき問題といえよう。

以上、工房跡と溝状遺構について構造上の特徴や遺物分布の在り方など検討してきたが、要するに平所の玉作工房跡は、工作用ピットの不定形さに加え、工房跡のプランが当該時期の一般的な窓穴住居跡と同様な隅丸方形を示すこと、また排水溝を工作施設として転用したと考えられることなど、その構造はいまだ定形化し、完備された玉作工房跡とはい難いものである。しかし、遺物分布の在り方は工程によって屋内作業と屋外作業が分離し、屋内においてはさらに作業空間が限定されるというように、比較的分業の進んだ状態がうかがえ、同時に多量の玉類・鉄製・石製工具類の出土などから專業的ともいえる盛んな攻玉の実施が知られるのである。ただ、木遺跡では周囲のはば全域にわたる調査を行ったにもかかわらず他には何ら玉作に関係する遺構は発見されなかった。後世の削平等によっていくつかの遺構が消滅したことを考慮に入れたとしても、地形等の制約からそう多くの玉作工房跡の存在は考えられず、いまのところその在り方は単位集団内における小規模な専業的生産形態を示すものと思われ、後に集団的な専業集団として組織化されるような素地は認め難い。

ところで、山雲国には多くの玉作関係遺跡があり、これまで八東郡玉湯町所在の史跡出雲玉作遺跡、松江市東部町忌部玉作遺跡をはじめ松江市大草町出雲国庭内玉作遺跡、大原郡大東町大東高校々庭遺跡、安来市佐久保町佐久保遺跡などが知られていることは、はじめにも記したところである。

そしてこれらの玉作関係遺跡は大別して安来平野（佐久保、折坂玉作遺跡）、意宇平野（平所、国庭内玉作遺跡）、花仙山周辺地域（忌部、史跡出雲玉作遺跡）、斐伊川流域（大東高校々庭遺跡）の4地域に分布している。いまのところ発掘調査によって内容の明らかにされているものはそう多くはないが、このうち古来著名な史跡出雲玉作跡は最も盛行を極めた玉作で、昭和44年から3次にわたる発掘調査によってこれまで広大な各種玉作関係遺物と多数の工房跡が発見されている。また、忌部玉作遺跡の中島地区でも大東式土器を作り工房跡1が調査され、各種多数の玉類未成品が出土している。こうした既往の調査結

果に加え、採集遺物の検討などからすると、従来、これら出雲国玉作遺跡のなかで最古のものは史跡出雲玉作跡71C II号址で示される小谷式土器のころで、碧玉製管玉を主として生産していたことが知られる。この時期の工房跡は隅丸方形プランを呈し、その中央に不定形な工作用ピットを伴っている。続く大東式土器の時期のものとして忌部玉作遺跡中島地区で良好な工房跡が発見されている。ここでは碧玉・赤瑪瑙製の管玉、勾玉に加えて新たに滑石製品の製作が始まられていることが注目されるが、これまで平所玉作工房跡発見以前は水晶製玉類の出土もこの時期のものが最古の事例に属するものであった。この時期の工房跡は梯形プランを示し、工作用ピットは壁際によって小溝を伴うなど定形化したものとなる。次に確実な須恵器I期のものを作り工房跡は検知されていないが、須恵器II期の時期には史跡出雲玉作跡69A I号址、69B III号址、71A I号址、71B I号址など多数の工房跡が知られている。この期のものは滑石製白玉の生産が多くなる傾向にあるが、玉材の種類、工房跡のプラン、工作用ピットの形態と位置などは以前の大東式土器のころとあまり変わることろがない。なお、遺構は確認されていないが、大東高校々庭遺跡は大東式土器のころから須恵器II期のころ、佐久保遺跡は須恵器II期のころのものと思われる。

とすると今回発見された平所の玉作工房跡は錐尾I式土器を伴うものであって既出の出雲国玉作遺跡のなかでは、最も古い時期のものとなる。つまり出雲国における玉作の出現がさらに古く遡ることが明らかになったのである。そうした中で改めてこの工房跡をみると玉材としてここでは主に水晶質材が用いられており、この点当該時期の玉作工房跡の中では全国的にも稀有な事例に属するものである。平所玉作工房跡の系譜や他地域との関係については、今後、資料の増加を俟って検討すべき内容の問題であるが、ただここで注意すべきは、伴出した碧玉製板状未成品が施溝したのち分割した形跡をとどめていることで、それが弥生時代後期から古墳時代前期にかけて北陸地方に多くみられる管玉の施溝未成品と共に通る技法と考えられることである。北陸と山陰との関係は弥生後期以来、土器型式や四隅突出型方墳の分布などを通じて少なからぬ関係のあったことが知られていることとも関連して、あるいは玉類生産の面でも、北陸方面とのつながりが強かったのではなかろうか。

前記したように平所遺跡では長期にわたり集団的に攻玉を実施した形跡は認められないが、工房廃絶後の工人の行方について、出雲国所在の諸玉作遺跡、とりわけ玉湯町の玉作との関係においてここに一つ興味深い事が指摘される。すなわち出雲国内でこの平所玉作工房跡に近い時期のものとして史跡出雲玉作跡71C II号址が知られている。この工房では碧玉製管玉を主として製作し、工房跡床面が傾斜していることなど平所の場合とやや

異なるが、工房跡の平面形、工作用ピットの位置・形態、碧玉製板状未成品の出土など次にあげるいくつかの共通点を指摘することができる。

- ① 工房跡の平面形は共に隅丸方形を呈す。
- ② 工作用ピットは相方共に工房跡内床面中央に位置し、不定形なものである。
- ③ 71C II号址出土の碧玉製板状未成品は2箇あり、うち1つは長さ6.55cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmの形割未成品、他の1つは長さ3.65cm、幅2.45cm、厚さ0.65~0.5cmの研磨未成品で、形態・大きさともに平所遺跡出土のそれに類似する。

このほか、71C II号址の南西に位置する71C I号址は明確な工房跡としては確認されなかったが、壁穴に近接して平所玉作工房跡で確認された弧状にめぐる溝状遺構に類似する遺構が検出されている。平所玉作工房跡と史跡出雲玉作跡71C II号址、71C I号址との間には土器型式の上で1型式の空白があるもののさきの共通点からすると何らかの密接な関連があったものと推察できる。水晶製玉類を主として生産していた平所玉作工房跡の工人集団は古墳時代前期における碧玉製品の需要の増加とともに原石採取にあたってより便利な原石産出地である花仙山周辺に工房の場を移したものとも理解できよう。

これまでくり返し述べてきたようにこの平所玉作工房跡では水晶製玉類の生産が主体をなしている。作出された水晶製玉類の供給先について考えてみると、今のところ出雲国はもとより山陰地方では古墳時代前期の水晶製玉類を伴う遺跡は発見例がない。しかし全国的にみると弥生中・後期から古墳時代前期にかけていくつかの事例が報告されている。^(註29) すなわち岡山県倉敷市西尾辻山田遺跡、福岡県鞍手郡若宮町沙井掛遺跡、福岡県鞍手郡鞍手町高木遺跡、^(註30) 福岡県春日市日佐原遺跡、^(註31) 福岡県糸島郡前原町中毛遺跡、^(註32) 長崎県上郡郡峰町木坂石棺、^(註33) 長崎県上郡郡上対馬町塔ノ首遺跡などがそれである。このうち岡山県辻山田遺跡、福岡県沙井掛遺跡はいずれも弥生後期終末の墳墓群で、かつ平所の水晶製玉類に類似した算盤状の玉が出土していることが注意される。ただし、今後山陰地方においても該期の水晶製玉類が発見されることは十分予想されるところであり、平所の玉作工房で生産された水晶製玉類の供給先についてはなを今後の課題としておきたい。

出雲國玉作といえば古文献に記載された全国でも唯一に近い玉作であり、それが考古学的事実とも一致するという点全国的にも注目すべき内容を含んでいる。そしてこれが道上にのぼる時、常に古代社会における玉作部の性格や生産構造の特質と関連して論議されることが多い。出雲国内に所在する諸玉作遺跡がそれいかなる生産体制のもとで、どのように製品の供給を行っていたか、またこれらのなかで後に玉作部として組織化されたものがあるとすれば、その成立、性格、隸属の仕方といった問題についてもこの際触れるべ

きであろうが、問題が大きいだけにここでは平野遺跡を中心とした若干の問題点の指摘にとどめ、それらの点は今後、さらに追求すべき課題として残しておきたい。

(前島己基・松本岩雄)

- 註1 内田才「安来にもあった玉造一次玉造跡の発見ー」『季刊文化財』第18号島根県文化財委員会 (昭和47年)
- 2 内田才「原史・古代」『安来市誌』(昭和45年)
- 3 近藤正「出土品」『島根県文化財調査報告』第5集 (昭和43年)
- 4 三湯町教育委員会『史跡出雲玉作跡』(昭和47年)
- 5 山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収 (昭和46年) 以下、須恵器については全て山本清氏の編印に準ずる。
- 6 寺村光晴「古代玉作の研究」(昭和41年)
- 7 謙岡法峰「古代社会の発展」『大東町史』(昭和47年) 前島己基「大原郡 大東高校々庭墓跡」『玉』第1号 (昭和45年)
- 8 前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器—土器型式にみるその編年的位置についてー」『考古学報』第62巻第3号 (昭和51年)
- 9 近藤正・東森市良・内田才「島根県安来平野における土壙墓」『上代文化』第36號 (昭和41年)
- 10 山本清「山陰の土師器」『山陰古墳文化の研究』所収 (昭和46年)
- 11 近藤正・前島己基「島根県松江市の場上壙墓」『考古学雑誌』第57巻第4号 (昭和47年)
- 12 近藤正編「仲仙寺古墳群」(昭和47年)
- 13 山本清氏調査 (昭和45年)
- 14 内田才・野津弘雄・勝部昭「安来・安養寺古墳群」『吉田考古』第14号 (昭和51年)
- 15 島根県教育委員会『松本古墳発掘調査報告』(昭和40年)
- 16 島根県教育委員会『造山3号墳発掘調査報告』(昭和43年)
- 17 註8に同じ。
- 18 註7に同じ。
- 19 沢田廣矩・東森市良「古代の国々ー4 山陰の国」(昭和48年) のP105に実測図が掲げられている。
- 20 註6に同じ。
- 21 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ」(昭和51年)
- 22 昭和50年11月に三宅博士が調査したものである。
- 23 寺村光晴「古代玉作の研究」P99~142 (昭和41年)
- 24 山陰考古学研究所『福市遺跡の研究』(昭和44年)
- 25 高橋市史編さん委員会「高橋市史」第6巻考古編 (昭和48年)
- 26 橋本正『高速自動車国道北陸自動車道関係歴史文化財緊急発掘調査報告書小杉上野遺跡一記録町真編ー』富山県教育委員会 (昭和49年)

- 27 池辺元明「柳ヶ谷遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一』福岡県教育委員会（昭和52年）
- 28 瓢箪山県教育委員会「押入西遺跡」『崎山県埋蔵文化財発掘調査報告3』（昭和48年）
- 29 関野忠彦・間壁寛子「辻山田遺跡」『鹿敷考古館研究集報』第10号（昭和49年）
- 30 福岡県教育委員会「くらてのむかしーその3ー」（昭和46年）
- 31 岩島邦弘編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告一』福岡県教育委員会（昭和52年）
- 32 鎌山猛・淡邊正気「福岡市日佐原の弥生時代墓地」『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』（昭和34年）
- 33 御山康雄氏教示
- 34 古川邦洋「対馬の考古学」（昭和51年）
- 35 小畠富士雄「塔ノ首遺跡」『対馬』（昭和49年）

平所遺跡出土土器一覧表

(1) 滑状縫接出土土器

器種(分類)	補圖番号	法寸(cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
A	14-1	口径 16.7 脣部最大径 25.2	複合口縫。底部はゆるやかに反転。口縫部は角度をかえて外傾。胴はよく彫り球形に近い。	口縫部、肩部に平行沈線。底部に波状(貝殻)。	口縫部内面ヨコ方向のへラ磨き。脣部外面上半ハケ目、下半はへラ削。	口縫部～脣部下半
形	B 14-2	口径 17.4 脣部最大径 27.2 底径 7.4 高さ 33.8	脣部は卵形。口縫はほぼ垂直に立ち上がる。底盤は平底。脣部最大径は中間にある。	脣部に断面三角形の貼り付け内帯。	風化のため不詳。脣部内面にハケ目痕。	充形無縫蓋の系統か。
土器	C 14-3	口径 10.0	表面で「く」の字状を呈す。留痕は薄い。	無文	口縫内外ともへラ磨き。	口縫部～脣部胎土精良
器	D 14-4	口径 7.2 脣部最大径 11.7 底径 5.0 高さ 9.0	脣部は扁平球形。口縫は近く、やや外傾して立ち上がる。底盤は平底。口縫に2孔の焼成前穿孔。	脣部に細いへラ磨き沈線による文様。4条を1單位とした沈線群により5段の文様帶を構成。「ノ」の字状の斜線を密に連ねる。	口縫内外はへラ磨き。脣部内面下半はへラ削り。	光形 器表の一部に赤色顔料残存。胎土精良。
	E 14-5	口径 9.5 脣部最大径 14.8 口縫部高さ 8.0	いわゆる長颈瓶。脣部は肩が削る。口縫部はわずかに外反しながら立ち上がる。	無文	口縫部内面、脣部外面はヨコへラ磨き。口縫部外面はタテ方向のへラ磨き。脣部内面は指によるナゲ肌、ハケ目が残る。	口縫部～脣部下半胎土精良。 色調は赤褐色。
甕	A 14-6	口径 13.8	口縫部内面に突起をなす。ほぼ直線的に外傾する。	口縫と脣部に浅い平行沈線(貝殻)。	口縫部内面は細いへラ磨き。脣部内面はへラ削り後ナゲ。	口縫部～脣部上半 口縫部外面上に灰化物付着。
形	Az 14-7	口径 11.8	脣部はゆるやかに肩曲。口縫は内側に段をなして立ち上がる。	無文	口縫部内外ともヨコナデ。	口縫部～脣部外面上に灰化物付着。
土器	14-8	口径 12.0 脣部最大径 14.6	口縫部の形態は同じ。口縫下端がわずかに外方に突き出す	無文	口縫部内外ともヨコナデ。脣部は外面深いハケ目調整。内面はへラ削り。	口縫部～脣部下半 器表に灰化物付着。
上器	Aa 14-9	口径 13.5 (推定) 脣部最大径 15.6	脣部は直線部分を残して外反。口縫は明瞭な段をなして立ち上がる。胴張りは弱い。	脣部に羽状文(貝殻)。	口縫部は内外ともヨコナデ。脣部内面はへラ削り。	口縫部～脣部下半 (口縫端欠)
	14-10	口径 16.4	口縫下端が重れる。底部の留痕が少い。	口縫部に平行沈線(貝殻)。一部ヨコナデにより消える。	口縫内面はヨコナデ。	口縫部～脣部
器	B1	14-11 口径 18.0	脣部は鋭角的に屈折。口縫は内側に段をなして立ち上がる。口縫下端がわずかに壊れる。留痕は厚め。	口縫と脣部にごく浅い平行沈線(貝殻)。	口縫内面の製造法未記載のため不詳。	口縫部～脣部 口縫外面灰化物付着。

器種 (分類)	捕獲 番号	法 量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
	14-12	口径 18.8	口縁下端の垂れはごくわずか。脇部が厚い。腹部は「く」の字状に屈折し、口縁は内側に浅い段をなして立ち上がる。	口縁部に浅い平行沈線(貝殻)。	調整法は風化のために不詳。	口縁部～脇部 器表に炭化物付着。
B1	14-13	口径 19.0	頭部は「く」の字状に屈折。口縁は浅い段をなして外傾。脇部はナテ唇をなす。口縁下端が走る。	口縁部に平行沈線。脇部には平行沈線と「ノ」の字状の刺突文(貝殻)。	口縁内面はヨコナデから脇部は横方向のヘラ削り。	口縁部～脇部上半
型	14-14	口径 18.2 底径 6.5	口縁下端がわずかに垂れる。脇部の脇理薄い。底部は平底、脇部の厚さとはほぼ同じ。	口縁部に平行沈線(貝殻)。一部ヨコナデにより消える。脇部は平行沈線と「ノ」字状の刺突文(貝殻)。	口縁部内面は不詳。脇部外側はハケ目、内面はヘラ削り。	口縁部～脇部・底部 脇部外側に炭化物付着。
	14-15					
形	15-1	口径 18.0	頭部は「く」の字状に屈折。口縁は浅い段をなして立ち上がる。脇部はとがり気味	口縁の下部分に平行沈線。(貝殻)	口縁部内面はヘラ削り。脇部内面はヘラ削り。	口縁部～脇部
	15-2	口径 18.0	頭部は比較的ゆるやかに屈曲。脇部の脇理薄い。	無文	口縁部は外面ヨコナデ、内面ヘラ削り。	口縁部～脇部 口縁部外表に炭化物付着。
土	15-3	口径 17.6	頭部は比較的ゆるやかに屈曲。口縁は浅い段をなして外傾。脇部は丸くおさめる。器壁は薄い。	無文	口縁内面は風化のため不詳。外面はヨコナデ。脇部以下はヘラ削り。	口縁部～脇部
	15-4	口径 18.8 脇部最大径 17.0(推定) 底径 1.5 器高 18.8 (推定)	頭部は比較的ゆるやかに屈曲。口縁は浅い角度で立ち上がる。口縁端は丸くおさめる。底部は丸底に近い。	口縁は無文。脇部には平行沈線と「ノ」の字状の刺突文(貝殻)。	口縁は平行沈線の施文後内外ともヨコナデ。脇部外側下半はヘラ削り、内面下半はココ方向のヘラ削り。	口縁部～底部 (脇部中央穴) 器表に炭化物付着。
器	15-5	口径 16.0 脇部最大径 16.0 底径 8.2 器高 18.0 (推定)	頭部は「く」の字状に屈折。口縁は段をなして立ち上がる。脇部は平底。最大径は中位よりやや上。底部は薄く広い半円。	口縁に平行沈線。脇部に平行沈線と押し引き刺突文(貝殻)。	口縁内面あらいヘラ削り。脇部外側上半ハケ目状、内面ヨコ方向のヘラ削り。	口縁部～底部 (脇部中央穴) 脇部下半に炭化物付着器壁が薄い。
	15-6	口径 15.0	頭部内面は段をなして「く」の字状に屈折。口縁内面は浅い段をなし、外傾して立ち上がる。脇部は丸くおさめる。	口縁に平行沈線(貝殻)。	口縁部内面はヘラ削り。脇部内面ヘラ削りナデ。	口縁部～脇部上半 器表に炭化物付着。
	15-7	口径 16.9	頭部は「く」の字状に屈折。口縁は浅い段をなして外傾。	口縁に平行沈線。	口縁部内面はヘラ削り。	口縁部～脇部 器表に炭化物付着。

上器一覧表

器種 (分類)	標目番号	法寸 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
		口径 16.2 副部最大径 16.0 底径 4.5 高さ 18.5	頭部は「く」の字状に屈折、やや厚い。 口縁は設をなして、比較的強く外反。副部は卵形、最大径はほぼ中位。底部はしっかりした平底で、内面は丸く仕上げる。	口縁と副部から肩部にかけて深い平行沈線。肩部ではさらに波状文(貝殻)。	口頭部内面はヨコヘラ磨き。頭部外面もヘラ磨き。内面はヘラ削りがなされる。底部内面は指派压痕は残る。	完形 器表に炭化物付着。
		口径 17.0 副部最大径 16.5(推定) 底径 1.9 高さ 17.3 (推定)	頭部は「く」の字状に屈折。口縁は浅い段をなして立ち上がる。頭部は卵形、最大径は中位よりやや上。底部はわずかに平面を残す。	口頭部は無文。肩部は風化して不詳だが、平行沈線があるようだ。	口頭部内外ともヨコナダ。肩部下半はヘラ磨きか。底部内面には指頭压痕が残る。	口縁部～底部(頭部中央火穴) 副部下半に炭化物付着。
壺	B ₂	15-10 口径 18.0	頭部は「く」の字状に屈折。口縁は設をなして立ち上がる。口縁端付近で肥厚し、丸くおわる。	無文	口頭部外面ヨコナダ。内面は風化のため調整法不詳。	口縁部～頭部
		口径 16.2 副部最大径 17.3	頭部は「く」の字状に屈折。口縁はわずかに段をなして立ち上がる。頭部は卵形、副部付近で肥厚し丸くおわる。副部はやや強く盛る。	口縁に浅い平行沈線、肩部に平行沈線と押し引き割文(貝殻)。	口頭部内面はヨコ方向のヘラ磨き。頭部外面上半はハケ口縁、内面はヨコヘラ削り。	口縁部～ 頭部下半 副部外面に炭化物付着。
形		口径 17.2 副部最大径 17.0 底径 2.3 高さ 17.3 (推定)	頭部は「く」の字状に屈折。口縁は浅い段をなして立ち上がる。頭部はナゼ肩をもち張りは少ない。最大径は中位よりやや上。底部はわずかに平面を残す。	口縁に平行沈線、肩部に「ノ」の字状の刺突文(貝殻)。	口頭部内面はヨコヘラ磨き。副部内面上半はヨコ、下半はタチ方向のヘラ削り。頭部外面下半はハケ口縫調整。	口縁部～底部 (一部) 器表に炭化物付着。
土		口径 19.2 (推定)	頭部は直線部分を残して弧曲。口縁は設をなして立ち上がる。手平。肩はナデ肩。	口縁外面に平行沈線、肩部に扇状文(貝殻)。	口頭部内面はヘラ磨きか。頭部はヘラ削り。	口縁部～ 頭部上半 (口縁端火穴) 精良なつくり。
	B ₃		頭部は直線部分を残して弧曲。口縁は設をなして立ち上がる。立ち上がりの割合は狭い。頭部はナデ肩。	肩部に羽状文(貝殻)。	口縁内外ともヨコナダ。頭部は風化のため不詳。	口縁部～ 副部上半
器		口径 16.0				
		15-15 口径 16.4 (推定)	口縁下端が外方に突出。頭部はゆるやかに屈曲。口縁は浅い段をなす。	肩部に稚拙な波状文(貝殻)。	口頭部内外ともヨコナダ。頭部内面ヨコ方向のヘラ削り。	口縁部～副部上半(口縁端火穴) 口縁外向下端の一部に炭化物付着。
	B ₄					
		15-16 口径 16.8	口縁下端が外方に突出。頭部はゆるやかに屈曲。口縁は設をなして立ち上がる。	口縁外面にごく浅い平行沈線。頭部に「ノ」の字状の刺突文(貝殻)。	口縁は平行化線を施文後ヨコナダ。頭部には貝殻による調節溝。	口縁部～頭部 焼成良好 精良なつくり。
		B ₅ 16-1 口径 18.6	頭部は鋭角的に屈折。口縁は明顯な段をなし、窪出気味に立ち上がり強く外反する。頭部は角張り堅厚は薄い。	口縁端部に平行沈線。肩部に羽状文(貝殻)。	口頭部内面ヨコナダ。頭部内面はヘラ削り。	口縁部～ 頭部上半 口縁外向に炭化物付着。

器 種 (分類)	插図 番号	法 量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備 考	
甕	16-2	口径 23.8 (推定)	口縁下端がわずかに垂れる。頸部は「く」の字状に屈折し、口縁は段をなして外傾。	口縁部、頸部外面に平行沈線(貝殻)。	口縁内面へラ磨き。	口縁部へ頸部(口縁端火)	
	C ₁		口縁下端がわずかに垂れる。口縁は直線	口縁に平行沈線(貝殻)。	口縁内面へラ磨き。	口縁部へ頸部	
	16-3	口径 24.0	氣味に外傾。頸部附近で肥厚し、丸くおさめる。			器表に炭化物付着。	
			口縁下部が厚い。頸部は「く」の字状に屈折し、口縁はわずかに角度をかえて外傾する。底部は平坦面を形成。胴部はナゲ肩。	口縁に平行沈線(拂狀工具)。	口縁部内面へラ磨き。	口縁部へ胸部上半	
	C ₂	16-4	口径 20.6			胎土は砂粒少。	
		16-5	口径 24.0	頸部は鋭く屈折。口縁は浅い段を残して外傾する。	口縁上端に平行沈線が残るが他は風化のため不詳(貝殻)。	口縁部内面へラ磨き。口縁部へ頸部	
		16-6	口径 22.2	頸部は「く」の字状に屈折。口縁部は浅い段をなして外傾。胴部は張る。	口縁部に平行沈線、脇部に平行沈線と「ノ」の字状刺突文(貝殻)。	風化若しく不詳。口縁部へ胸部上半	
		16-7	口径 22.6 胸部最大径 22.4	頸部は「く」の字状に屈折。浅い段を残して外反。底部は丸くおさめる。胴部はなで円、張り少なく最大径も中位よりやや下。	口縁と脇部に浅い平行沈線(貝殻)。	風化若しく不詳。口縁部へ胸部下半	
	C ₃		16-8	口径 22.2	頸部は「く」の字状に屈折。口縁部は浅い段をなして立ち上がる。胴部はヨリモ外方へ張る。	口縁部に平行沈線。脇部には平行沈線と波状文、一部で「ノ」の字状の刺突文(貝殻)。	口縁部へ頸部上半
		16-9	口径 20.8	頸部は「く」の字状に屈折。口縁部は直線的に外傾。器壁が薄い。	口縁部に平行沈線。脇部に平行沈線と「ノ」の字状の刺突文(貝殻)。	口縁部へ頸部上半	
甕		16-10	口径 22.0	頸部は「く」の字状に屈折。口縁部は直線的に外傾。	脇部に「ノ」の字状刺突文(貝殻)。	口縁部へ頸部上半	
甕	C ₄	16-11	口径 21.0 胸部最大径 23.0	頸部はゆるやかに屈曲。口縁は段をなし立ち上がる。底部は丸くおさめる。口縁の船は比較的狭い。胴部は張り、最大径はほぼ中位か。	無文	口縁は平行沈線後ヨコナデ。内面はヘラ磨き。脇部はヘラ磨き、内面はヨコ方向のヘラ削り。	
	D	17-1	口径 37.0	底部は「く」の字状に屈折。口縁は段をなし立ち上がるがその幅は口縁に比して狭い。器壁が厚い。	口縁部に粗粒な平行沈線(貝殻)。	口縁部内面はヨコヘラ磨き。脇部内面はヨコ方向のヘラ削り。頸部炭化物付着。	

七 器一覧表

器種 (分類)	捕獲者号	法量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
甕	17-2	口径 27.0	頸部はゆるやかに屈曲。口縁は明瞭な唇をなして立ち上がる。腹部は口縁より外方に張る。	口縁部と肩部に平行沈線(貝殻)。	口縁部内面へラ磨き、肩部はヨコヘラ削り。腹部へ肩部外側はへラ削り。	口縁部～頸部上半口縁外面の一部に炭化物付着。
形土器	D	17-3 口径 25.0	「く」の字状に屈折。口縁は内面にわざかな段をなして立ち上がる。口縁上端は斜くとがる。口縁下端は外方に突き出す。腹部は張るが、器底は湾い。	無文	口縫部内外ともヨコナデ。腹部内面はヨコ方向のへラ削り、外側は斜いハケ目調整。	口縫部～肩部上半
小	17-5 底径 3.2	平底。底部と脚部の境界が不明確。厚さは底部と脚部でかわらない。	無文		脚部外面たて方向のハケ目(貝殻の可能性もある)。内面はたて方向のへラ削り。	脚部下半～底部
形	17-6 底径 5.2	平底。内面は丸く仕上げる。	無文		不詳	底部内面に炭化物付着。
層	17-7 底径 6.2	高台状を呈す。凹み底で器底が導い。	無文		不詳	底部
脚	17-4 脚部最大径 30.2	張りは弱い。器底は脚部に近くほど厚い。	肩部に2段、上段は爪形状、下段は平行沈線(貝殻)。		脚部外面下半はナデ、内部はへラ削り。	脚部上半～下半文様の配置が通常とは逆。器表に炭化物。
・	17-8 底径 6.2	平底。脚部と底盤の厚さがほぼ同じ。	無文		脚部外面はハケ目痕が残る。	底部
大	17-9 底径 8.0	しっかりした平底。内面は丸く仕上げる。	無文		底部内面にハケ目状痕。	底部
底	17-10 底径 8.6	厚く、しっかりした平底。内面は丸く仕上げる。	無文		脚部外側はへラ磨き、底部内面はへラ削り後ナデする。	底部
形	17-11 底径 8.0	平底。底部の器壁薄く、わずかに凹む。内面には指印圧痕が残る。	無文		外側はへラ磨き、内面はたて方向のへラ削り。底盤内面には指印圧痕が残る。	脚部下半～底部
部	17-12 底径 5.0	しっかりした平底。底面がわずかに凹む。内面は丸く仕上げる。	無文		脚部上方はハケ目状の網目、下方はタテ方向のへラ磨き。内面はタテ方向のへラ削り。底部には指印圧痕が残る。	脚部下半～底部
品	17-13 底径 4.4	平底。底部は正円ではなく梢円形に近い。	無文		外側は荒いへラ磨き、一部にハケ目が残る。内面はへラ削り後ナデ。	脚部下半～底部
鉢形土器	17-14	口径 16.3 脚部最大径 15.8	頸部はゆるやかに屈曲し、口縁部内面に段をなして内傾する。端部は半丸面を残す。	無文	口縫部は内外ともヨコナデ。頸部は外側へラ磨き、内面はヨコ方向のへラ削り。厚手。	口縫部～脚部下半 器表に炭化物付着。

器種 (分類)	標図番号	法量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
器合形土器		口径 24.0	ラッパ状に外反する。端部付近の内側に不鮮明な棱をつくる。端部は丸くおさめる。	平行沈線(貝殻)。	内面はヘラ磨きか。	受部上半 風化著し。
	17-15	端部径 20.8	愛戴と同様ラッパ状に開くが、そりは弱い。端部内側に削広い凹縁状のものがめぐる。端部は丸くおさめる。			脚部端 風化のため調整法不詳。
	17-16	径 8.0	比較的短い。	3条のヘラ彫北線。	内外とも横方向にへう磨き。外面は特にていねい。	筒部
高壺形土器	17-17	端部径 9.8	わんを伏せた形態をなす。内面は端部付近で急に厚さを感じて棱をつくる。端部断面は方形をなす。	無文	端部付近はヨコナデ。ていねいな作り。	脚部 胎土精良。
	17-18	端部径 15.5	壺の複合口縁に似る。やや外傾するが、外面のカーブは内側する。	無文	内外ともヨコナデ。	底部。胎土精良でていねい。壺の可能性もすこされず。

(2) 工房跡出土土器

器種 (分類)	標図番号	法量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
甕	A 18-1	口径 13.0	瓶部は段をなして屈折。口縁は段をなし立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁下端は下方に墜れる。	口縁に浅い平行沈線(貝殻)。	口縁内面へう磨き。脚部内面はへら削りか。	口縁部へ頸部器表に風化物付着。
	18-2	口径 15.2	口縁内面に明瞭な段、直面に近く立ち上がり外反する。	口縁に平行沈線(貝殻不詳)。	口縁内面へう磨き。	口縁部
	18-3	口径 15.1	頸部は「く」の字状に屈折。口縁部は明瞭な段をなして外反。	口縁外面に浅い平行沈線(貝殻)。		口縁部へ頸部
	18-4	口径 16.6	口縁は浅い段をなし立ち上がる。端部は丸くおさめる。	口縁に浅い平行沈線(貝殻)。	口縁部内面はヨコ方向のへう磨き。	口縁部へ頸部
	B 18-5	口径 16.4 (推定)	頸部は直線部分を残して屈曲する。口縁は段をなし立ち上がる。頸部は器壁が厚い。	頸部に羽状文(貝殻)。	口縁内外ともヨコナデ。脚部内面へら削り。	口縁部～脚部上半(口縁端少)
	18-6	口径 18.2	頸部は比較的ゆるやかに屈曲。口縁部内面は浅い段をなし、ほぼ直面に立ち上がり、強く外反する。口縁下端が外方に突出。	無文	口縁内外ともヨコナデ。	口縁部～頸部
	C 18-7	口径 20.0 (推定)	頸部は「く」の字状に屈折。口縁は浅い段を残して立ち上がる。	口縁に平行沈線(貝殻)。		口縁部～頸部(口縁端少)
	18-8	脚端径 7.9	脚端は低く外方に張る。	無文	脚部内面へう磨き。脚部外面赤色顔料塗布。	脚部 胎土は砂粒少く精良。

底形
脚上
付器

図 版



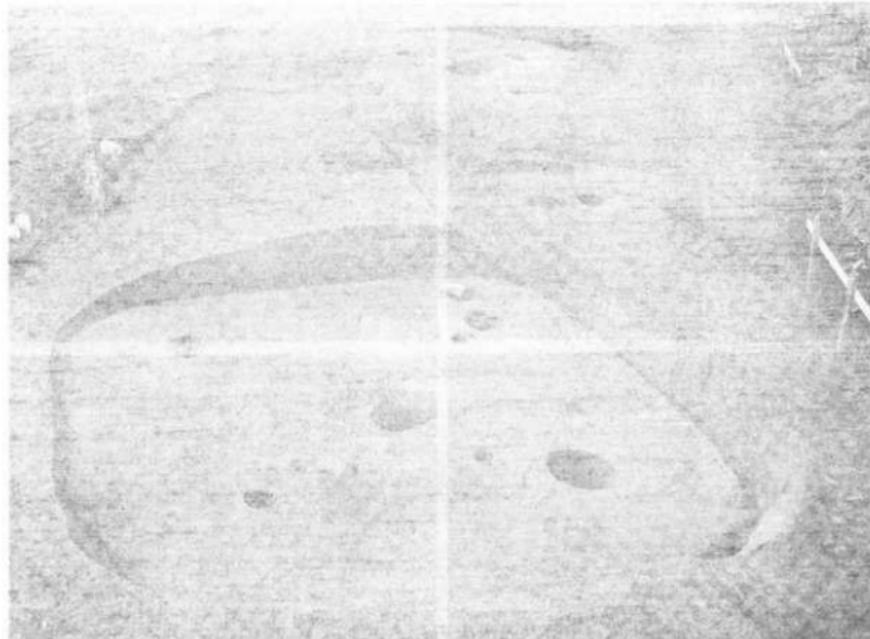
1 遺跡遠景（南西から）



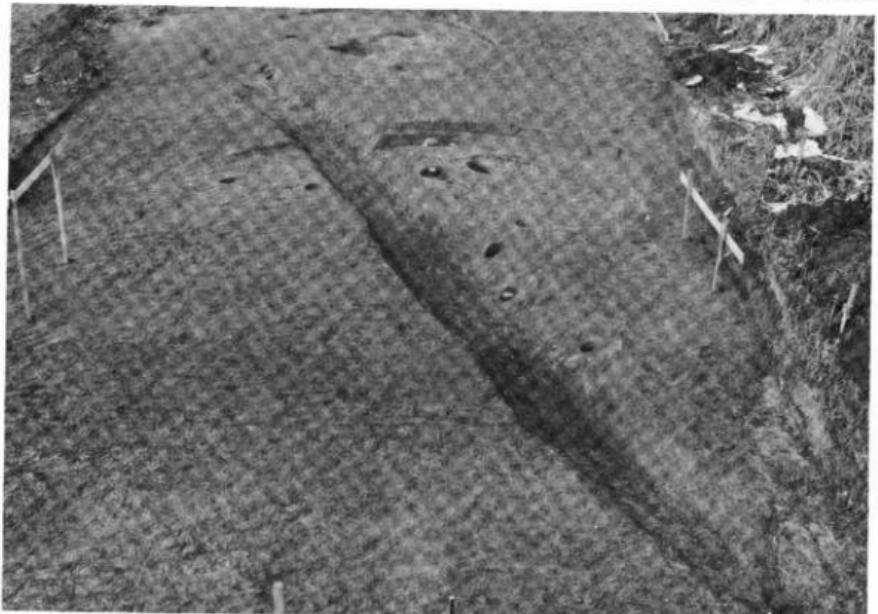
2 遺跡近景（西から）



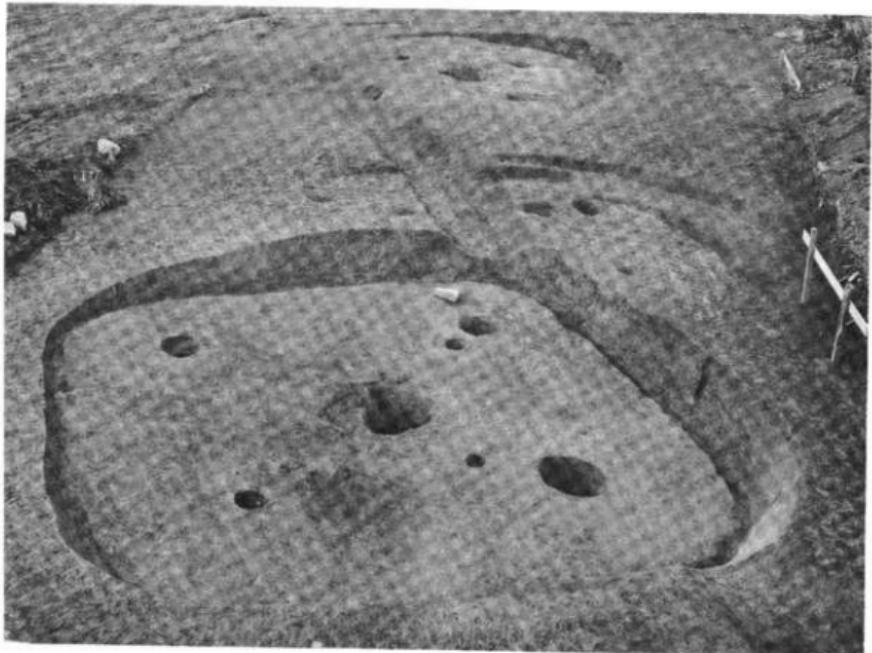
1 石塁部の遺構群(南から)



2 石塁部の遺構群(手前から工房跡、唐、3・2号住、1号住居跡)



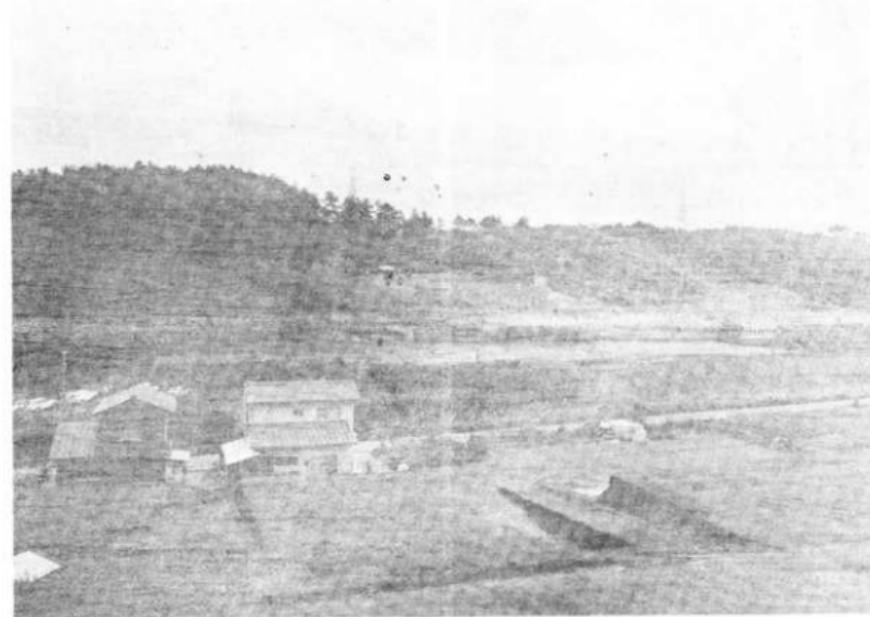
1 丘腹部の遺構群（南から）



2 丘腹部の遺構群（手前から工房跡、溝、3・2号住、1号住居跡）



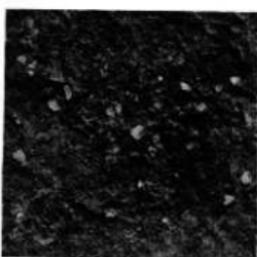
1 遺跡遠景(南西から)



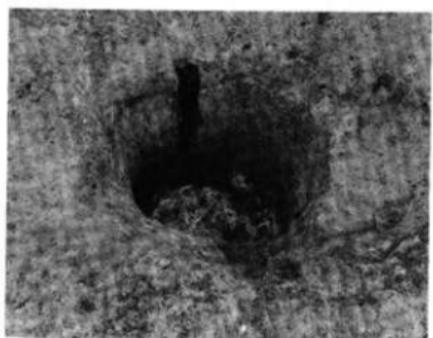
2 遺跡近景(西から)



1 玉作工房跡（南から）



3 玉類未成品出土状態



2 工作用ピット（上、土層堆積状況 下、ピット内部）

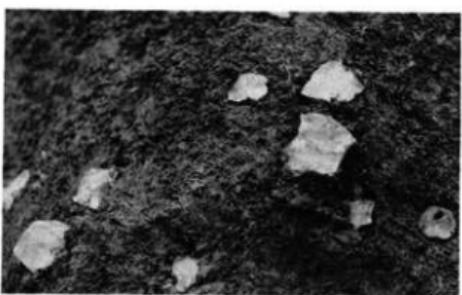
4 第2ピット内土器出土状態



1 溝状遺構（東から）



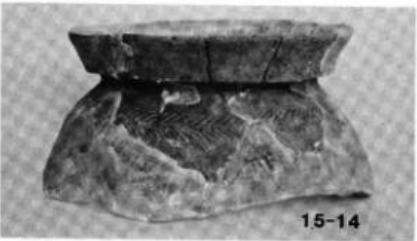
2 溝内土器出土状態

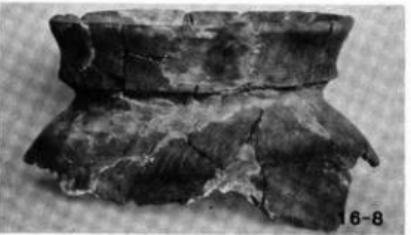
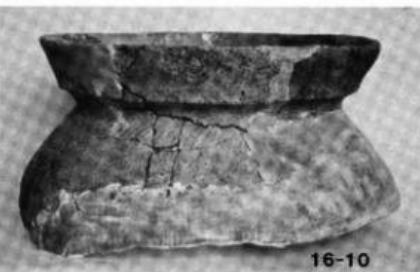


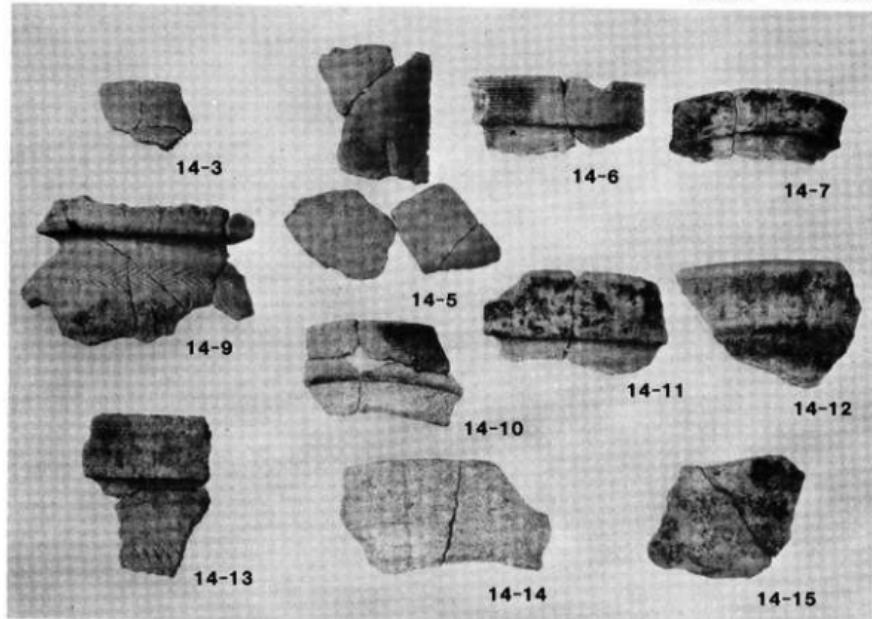
3 溝内玉類出土状態



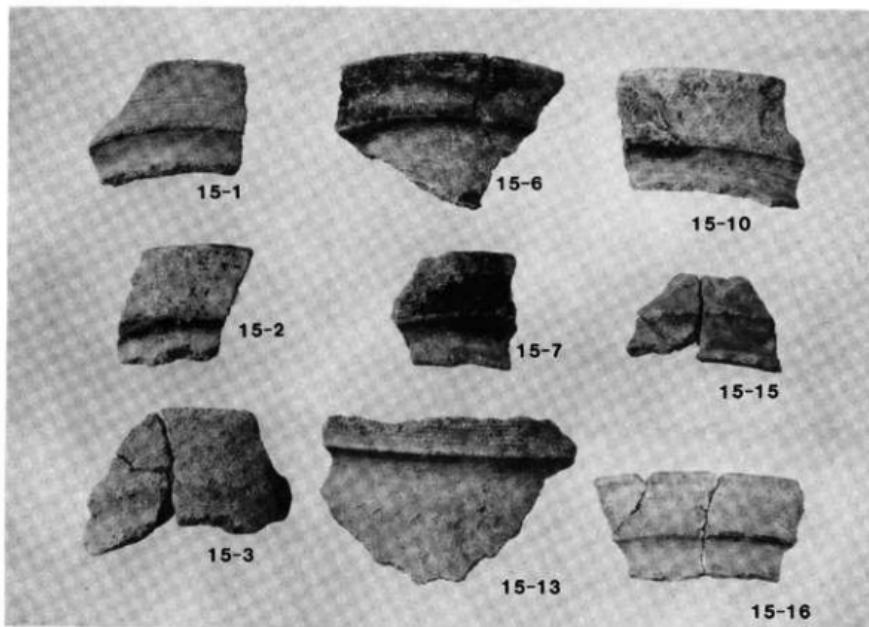
4 溝内土層堆積状況



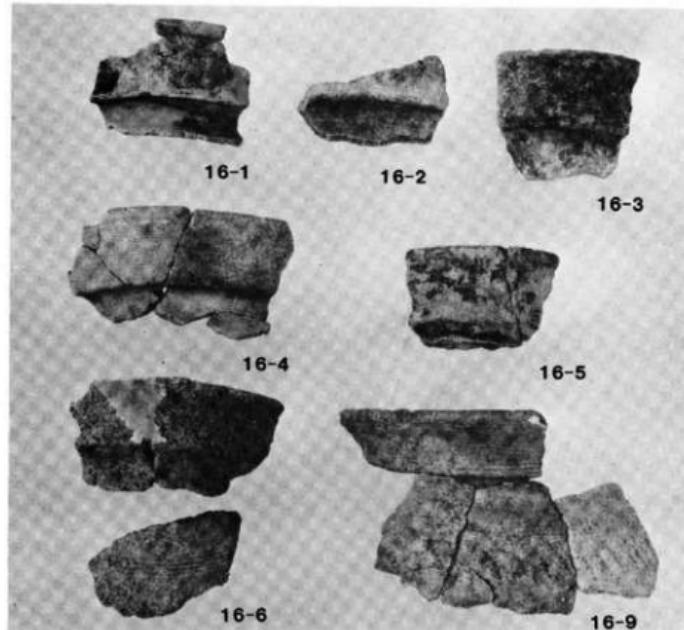




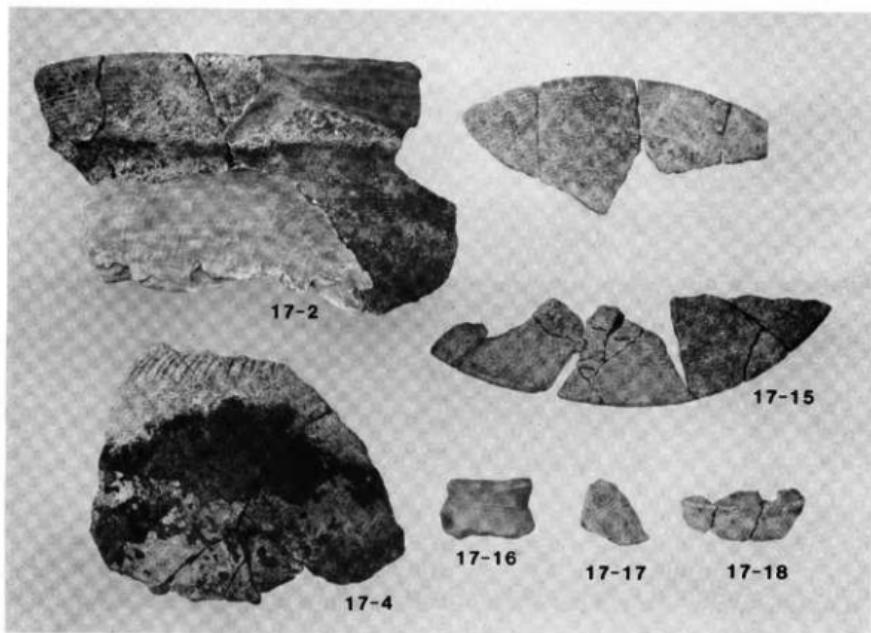
1 溝状遺構出土土器



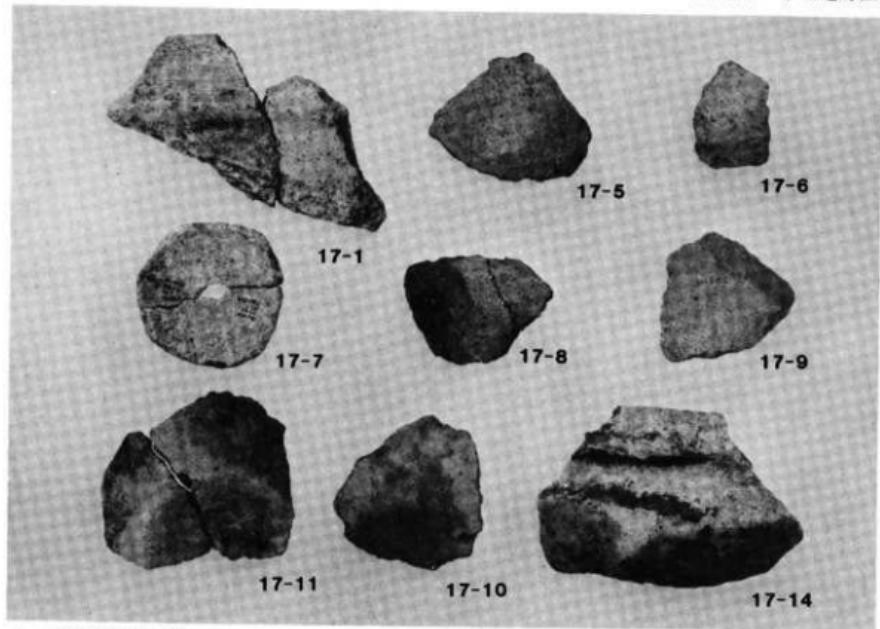
2 溝状遺構出土土器



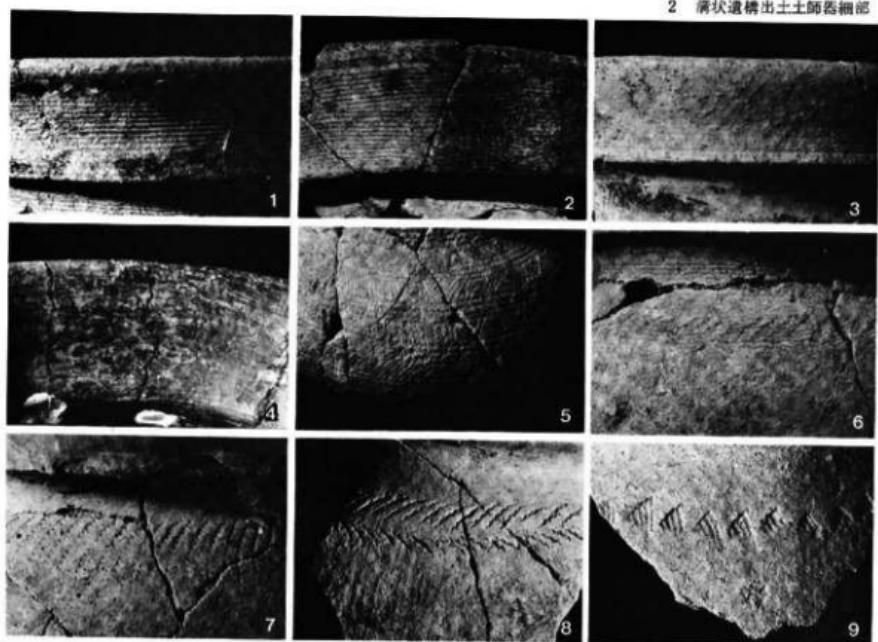
1 溝状遺構出土土師器



2 溝状遺構出土土師器



1 溝状遺構出土土師器



1 裁口縁部平行沈線（具微腹縫）

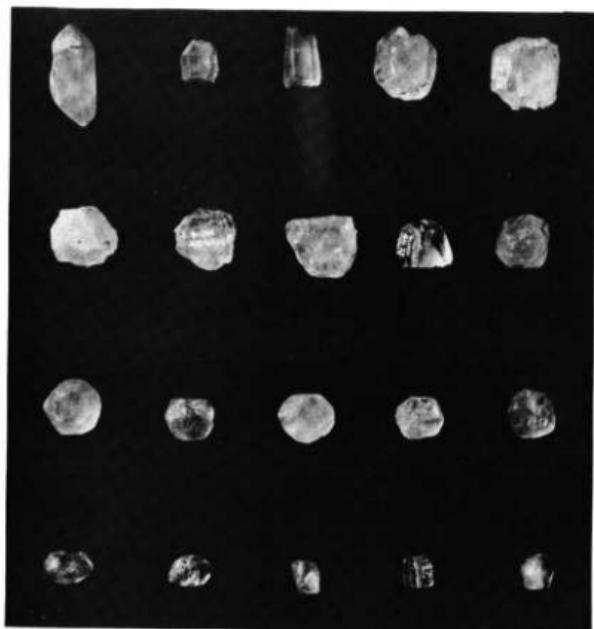
4 裁口縁部内面ヘラ磨き

2 裁口縁部平行沈線（櫛状工具）

5 直口縁部文様

3 裁口縁部ヨコナデ

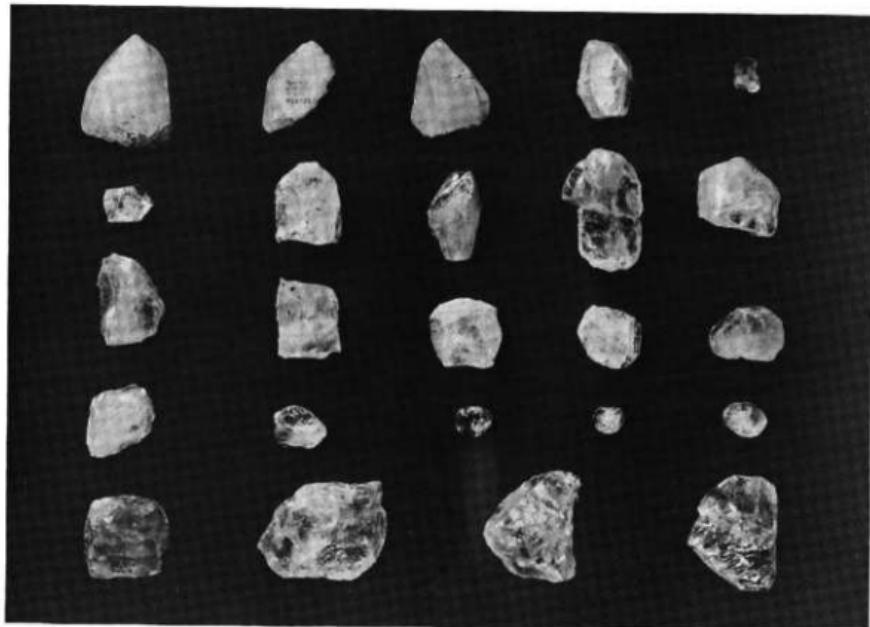
6～9 壺肩部各種文様（貝殻敷縫）



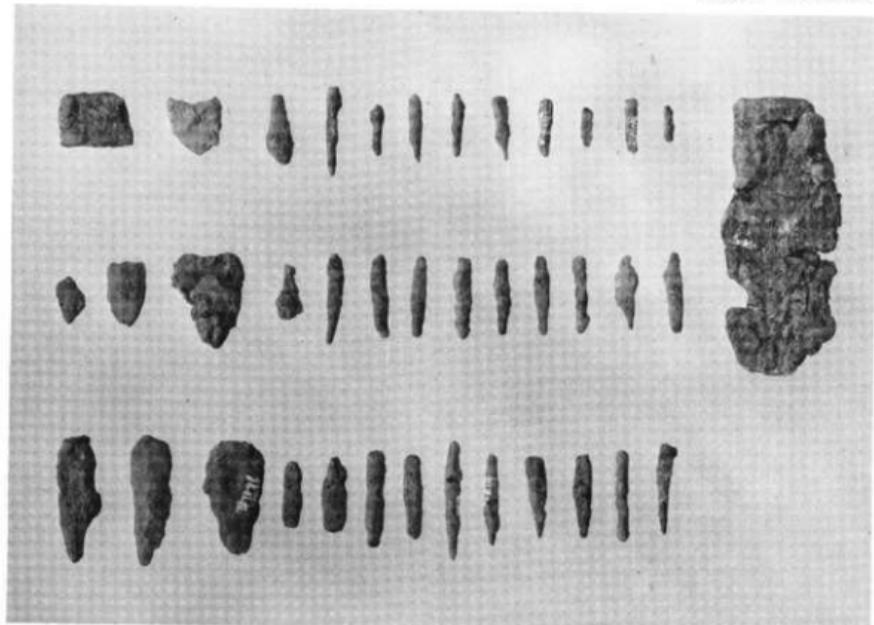
1 工房跡出土玉類未成品と剥片



3 滾状遺構出土碧玉製造物



2 滾状遺構出土玉類未成品と剥片



1 工房跡出土鉄製工具



2 工房跡出土土製品



3 穿孔具先端の形状が知られる水晶製玉



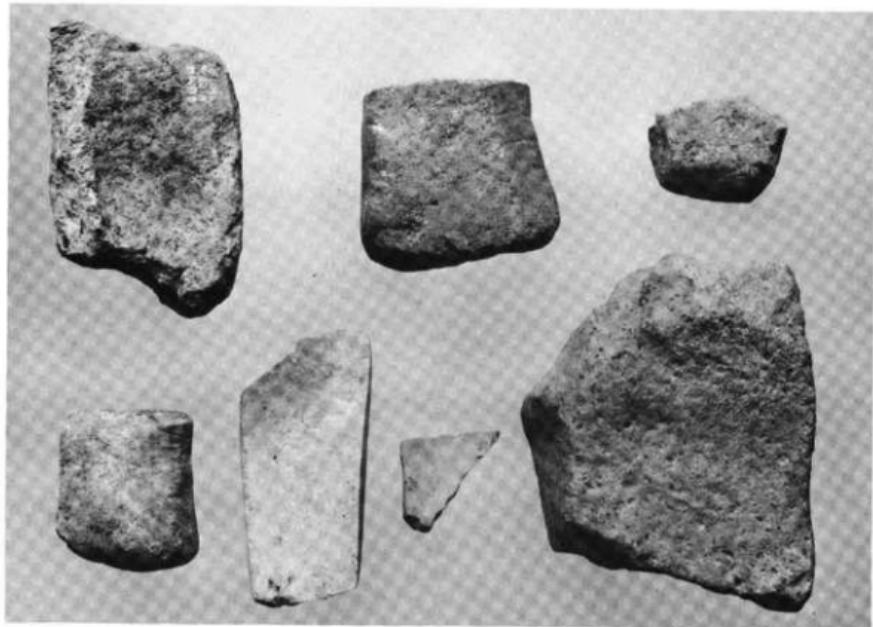
4 底面に残る鉄型工具による擦痕



5 溝状遺構出土鉄製工具



1 工房跡出土砥石と台石



2 深状遺構出土砥石と台石

II 夫敷遺跡

1

—八東郡東出雲町出雲郷所在—

1 調査の経過.....	73
2 遺跡の概要.....	73
3 調査の概要.....	74
4 結語.....	76

挿図目次

第1図 遺跡の位置.....	74
第2図 グリッド配置図.....	75
第3図 第3・6グリッド七層断面図.....	76

1 調査の経過

夫敷遺跡はかつて出雲國府跡およびこれに併設されていたという意宇郡々家跡に比定されていたところで、意宇川下流平野の中央やや東寄りの水田中にある。現在、出雲國府跡については周知のとおり昭和43年から3ヶ年にわたる発掘調査によって夫敷遺跡の西方約1.5 km、松江市大草町の六所神社境内およびその後方水田中にその位置が確定している。ただそれとは別にこの夫敷遺跡から古く耕作中に古瓦、陶磁器類の出土が伝えられていることはこれまで直接調査されたことがないだけに、想定される地下遺構の性格とも関連して注目すべき事柄といえる。

今回の調査はそうしたことからとりあえず小規模な試掘調査を行ってグリッド内における遺物の包含状態等を検索し、併せて将来的な遺跡の取り扱いについてその基礎資料を得る目的で実施したものである。

調査は松本岩雄、三宅博士が担当し、期間は稻の刈り入れ終了後の11月24日から12月4日までの11日間を費してこれを行った。

調査はまず、検出される遺構が宮衙跡である可能性を考慮し、調査対象地区に南北線を磁北にとり、これと直交する東西線を座標軸に $2 \times 2 m$ の試掘調査区を8区設定し南から北へ順次1～8と番号を付した。試掘に際しては遺物が出土した場合、さらに深く掘り進めば遺構を損ねる恐れがあるため、その土層上面において掘削を中止し、遺物包含層までの土層図と写真を作成して作業を終了することにした。

2 遺跡の概要

今年度調査の一環として小規模な試掘を行った夫敷遺跡は、意宇川下流平野の中央よりやや東方に位置し、その所在する地籍は八束郡東出雲町大字出雲郷字夫敷1524番地外である(第1図)。ここは平野の南側に連なる山裾に沿って東流する意宇川がやがて北方へ流路を変えようとするその西岸に位置している。現在、付近一帯は意宇川が潤す肥沃な出雲地帯となっているが、その字名をみると第2図にみるとおり条里制施行に由来すると思われる丁ヶ坪、八反ヶ坪、大糸手等の地名が随所に残されている。^(註1)

夫敷遺跡が衆目をあつめるに至ったのは、大正14年に刊行された『島根県史』第5巻に野津左馬之助が出雲國府跡および意宇郡々家跡をこの地に比定したことにはじまる。すな



第1図 遺跡の位置

調査が進むに従って『出雲國風土記』に記載された諸種の地物との距離、方向等の再検討がなされ、さらに古記録、遺物の散布状態などから出雲國庁の所在地は夫敷遺跡の西方約1.5kmに位置する現在の松江市大草町六所神社付近であろうとする考え方が出されるに至った。そのため松江市教育委員会は昭和43年から3ヶ年にわたり六所神社を中心とした一帯の発掘調査を実施し、出雲國庁にふさわしい規格性に富む官衙遺構とともに木簡、墨書き器、瓦、土師器、須恵器など各種多数の遺物を発見した。その後同地は「出雲國府跡」の名称で国の史跡指定を受け、県教育委員会によって保存整備を完了している。

しかし、夫敷遺跡に関してはこれまで発掘調査といったものは全くなされておらず、その性格等については不明である。官衙の存在を思わせる字名が残っていることやこの付近で耕作中に瓦、陶磁器類が出土したという古者の話などからすれば、この地に何らかの官衙的色彩の濃い遺構が存在することは充分考慮されるところである。

3 調査の概要

調査は、対象地区に南北線を磁北にとり、これと直交する東西線を座標軸に $2 \times 2\text{m}$ の試掘坑8個を設定し、南から北へ順次1~8と番号を付してこれを実施した。以下グリッドごとに土層堆積状況、出土遺物について記すこととする。

第1グリッド 厚さ20~25cmの耕作土を除くと灰黄色粘質土となり、この層から磁石1

わち『出雲國風土記』にみえる「又西廿一里、至國庁意宇郡家北十字街。即分為二道、一正西道、一往北道、去北四里二百六十六步、至野北塙朝内殿。」をもって「字上夫敷は上府敷の意義にして府敷則ち國府の敷地たるを表わすものなり、此國府在地なる府敷に隣接して意宇郡家址ありて之を下夫敷と称するを以て其地勢より一方を上府敷と唱へしなり（後略）」とした。その後これにもとづいて夫敷に出雲國庁跡の石碑が建てられて今日に至っている。

しかし戦後、条里制の研究、寺院跡の

が出土している。

第2グリッド このグリッドと次の第3グリッドについて遺物包含層より下の土層堆積状況を観察するため表土下約80cmの深さまで掘り下げた。耕作土21~23cmを除くとその下層は灰黄色粘質土30cm、黒灰色土10~12cm、灰白色粘土層2~3cmが観察された。以下は黒色砂質土層で下方に

なるほど粒子が荒くなり、自然木を含んでいる。遺物は第2層目の灰黄色粘質土中から弥生式土器口縁部片1、白磁片1が出土している。

第3グリッド 耕作土22cmを除くと上層から順に青灰色粘土層38~40cm、灰黄色粘土層20cm、灰白色粘土層2~3cm、黒色粘質土22cmとなっており、その下層は黒色砂質土層で下方へいくに従って砂粒子が荒くなる。このうち青灰色粘土層中から陶器片1が出土している。ほかに、黒色粘質土中からは自然木片、葉、ドングリ等を得ているが、人工遺物の出土はみていらない。

第4グリッド 耕作土35cmを除くとその下層は青灰色粘土層となっている。他のグリッドにおいてはこの青灰色粘土層中に遺物を含んでいるが、ここでは全く出土していない。

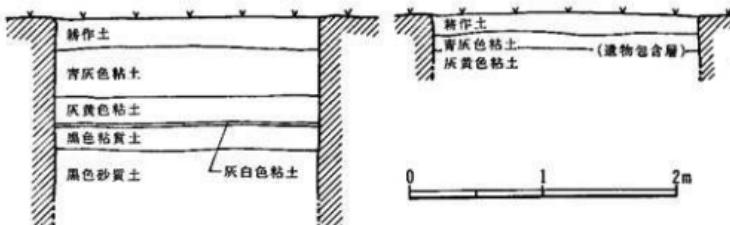
第5グリッド 厚さ20cmの耕作土を除くと暗青灰色粘土層となり、この層から土師器片が出土している。

第6グリッド 耕作土15cmを除去すると下層は青灰色粘土層12cm、灰黄色粘土層となっている。遺物としてはこの2つの層から陶器片が出土している。

第7グリッド 耕作土12cmを除くと下層は青灰色粘土層10cm、灰黄色粘土層となっており、遺物としては灰黄色粘土層中から陶器片、須恵器高台付环などが出土している。

第8グリッド 耕作土15cmを除くと下層は青灰色粘土層10cm、灰黄色粘土層となっている。遺物はこの2つの層から土鍬、土師器片、須恵器片が出土している。





第3図 第3・6グリッド土層断面図

4 結 語

今回行った試掘調査はきわめて小規模のものであったため、遺構の存在はもとより遺物分布の範囲といったものは確認するまでには至らなかったが、各グリッドとともに少量ながら各種遺物の出土したことが注意された。出土した遺物は弥生時代のものから奈良、平安時代にわたるものまで含んでおり、それらはいずれも耕作土直下の青灰色粘土層あるいは灰黄色粘質土に混在していた。調査面積が狭いことに加えて冬期調査という悪条件が重ったためこれらに伴う遺構あるいはその層位的な把握などといった問題については明確にし得なかったが、各グリッドから少量ながら各種遺物の出土していることは付近に何らかの遺構が存在することを示唆しているものといえる。今後、広範な試掘調査を実施して遺跡の範囲を早急に確認し、その結果をもとに全面的な発掘調査がなされるべきものであろう。

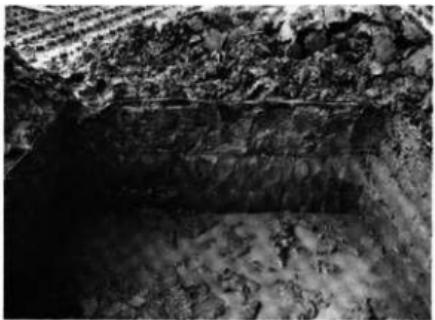
(三宅博士)

- 註1 中沢四郎「条里遺構」「八雲立つ風土紀の丘周辺の文化財」島根県教育委員会（昭和50年）
 2 野津左馬之助「山柵、石堀、籠城国府の位置及歴代」『島根県史』第5巻（大正14年）
 3 松江市教育委員会「山柵国府跡発掘調査概報」（昭和46年）及び町田章「古代官道跡」「八雲立つ風土紀の丘周辺の文化財」島根県教育委員会（昭和50年）
 4 島根県教育委員会「史跡出雲国府跡環境整備報告書」（昭和50年）

図 版



1. 夫敷遺跡遠景 (東から)



2, 3 (左上) • 4 (右上) • 5 (左下) • 8 (右下) グリットの層序

昭和52年3月15日印刷
昭和52年3月30日発行

国道9号線バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

編集・発行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地
印刷 株式会社報光社
平田市平田町993